

新発田城跡 発掘調査報告書 IX

(第21地点)

2013

新発田市教育委員会

例 言

1. 本報告書は、新潟県新発田市大手町6丁目4番16号ほかに所在する、新発田城跡第21地点の発掘調査記録である。
2. 発掘調査は、陸上自衛隊新発田駐屯地内の建物建設に伴って、新発田市教育委員会が調査主体となり、平成19年7月13日～7月23日に確認調査を実施し、平成23年8月1日～10月21日に本発掘調査を実施した。整理作業は、発掘調査終了後の平成23年11月～平成24年3月、平成24年8月～平成25年3月まで実施し、調査報告書を作成した。
3. 本発掘調査に要した経費は、事業主体である防衛省北関東防衛局が全額負担した。
4. 遺物・記録類は、新発田市教育委員会が一括保管している。出土遺物の注記は、「S J 21区」とし、グリッド・遺構名・層位・日付を続けて付した。
5. 遺構の実測は、調査担当者 鶴巻康志の指示で調査員 一箭義貴と作業員が行った。出土遺物は、鶴巻の指示のもと整理作業員が接合・復元し、実測・トレース・レイアウト・観察表作成は、鶴巻の指示のもと調査員 一箭義貴・整理作業員が行った。なお、実測・トレース・写真撮影・観察表作成の一部は木製品を柳吉田建設、陶磁器類の一部を株式会社イビソクに委託した。木製品の顕微鏡写真、人骨の写真は各分析者、残りは鶴巻が撮影した。
6. 木製品に残る墨痕・捺印の解説は、新潟大学人文学部原直史氏、中林隆之氏に協力いただいた。
7. 木製品の樹種同定は、新発田市の委託を受けた髙バレオ・ラボが行い、その報告を掲載した。出土人骨は日本歯科大学奈良貴史氏に鑑定を依頼し、原稿を執筆いただいた。
8. 本報告書の執筆はⅡ-7を日本歯科大学奈良貴史、Ⅱ-8を髙バレオ・ラボ黒沼保子、ほかを鶴巻が担当し、編集は鶴巻が行なった。
9. 発掘調査から本書の作成まで、下記の諸氏・機関に協力いただいた。
安藤正美・飯村均・大橋康二・小田由美子・末永福男・関雅之・関根達人・戸根与八郎・水澤幸一・横山勝栄・吉田博行・渡邊ますみ・新発田市古文書解説研究会・新潟県教育庁文化行政課・陸上自衛隊新発田駐屯地

凡 例

1. 本書に掲載した遺跡の地図上の位置は、国土院発行の1/50,000地形図・1/25,000地形図の「新発田」の中に示されている。
2. 本書に掲載した地図・絵図のうち、第1図は図の上方が真北を指す。ほかは磁北を図上に示し、スケールを表示した。ただし、近世の絵図面、近代の地図は、正確に縮尺・方位を復元できなかったものが多く、これらについては方位、スケールを表示していない。
3. 本調査地点の主要な遺構である二ノ丸の外堀は、近代に埋まった遺構である。しかし、開発による掘削範囲が堀を横切ることから堀横断面の記録が可能であり、近世新発田城の様相を顕著に示すため、本調査の対象とした。また、近世の土塁を壊す際に生じたとみられる穴も城廃絶時の様相を示すため調査対象とした。このため、明治時代後半以降に堆積したI'層を掘り込んでいた穴を攪乱とした。なお、工事による掘削は堀外側の城下部分へ延びるが、二ノ丸までを埋蔵文化財包蔵地としているため、調査対象外である。

<遺構>

1. 本書に掲載した平面図は、全体図1/200、部分図1/80、詳細図1/40・1/20とし、断面図は1/40・1/20とした。第1・2図の上が真北、ほかは磁北を図上に示した。磁北は真北より西偏7°20'である。
2. 本書に掲載した遺構は検出順に番号を付した。ピットは整理作業時に番号を振り直し、他の遺構は、検出当初の番号を踏襲した。攪乱と判明したもの、遺構名を変更したものについては欠番としている。攪乱の範囲は平面図に破線で示した。
3. 断面図の位置を示す平面図上のポイントは、各部分図ごとにアルファベットで示した。
4. 土色の観察は、『新版標準土色帖』（小山・竹原1967）を用いた。

<遺物>

1. 本書に掲載した遺物実測図・拓影は、大形木製品を1/8、壺・壺・鐏鉢類を1/4、下駄を1/6、土器・陶磁器・木製品の小形品、石製品・金属製品などを1/3、念珠・微細な文様がある磁器・漆器を1/2とし、図中にスケールを示した。
2. 土器・陶器の拓影は、内面を断面図の右側（内底面は上）、外面を断面図の左側（外底面は下）に置いた。鐏鉢の拓影はその逆である。
3. 漆器の下地色は赤色漆のみをトーンで示し、黄漆絵、黒色漆+金蒔絵は手書き、青（緑）漆、托・柄杓・下駄の部分的な黒色漆はトーンで表現して凡例を図中に示した。
4. 遺物番号は本書での通し番号であり、本文・挿図・観察表ともに同一の番号とした。
5. 出土陶磁器類の分類・年代は、下記の文献を参考にした。

古代土師器・須恵器（新潟古代土器研究会編2004）、中世陶磁器全般（中世土器研究会編1995）、古瀬戸（藤澤1996）、瀬戸美濃（藤澤2004・愛知県史編さん委員会2007）、珠洲（吉岡1994）、越前（樫崎編1986・福井県教育委員会1983）、北越前（鶴巻1997）、中世土師器（鶴巻2004）、近世遺物全般（江戸遺跡研究会編2001）、肥前陶磁（九州近世陶磁学会編2000）、越中瀬戸（宮田1997）、信楽・京信楽系（畑中2003）、相馬（関根1998）、壺養（柳田1990）、近世土師器（鶴巻ほか2001）、漆器（西柳2006）

目 次

I 序 言

1. 遺跡の位置と立地	1
2. 第21地点の位置と付近の土地履歴	1
3. 本発掘調査に至る経過	4
4. 調査体制	5
5. 本調査と整理作業の経過	5

II 発掘調査の概要

1. 調査区の設定	7
2. 基本層序と遺構の種類	8
3. 調査区①の遺構	9
4. 調査区①の出土遺物	16

5. 調査区②の遺構	16
6. 調査区②の出土遺物	35
7. 新発田城跡第21地点出土土人骨の人類学的調査報告	65
8. 新発田城跡第21地点出土木製品の樹種同定	68

III ま と め

発掘調査の成果	71
引用参考文献	74
報告書抄録	巻末

挿 図 目 次

第1図 新発田城跡の位置	1
第2図 埋蔵文化財包蔵地の範囲と調査地点	2
第3図 明治初年・36年の二ノ丸屋敷地とその周辺	3
第4図 調査地点の範囲とグリッド設定	7
第5面 基本層序と平面図の配置	8
第6図 全体図 (折込み8-9)	
第7図 平面図1	9
第8図 平面図1の遺構詳細図	11
第9図 平面図1の遺構断面図 (1)	12
第10図 平面図1の遺構断面図 (2)	13
第11図 P14b・井戸1・土坑5の出土遺物	14
第12図 土坑6・8・10～12・17・19の出土遺物	15
第13図 平面図2・堀断面 (折込み16-17)	
第14図 平面図3	18・19
第15図 平面図3の遺構詳細図 (1)	20
第16図 平面図3の遺構詳細図 (2)	21
第17図 平面図3の遺構断面図 (1)	22

第18図 平面図3の遺構断面図 (2)	23
第19図 平面図4の遺構詳細図 (1)	26
第20図 平面図4と遺構断面図 (2)	27
第21図 平面図4の遺構詳細図 (1)	28
第22図 平面図4の遺構詳細図 (2)	29
第23図 土坑22の出土遺物	36
第24図 土坑23・24aの出土遺物	37
第25図 土坑24a・24b・24cの出土遺物	38
第26図 土坑24c・25・26の出土遺物	40
第27図 土坑27・28aの出土遺物	41
第28図 土坑28a・32・34の出土遺物	42
第29図 土坑36・37・39の出土遺物	43
第30図 土坑39の出土遺物	44
第31図 土坑40・46、溝1・2aの出土遺物	46
第32図 溝2b・3・4・6、堀1の出土遺物	47
第33図 堀1・II層の出土遺物	48
第34図 土坑24b・24cの出土木製品	50
第35図 土坑24cの出土木製品 (1)	51
第36図 土坑24cの出土木製品 (2)	52

第37図	土坑24cの出土木製品(3)	53
第38図	土坑24c・28a・37の出土木製品	54

第39図	土坑39・40の出土木製品	55
第40図	堀1ほかの出土木製品	56

表 目 次

表1	絵図等による二ノ丸屋敷地の履歴	2
表2	遺構一覧表	29
表3	土器・陶磁器・石製品・金属製品観察表	58

表4	木製品観察表	63
表5	器種別の樹種構成	68
表6	樹種同定結果一覧	70

写真図版目次

図版1	新発田城跡第21地点の全景ほか
図版2	第21地点付近の絵図・測量図
図版3	調査区①の遺構(1)
図版4	調査区①の遺構(2)
図版5	調査区②の遺構(1)
図版6	調査区②の遺構(2)
図版7	調査区②の遺構(3)
図版8	調査区②の遺構(4)
図版9	調査区②の遺構(5) 出土遺物(1) 石製品・土師器ほか
図版10	出土遺物(2) 陶磁器(1)
図版11	出土遺物(3) 陶磁器(2)
図版12	出土遺物(4) 陶磁器(3)
図版13	出土遺物(5) 陶磁器(4)
図版14	出土遺物(6) 陶磁器(5)
図版15	出土遺物(7) 陶磁器(6)

図版16	出土遺物(8) 陶磁器(7)
図版17	出土遺物(9) 陶磁器(8)
図版18	出土遺物(10) 陶磁器(9) ほか
図版19	出土遺物(11) 木製品(1)
図版20	出土遺物(12) 木製品(2)
図版21	出土遺物(13) 木製品(3)
図版22	出土遺物(14) 木製品(4)
図版23	出土遺物(15) 木製品(5)
図版24	出土遺物(16) 木製品(6)
図版25	出土遺物(17) 木製品(7)
図版26	出土遺物(18) 木製品(8)
図版27	新発田城跡第21地点出土の人骨
図版28	新発田城跡第21地点出土木製品 の光学顕微鏡写真(1)
図版29	新発田城跡第21地点出土木製品 の光学顕微鏡写真(2)

I 序 言

1. 遺跡の位置と立地

新発田市は、新潟県北部の下越地方に位置し、人口は約10万人を数える。総面積532.82km²のうち、東寄り約7割が飯豊連峰・梯形山脈・二王子山・五頭連峰による山間地である。山地の西方に位置する中心市街地付近は、飯豊連峰から流れる加治川によって形成された扇状地の扇端部にあたり、新潟市中心市街地の東方約20kmに位置する。周囲には水田地帯が広がり、市街地の北側を加治川が西流する(第1図)。

新発田市街地の前身は近世の新発田藩城下町で、当時の城下の範囲は東西1.6km、南北2km程である。新発田城の城郭城は加治川支流の新発田川の旧河道を利用して堀とし、歪んだ瓢形を呈している。不整五角形の本丸の周囲を二ノ丸が取り囲み、その南東部に三ノ丸が付く輪郭・梯郭式の併用の曲輪配置となる。本丸と藩の公的施設・重臣屋敷地が集中する二ノ丸と、二ノ丸西ノ門(西川門)に隣接する御馬屋・御作事所を埋蔵文化財包蔵地としており、新発田市教育委員会ではこれまでに24箇所にあたる発掘調査を実施している。このうちの第1～4・7～12・16・19・20～22・24地点は、本丸および二ノ丸の北部にあたる新発田駐屯地内の施設建設に伴う調査である(第2図)。

2. 第21地点の位置と付近の土地履歴

新発田城は、慶長2(1598)年、加賀大聖寺から入封した溝口氏により慶長7(1602)年頃から築城された。第21点は、二ノ丸西ノ門(西川門)の南にあたる外堀及び、土塁・屋敷地にあたる。正保年間御家中絵図(1645



第1図 新発田城跡の位置

年頃作成。以下、絵図・測量図の呼称は表1参照)によれば、付近の外堀は幅9間、深さ一丈、土層(塙)の高さは四間と記載され、おおむね幅16.2m、深さ3m、土層の高さは7.2mということになる。複数の絵図・地図で確認すると(表1・図版2)、調査区周辺の堀は西ノ門から南下して対岸の城下、片田町の通りに沿って東へ折れ、弧状に南へ屈曲しながら二ノ丸中ノ門・三ノ丸方向へ延びる。西ノ門から南の土層は、正保・寛文絵図に三箇所の出隅があり、最も南側の出隅付近に櫓が描かれている。一方、享保絵図・文化絵図・家中屋敷割図・惣絵図(第2図)や明治初年絵図(第3図)、明治7年測量図には西ノ門南の出隅は二箇所となり、櫓の位置は享保・文化絵図が片田町側、家中屋敷割図と明治以降の絵図・測量図には西ノ門側の出隅上に描かれている。

このため、土層上の櫓は別位置に移転したと考えられる。

土層の内側は二ノ丸屋敷地にあたり、付近は重臣クラスの居住域となっている。江戸初期の正保・寛文絵図には「連水九郎次郎」と記載があり、江戸後期以降の惣絵図などには「堀丈太夫」の名がみえるため、江戸後期から幕末までは「堀」家の屋敷地であった。なお、堀丈太夫は三条城主堀直清を出自とし、藩の家老職を務める家柄である。享和3(1803)年10月に堀丈太夫預かりの西ノ門脇櫓が焼失し、翌文化元(1804)年に櫓再建圖の目的で絵図が作成されているため、上述した櫓の移転は火災後の建て替えであろう。なお、今回の調査地点は享和年間まで櫓が建っていた場所を含む。

『新発田藩年代記』(高橋2005)などから西ノ門脇櫓の再建履歴をさがすと、上述した享和3年の火災以

表1 絵図等による二ノ丸屋敷地の履歴

年代	西暦	事項	地図・図名	本図での呼称	図版・図
享保7年頃	1672	幕府領地。			
正保2年	1685	堀丈太夫九郎次郎、片田町・堀の代絵に描く。	正保年御家系繪圖	正保繪圖	図版2
享保3年	1686	御家系成。この頃堀が完成。			
寛文4年	1664	御家系成。この頃堀が完成。	寛文四年御家系繪圖	寛文繪圖	図版2
寛文8年	1668	大田より移住か。			
寛文9年	1669	大田より移住か。			
天明2年	1781	五ノ門・七ノ門門脇櫓移転。	天明二年御家系繪圖	天明繪圖	図版2
享保4年	1783	大田で寛文時。	享保四年御家系繪圖	享保繪圖	図版2
享保5年	1784	西ノ門門脇櫓移転。	享保五年御家系繪圖	享保繪圖	図版2
享和3年	1803	西ノ門門脇櫓移転。	享和三年御家系繪圖	享和繪圖	図版2
文化元年	1804	堀丈太夫による再建。	文化元年御家系繪圖	文化繪圖	図版2
天保年間	1830	西ノ門門脇櫓移転。	天保年間御家系繪圖	天保繪圖	図版2
明治11年頃	1840	堀丈太夫九郎次郎。	明治十一年御家系繪圖	明治繪圖	図版2
明治25年	1892	堀丈太夫九郎次郎。	明治二十五年御家系繪圖	明治繪圖	図版2
明治30年	1897	堀丈太夫九郎次郎。	明治三十年御家系繪圖	明治繪圖	図版2
明治35年	1902	堀丈太夫九郎次郎。	明治三十五年御家系繪圖	明治繪圖	図版2
明治40年	1907	堀丈太夫九郎次郎。	明治四十年御家系繪圖	明治繪圖	図版2
明治45年	1912	堀丈太夫九郎次郎。	明治四十五年御家系繪圖	明治繪圖	図版2
明治50年	1917	堀丈太夫九郎次郎。	明治五十年御家系繪圖	明治繪圖	図版2
明治55年	1922	堀丈太夫九郎次郎。	明治五十五年御家系繪圖	明治繪圖	図版2
明治60年	1927	堀丈太夫九郎次郎。	明治六十年御家系繪圖	明治繪圖	図版2
明治65年	1932	堀丈太夫九郎次郎。	明治六十五年御家系繪圖	明治繪圖	図版2
明治70年	1937	堀丈太夫九郎次郎。	明治七十年御家系繪圖	明治繪圖	図版2
明治75年	1942	堀丈太夫九郎次郎。	明治七十五年御家系繪圖	明治繪圖	図版2
明治80年	1947	堀丈太夫九郎次郎。	明治八十年御家系繪圖	明治繪圖	図版2
明治85年	1952	堀丈太夫九郎次郎。	明治八十五年御家系繪圖	明治繪圖	図版2
明治90年	1957	堀丈太夫九郎次郎。	明治九十年御家系繪圖	明治繪圖	図版2
明治95年	1962	堀丈太夫九郎次郎。	明治九十五年御家系繪圖	明治繪圖	図版2
昭和元年	1906	堀丈太夫九郎次郎。	昭和元年御家系繪圖	昭和繪圖	図版2
昭和5年	1930	堀丈太夫九郎次郎。	昭和五年御家系繪圖	昭和繪圖	図版2
昭和10年	1935	堀丈太夫九郎次郎。	昭和十年御家系繪圖	昭和繪圖	図版2
昭和15年	1940	堀丈太夫九郎次郎。	昭和十五年御家系繪圖	昭和繪圖	図版2
昭和20年	1945	堀丈太夫九郎次郎。	昭和二十年御家系繪圖	昭和繪圖	図版2
昭和25年	1950	堀丈太夫九郎次郎。	昭和二十五年御家系繪圖	昭和繪圖	図版2
昭和30年	1955	堀丈太夫九郎次郎。	昭和三十年御家系繪圖	昭和繪圖	図版2
昭和35年	1960	堀丈太夫九郎次郎。	昭和三十五年御家系繪圖	昭和繪圖	図版2
昭和40年	1965	堀丈太夫九郎次郎。	昭和四十年御家系繪圖	昭和繪圖	図版2
昭和45年	1970	堀丈太夫九郎次郎。	昭和四十五年御家系繪圖	昭和繪圖	図版2
昭和50年	1975	堀丈太夫九郎次郎。	昭和五十年御家系繪圖	昭和繪圖	図版2
昭和55年	1980	堀丈太夫九郎次郎。	昭和五十五年御家系繪圖	昭和繪圖	図版2
昭和60年	1985	堀丈太夫九郎次郎。	昭和六十年御家系繪圖	昭和繪圖	図版2
昭和65年	1990	堀丈太夫九郎次郎。	昭和六十五年御家系繪圖	昭和繪圖	図版2
昭和70年	1995	堀丈太夫九郎次郎。	昭和七十年御家系繪圖	昭和繪圖	図版2
昭和75年	2000	堀丈太夫九郎次郎。	昭和七十五年御家系繪圖	昭和繪圖	図版2
昭和80年	2005	堀丈太夫九郎次郎。	昭和八十年御家系繪圖	昭和繪圖	図版2
昭和85年	2010	堀丈太夫九郎次郎。	昭和八十五年御家系繪圖	昭和繪圖	図版2
昭和90年	2015	堀丈太夫九郎次郎。	昭和九十年御家系繪圖	昭和繪圖	図版2
平成元年	1989	堀丈太夫九郎次郎。	平成元年御家系繪圖	平成繪圖	図版2
平成5年	1993	堀丈太夫九郎次郎。	平成五年御家系繪圖	平成繪圖	図版2
平成10年	1998	堀丈太夫九郎次郎。	平成十年御家系繪圖	平成繪圖	図版2
平成15年	2003	堀丈太夫九郎次郎。	平成十五年御家系繪圖	平成繪圖	図版2
平成20年	2008	堀丈太夫九郎次郎。	平成二十年御家系繪圖	平成繪圖	図版2
平成25年	2013	堀丈太夫九郎次郎。	平成二十五年御家系繪圖	平成繪圖	図版2
平成30年	2018	堀丈太夫九郎次郎。	平成三十年御家系繪圖	平成繪圖	図版2
令和元年	2019	堀丈太夫九郎次郎。	令和元年御家系繪圖	令和繪圖	図版2



第2図 堀丈文化財包蔵地の範囲と調査地点

外に、寛文8(1668)年の大火と翌年の地震の後にあたる元禄2(1689)年に「五月廿一日西御門脇御櫓御音請成就」の記事(重要文化財新発田城修理委員会1960)、享保4(1719)年四月八日の火災による焼失届出(享保四年絵図)があり、移転前の場所でも二度建て替えられているとみられる。

明治新政府により新発田藩主が知藩事に任じられた翌年の明治3年に、他の旧家老職が正権の大参事に任じられるなか、幕末まで調査地点に居住していた堀丈太夫は役職を免じられている(新発田市史編纂委員会1981)。明治初年絵図(明治2・3年頃作成)によれば、堀丈太夫は屋敷地を三ノ丸に移し、旧宅の跡地は分割・分譲されている。版籍奉還後、藩主の江戸藩邸引揚げに伴い江戸詰めの藩士ら約500名が帰国し、新発田に移り住んだとされる(高橋1981)ため、跡地は帰国者にあてがわれたものであろう。また、二ノ丸南西部付近の外堀・櫓は明治7年測量図に描かれているため、廃藩後もしばらくは、堀・土塁が残っていたようである。明治16年に二ノ丸南西部が陸軍省練兵所として買い上げられ、明治23・36年測量図には堀が描かれていないことから明治23年頃までに櫓が壊され、土塁を削平し、堀は埋められたのであろう。



第3図 明治初年・36年の二ノ丸屋敷地とその周辺

3. 本発掘調査に至る経過

a. 建物の移転計画

平成17年10月に陸上自衛隊新発田駐屯地業務隊（以下、駐屯地）から、新発田市教育委員会生涯学習課（以下、市教委）に史料館・倉庫として活用している障舎（通称、白壁兵舎）を移転し、史料館もしくは広報施設としての活用を検討していると伝えられた。白壁兵舎は明治新政府がフランスを範として旧陸軍を組織したことを受け、洋風建築様式に瓦葺き屋根と漆喰による白壁の城郭建築を取り入れた木造兵舎として明治7年に建設された建物である。その後、新発田町・新発田市における旧陸軍・自衛隊駐屯地のシンボルとして現在に至った。移転予定地は新発田駐屯地と新発田市企画政策課とで協議を進め、平成18年に市街地と城址公園に接する駐屯地の南端部に決まり、施設名称は広報館となった。

b. 移転予定地の開発協議

移転予定地は周知の埋蔵文化財包蔵地である新発田城跡に含まれるため、駐屯地とその上部機関である防衛省北関東防衛局（以下、北関東防衛局）と市教委が開発調整の協議に入り、平成19年度に確認調査を実施することで合意した。平成19年6月20日付けで陸上自衛隊新発田駐屯地業務隊長から新発田市教育委員会教育長へ確認調査の依頼があり、市教委は平成19年7月10日付け生字第680号で文化財保護法第99条第1項による発掘調査の着手を新潟県教育委員会教育長（以下、県教育長）に報告し、確認調査を実施した。この結果、現地表面から深さ70cmで堀を検出し、堀の東側では深さ50cmで地山に掘り込まれた室町時代、江戸時代の遺構を確認した。その後、白壁兵舎移転に関連する倉庫建築予定地の発掘調査（第19地点）などを実施しつつ、建物の設計や配置の変更を経て、工事による掘削の影響が埋蔵文化財に及ぶ範囲が決定した。広報館の西半部にあたる327㎡は城下町部分で埋蔵文化財包蔵地から外れるため調査対象外とし、建物に付帯する機械室棟（調査区①）と、広報館の東半部（調査区②）の合計943㎡が本発掘調査の対象となった。これを基に、市教委が調査費用・期間、堀部分での土留めが必要な範囲・深度を算出した。市教委と北関東防衛局による協議の結果、平成23年度に本発掘調査・平成24年度に整理作業を実施し報告書を作成すること、発掘調査に伴う土留め工事は北関東防衛局が別途発注することで合意した。その後、調査の着手時におこなった協議により、建物南側取り付け道路の地盤改良範囲（調査区③）および建物に近接する管埋設工事部分も調査対象に含めることとなり、調査面積は178㎡増加して1,121㎡となった。なお、調査区③は施工深度が遺構確認面に影響しない深さのため、調査対象は堀西岸の上面部分に留めることで合意した。

平成22年2月4日付け関防第536号で北関東防衛局長より文化財保護法第94条1項の発掘通知が県教育長に提出され、平成23年5月26日付け関防第4380号で北関東防衛局長から新発田市長へ発掘調査の実施委託の依頼があり、平成23年6月20日付けで北関東防衛局と新発田市長が委託契約を締結した。市教委は、平成23年7月29日付け生字第288号で文化財保護法第99条第1項による発掘調査の着手を県教育長に報告した。

発掘調査後、基礎整理作業に着手し、平成24年3月15日まで基礎整理作業を実施した。本格整理作業と報告書作成業務は、平成24年8月7日付けで北関東防衛局長と新発田市長が委託契約を締結した後、平成25年3月15日まで作業を実施した。事業を進めるうち、業務内容に変更が生じたため、平成25年3月に変更委託契約を締結した。

4. 調査体制

a. 平成19年度（確認調査）

調査主体	新発田市教育委員会（教育長 大滝 界）	調査担当	鶴巻 康志（生涯学習課埋蔵文化財係長）
監 理	高澤誠太郎（教育部長）	調 査 員	西澤 正和（生涯学習課臨時職員）
総 括	杉本 茂樹（教育部生涯学習課長）	事務担当	渡邊美穂子（生涯学習課主任）
	田中 耕作（生涯学習課参事）		

b. 平成23年度（本発掘調査）

調査主体	新発田市教育委員会（教育長 塚野純一）	調査担当	鶴巻康志（生涯学習課 文化行政室 埋蔵文化財係長）
監 理	新保勇三（教育部長）	調 査 員	一箭義貴（生涯学習課 文化行政室 臨時職員）
総 括	荻野正彦（教育部副部長 生涯 学習課長）	事務担当	本田祐二（生涯学習課 文化行政室 文化財技師）
	田中耕作（生涯学習課主任参事 文化行政室長）		

c. 平成24年度（整理作業・報告書作成）

調査主体	新発田市教育委員会 （教育長 塚野純一：平成25年2月28日 まで） （教育長 大山康一：平成25年3月8日 から）	調査担当	鶴巻康志（生涯学習課 文化行政室 副参事 埋蔵文化財係長）
監 理	新保勇三（教育部長）	調 査 員	一箭義貴（生涯学習課 文化行政室 臨時職員）
総 括	荻野正彦（教育部副部長 生涯 学習課長）	事務担当	本田祐二（生涯学習課 文化行政室 文化財技師）
	田中耕作（生涯学習課主任参事 文化行政室長）		

5. 本調査と整理作業の経過

a. 発掘作業の経過

8月1日～5日 調査に先立ち、堀部分に相当する調査区②中央から西部の南北辺に鋼矢板を打設し、暗渠排水工事を行った。1日に市教委整理室で発掘器材の準備を行っている間、現地に仮設ハウス・仮設トイレ等を搬入し、2日に器材の搬入、標高原点の移動、あらかじめ支援業者に依頼して打設してあった基準杭をもとに調査区の設定を行う。重機を用いて調査区③を掘削、堀に対して直交方向にトレンチを2本設定し、外堀の立ち上がりを確認した後、立ち上がりのラインを追うように堀に並行してトレンチを拡張する。堀上面を確認・記録後、埋め戻す。また、調査区①の表土を掘削する。

8月8日～19日 人力による調査区①の遺構確認作業。掘削と遺構を判別しながら確認面の記録を取り、遺構の掘削に着手する。新発田城跡は、複数の遺構確認面が残る場合が多いが、この調査地点では、整地による削平が地山のシルト・砂層直上までおよぶため、遺構確認面は1面だった。近世末期の遺物を多量に含む土坑、中世の六道銭を伴う土坑墓等を検出する。一部の深い土坑は地山の砂層から著しい湧水があり、掘削できない部分があったため、後日、暗渠排水設置後に下層部分を掘ることとする。19日に土坑から念珠が出土、出土遺構の埋土をフルイがけする。

8月23日～8月29日 重機による調査区②の暗渠掘削、表土掘削。暗渠掘削の際、横木を渡した護岸施設の一部を検出する。並行して調査区①の記録作成作業を行う。

8月30日～9月5日 調査区②で人力による屋敷地部分の遺構確認作業、重機による堀部分の表土掘削を行う。遺構確認面の上面付近まで地盤改良材の影響で土が硬く締まり、確認作業に難渋する。調査区の東端部で調査区①と同様近世末期の土坑を検出する。表土掘削により堀の範囲、方向が判明する。

9月6日～9月29日 調査区②の屋敷地部分の遺構掘削・記録。暗渠排水・ウエルポンプによる遺構周辺の排水を行いながら、掘削を進める。木製品が大量に出土する土坑を検出。

10月4日～10月17日 堀の方向に直交してセクションベルトを設定し、南側を重機で掘削する。堀の両岸で護岸施設を検出し、堀底を人力で精査する。堀を横切る土層の記録したのち、北側の埋土を重機で掘削する。

10月18日～10月21日 調査区全体の清掃を行い、ローリングタワーの上から完了写真を撮影する。現場での記録作成・器材の撤収・片付けを行った後、現場を引き継いだ支援業者が埋め戻しを行った。

b. 整理作業の経過

現場作業終了後、平成23年度中は遺物洗い・注記、図面・写真の基礎整理を行い、本格整理作業に向けて一部遺物の分類接合に着手した。調査面積の増加と木製品等が多量に出土したことにより、作業員賃金・暗渠設置にかかる消耗品が増加し、重機掘削の支援委託費の入札差額が生じたため委託費が減少した。

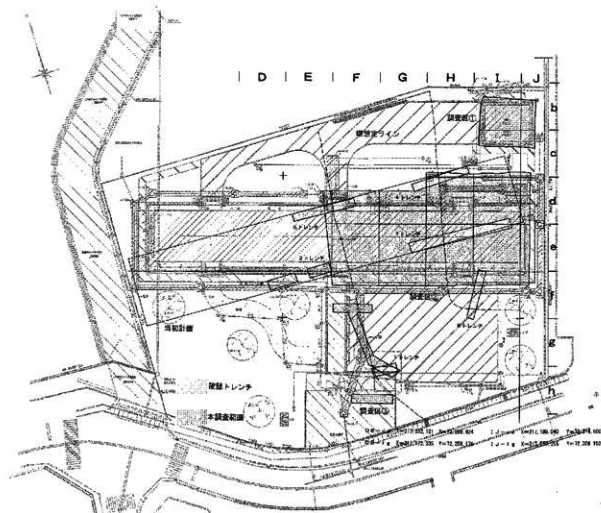
24年度の整理作業は、8月に遺物の分類・接合作業を行い、直営と委託で実施する実測遺物の抽出、観察表の作成を行った。9月には木製品の実測・写真撮影業務を発注し、11月に陶磁器類の実測・写真撮影業務の発注、25年1月に樹種同定の発注を行った。また、直営による遺物実測と遺構図・遺構一覧表の作成を行い、1月にはトレースに着手する。2月に直営の遺物写真撮影、編集・レイアウトと印刷製本の発注を行い、2月から原稿の執筆に着手し、調査報告書を印刷・刊行した。

Ⅱ 発掘調査の概要

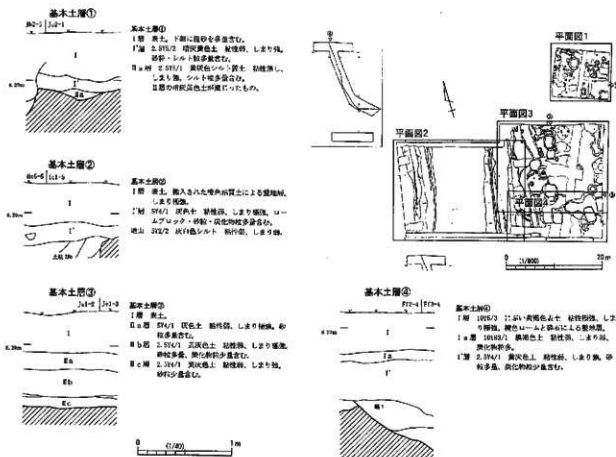
1. 調査区の設定

当初、広報館は東西方向に建物の主軸を置く計画であったが、確認調査終了後、建物の北側に付帯施設が付くなどの変更があった。最終的には市有地との境界線に直交する向きに設計変更され、広報館東端の北側で境界線に沿って機械室棟が計画された。また、建物の南側で地盤改良が堀の西岸部分に及ぶ箇所があり、トレンチ調査により、堀の位置を記録した。機械室棟部分東西12m、南北10mの120㎡を調査区①、広報館部分は東西42～44m、南北20～24mの938㎡で調査区②と呼称した。地盤改良箇所は現地の障害物を避けて幅1.8m、長さ8～9mのトレンチを17m間隔で東西方向に設置し、その間で検出した堀の上端を追いながら63㎡を掘削し、調査区③と呼称した。調査区①～③の配置は第4・5図のとおりである。

なお、調査区③は、堀上面を確認・記録後、堀の落ち際にサブトレンチを入れて埋土の記録を取った。堀の西側は埋蔵文化財包蔵地の範囲外で、屋敷地の一部とみられる遺構の上面を記録した後、埋め戻した。



第4図 調査地点の範囲とグリッド設定 (1/800)

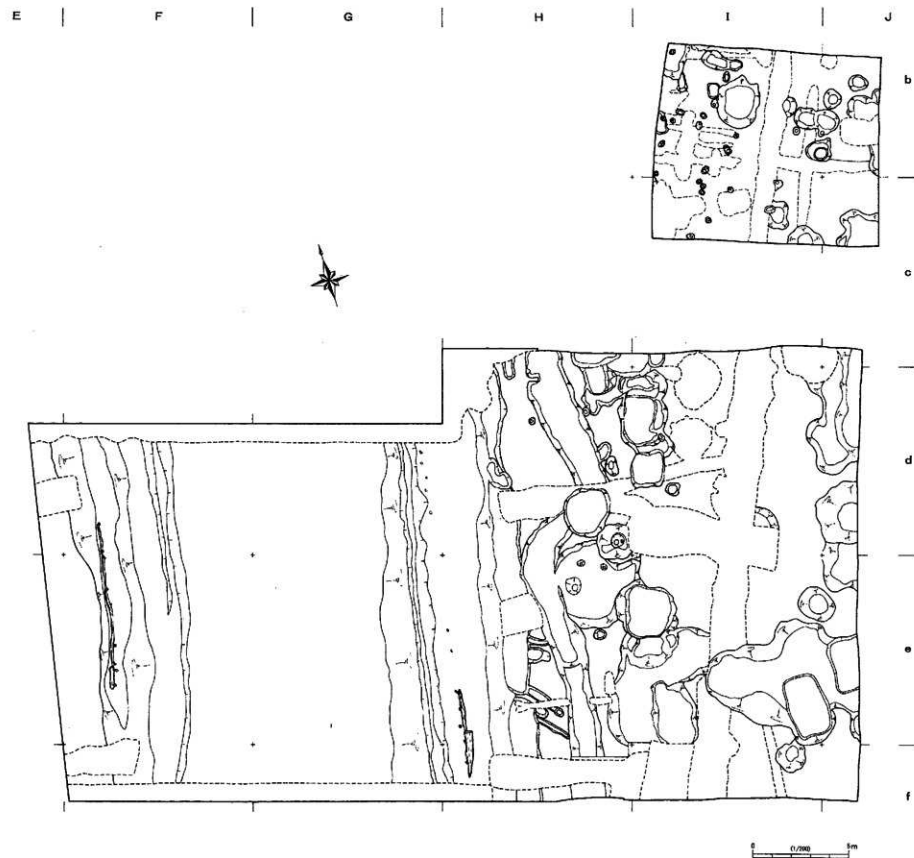
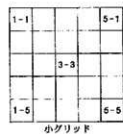
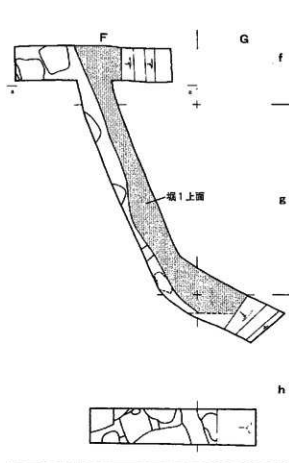


第5図 基本層序と平面図の配置

調査にあたり、建物の設計図を基準に一边10mの大グリッドを組み、アルファベットの組み合わせで表示した。建物の南東隅が大グリッドのI J-e fの交点にあたる。また、施工業者の協力により調査区の基準杭を打設し、付近にあった市都市整備課が設置した仮基準点をもとに四箇所の国家座標値を求めた(第4図)。標高原点は第19・20地点の発掘調査で使用した基準点から移設した。調査区は全体図(第6図)と平面図1(調査区①)、平面図2~4(調査区②)で平面を表示し、遺物出土状況図・断面図を平面図毎に詳細図に掲載した。遺物は、土器・陶磁器・瓦類が平箱52箱、石製品・金属製品が平箱1箱、木製品類が平箱49箱分出土し、土器・陶磁器類・石製品・金属製品は遺構毎にまとめて図と表で示し、木製品・漆器は別項でまとめ、遺構毎に図と表で示した。

2. 基本層序と遺構の種別

調査範囲は、旧陸軍・自衛隊の営前訓練場のグラウンドとして長期間使用され、平成12年以降は駐車場となっていた。表上は整地のための橙色ローム質土、碎石等により固く締まっていた。また、堀部分の沈下により水はけが悪くなるため、堀の直交方向に溝状に掘って円礫・川砂を入れ、暗渠工事が行われていた。また、調査区の東辺付近は未舗装の車両通路であったため、碎石や地盤改良材により硬化していた。この搬入土・碎石を含む最上層をI層とした(第5図)。I層の下に堆積するII層は黒褐色土で近現代の遺物。I'層は灰色〜黄灰色の砂質土で近代の遺物を含む。IIa~IIc層の広がりはおくわずかで、ほとんどはI'層直下で地山シルトもしくは砂



第6図 全体図

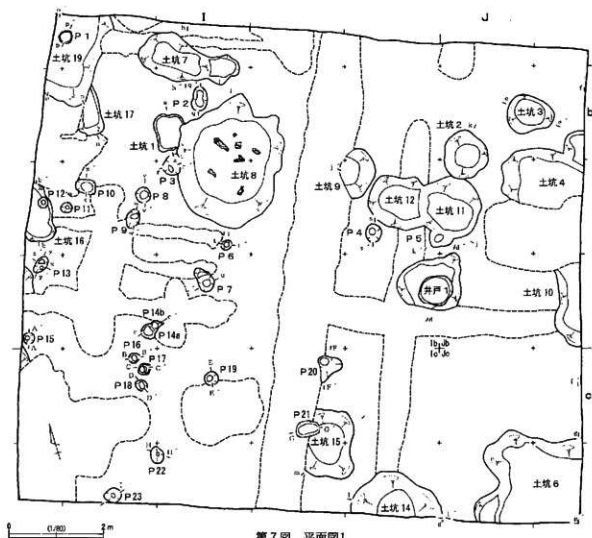
層となり、この面で古代・中世・近世の遺構を確認した。他の地点で検出している古代・中世の遺物包含層は認められなかった。

検出した遺構は土坑・井戸・溝・堀・ピットに区別し、ピット以外は検出順に通し番号を付した(表2)。径60cmよりも小さなものをピット、それ以上を土坑とした。掘削後、撓乱と判明したもの、名称を変更した遺構については番号を欠番とした。掘立柱建物の柱穴とみられる類は今回の調査では認められなかった。また、表中の出土遺物欄には遺物実測図の番号を入れた。番号のないものは図化できなかった小片である。遺構の年代は小片も含めた出土遺物の下限年代をあてた。

3. 調査区①の遺構

a. 平面図1の遺構

調査区①は、絵図面で見ると、二ノ丸屋敷地内に相当する。土坑16基、井戸1基、ピット23基を検出した。土坑は六道銭、漆器片といった副葬品を伴う中世の土坑墓2基を含むほか、中世の土坑3基、近世の土坑11基である。以下、遺構の種類ごとに記述する。(第7～10図)



1) 土坑墓ほか (第8図・図版3)

六道銭を伴う土坑および、信仰関係の遺物が出土したビットを掲載した。調査区①の北西寄りで検出した土坑1・16は、隅丸長方形もしくは楕円形で掘り込みは浅く、シルト質の埋土が主体となる。南北に長軸を持ち南寄りに漆器片・六道銭がまとまって出土している。銭貨はいずれも六枚で、重なった状態で緑青により融着しており、割がすことができなかったため、判読できた銭種と写真を表2・図版9に掲載した。漆器片は塗膜の断片のみである。土坑16からは微細な骨片が1点出土した。

P14は調査区①の中央西寄り、土坑16の南東3m付近で検出した。径30cm、深さ2cmのP14a、径20～30cm、深さ10cm程のP14bが重なっており、切り合いは確認できなかった。後者の埋土から水晶とみられる念珠が15点出土し、親玉を含む6点の出土位置を特定できた。ほかには掘り上げた土を全て水洗した中から検出した。

2) 井戸 (第7・8図・図版3)

調査区①の中央部東寄り、砂層の地山に掘り込まれた井戸1は径150cm弱、深さ55cmの不整形形を呈す。坑底部の砂層に径70cmの円柱状の掘り込みを持ち、ここからの湧水が著しい。これが筒状の水溜の痕跡とみられるが、曲物・結物などの木製の構造物は遺存していなかった。土師器皿・漆器皿・越前甕などが出土し、15世紀代に比定される。

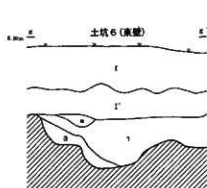
3) 土坑 (第7～9図・図版3・4)

土坑墓以外の土坑は径100cm前後、200cm前後の大きなものがあり、後者が多い。長方形・楕円形を基調とするが、概して平面形は整っていない。中世の遺構は調査区の北東隅に土坑3、北中央部に土坑9、北西部に土坑17が分布する。近世の東壁に沿って大形の土坑4・6・10、Ib・Jbグリッド境界付近に1m前後の土坑2・11・12がまとまる。出土遺物の年代は土坑3・9・17が中世の15世紀代、ほかは近世末期の19世紀代に比定される。以下、遺構の種類ごとに記述する。(第7～10図)

Jb・2-4グリッドで検出した穴(土坑15)から19世紀代の陶磁器類が多数出土し、近世末期の居住者と居住場所を示した墨書資料が含まれる。しかし、この穴は調査区の東壁でI'層を切っていることを確認し、機乱扱いとした。周辺遺構との切り合いは土坑10→土坑4→土坑15(機乱)である。土坑10が19世紀前半頃、土坑4は19世紀頃(小片のため詳細時期は不明)の遺物が出土している。大形の土坑6は、調査区の南東隅で検出し、19世紀前半頃の遺物が出土した。土坑7は幅100cm弱、長さが200cmを超える細長い形状で、埋土は固く締まっている。土坑8は径250cm前後と大形で、出土遺物に古代・中世の陶磁器片を多く含むが、近世の黒瓦も下層から出土している。なお、埋土中から木材が出土しているが、直立気味に入っており、後世に打ち込まれた杭の可能性もある。土坑14・15は径200cm弱の不整形形を呈する。付近の地山が崩れやすい砂質であり、断面形状は楕円状を呈す。土坑17は全体の形状は不明だが、細長い楕円形を呈するとみられる。周囲の他の遺構とは異なり炭粉を多く含む粘性土を埋土とし、中世土師器小皿・フイゴの羽口片が出土した。鋳造関連遺構か。土坑19は調査区の北西端で検出した。方形を呈するとみられるが、コーナーは1箇所のみ検出した。底面は平坦で、P1を検出した。19世紀頃の京信系系陶器が出土した。

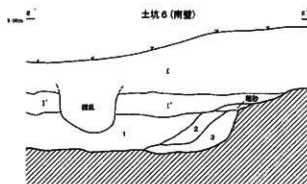
4) ビット (第7・10図・図版4)

ビットは径30cm前後の小規模なものが多い。径50cm前後のビットもあるが底面は狭く、柱穴とみられるものはない。ほとんどが杭等を打ち込んだ痕跡とみられる。出土遺物は古代・中世の小片が多い。付近では駐屯地の訓練施設で使用したとみられる先端部の加工が新しい同規模の杭も検出されているため、近代以降のものも含まれている可能性がある。



土坑6 (東壁)

1層 2.516/1 黄灰色シルト質土 粘性弱し、しまり強。シルト粒多量含む。
I'層の暗灰色土が混じったもの。



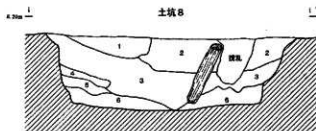
土坑6 (南壁)

1層 下面に砂粒を多量含む。
I'層 2.516/1 黄灰色土 粘性強、しまり強。砂粒・シルト粒多量含む。
1層 2.516/1 黄灰色土 粘性強、しまり強。底の砂粒多量含む。
2層 2.516/1 黄灰色粘質土 粘性・しまり強。砂粒少量含む。
3層 2.516/2 暗灰黄色粘質土 粘性強、しまり強。



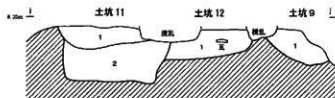
土坑7

1層 2.516/1 黄灰色シルト質土 粘性・しまり強。シルトブロック多量含む。



土坑8

1層 2.516/1 黄灰色土 粘性・しまり強。砂粒少量含む。
2層 514/1 灰色土 粘性・しまり強。シルトブロック多量含む。
3層 2.516/2 暗灰黄色粘質土 粘性・しまり強。
4層 2.516/2 灰黄色シルト 粘性強、しまり強。
5層 2.516/2 暗灰黄色シルト質土 粘性・しまり強。
6層 2.516/1 黄灰色土 粘性強、しまり強。砂粒多量含む。



土坑9

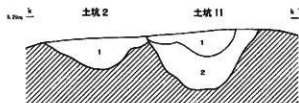
1層 2.516/1 黄灰色土 粘性・しまり強。シルト粒・砂粒少量含む。

土坑11

1層 2.516/2 暗灰黄色土 粘性・しまり強。砂粒多量含む。
2層 2.516/3 暗オリーブ緑色土 粘性強、しまり強。砂粒多量。
シルト粒少量含む。

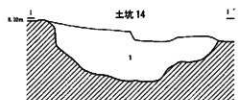
土坑12

1層 2.516/2 暗灰黄色粘質土 粘性・しまり強。



土坑2

1層 2.516/2 暗灰黄色粘質土 粘性強、しまり強。砂粒多量含む。

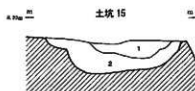


土坑14

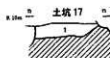
1層 2.516/2 暗灰黄色粘質土 粘性・しまり強。砂粒・シルトブロック多量含む。



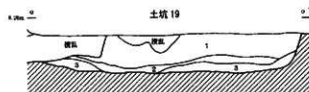
第9図 平面図1の遺構断面図 (1)



土坑 15
1層 2.514/3 オリーブ褐色土 粘性・しまり強。シルト粒多量含む。
2層 2.514/1 黄灰色土 粘性・しまり弱。炭化粒多量含む。



土坑 17
1層 2.517/1 褐色土 粘性・しまり強。炭粒多量含む。



土坑 19
1層 514/1 灰色土 粘性・しまり強。砂粒・炭化粒粒少量含む。
2層 1015/2 黄褐色土 粘性・しまり弱。ローム粒少量含む。
3層 514/1 灰色粘質土 粘性強。しまり強。シルト粒少量含む。



P1
1層 514/1 灰色土 粘性強。しまり普通。砂粒少量含む。



P2
1層 2.514/2 暗灰黄色シルト質土 粘性弱。しまり強。シルトブロック多量含む。



P3
1層 2.514/1 暗灰黄色シルト質土 粘性弱し。しまり弱。



P4
1層 2.514/3 オリーブ褐色粘質土 粘性・しまり強。砂粒少量含む。



P6
1層 513/1 オリーブ褐色土 粘性弱。しまり強。シルト粒多量含む。



P7
1層 2.514/2 暗灰黄色土 粘性強。しまり強。シルトブロック多量含む。
2層 2.517/1 灰白色シルトブロック。



P8
1層 2.515/2 暗灰黄色土 粘性弱。しまり強。砂粒・シルト粒少量含む。



P9
1層 2.514/2 暗灰黄色シルト質土 粘性弱。しまり強。シルトブロック多量含む。



P10
1層 7.5184/1 黄灰色土 粘性・しまり強。
2層 514/1 灰色土 粘性・しまり強。砂粒少量含む。



P13
1層 515/1 灰色土 粘性・しまり強。
2層 514/1 灰色土 粘性・しまり強。シルト粒少量含む。



P15
1層 7.514/1 灰色シルト質土 粘性弱し。しまり強。シルト粒多量含む。



P16
1層 2.515/2 暗灰黄色シルト質土 粘性弱。しまり強。シルトブロックまだらに含む。



P17
1層 2.515/2 暗灰黄色シルト質土 粘性弱。しまり強。シルトブロックまだらに含む。



P18
1層 2.515/2 暗灰黄色シルト質土 粘性弱。しまり強。シルトブロックまだらに含む。



P19
1層 2.515/2 暗灰黄色シルト質土 粘性・しまり強。シルトブロックまだらに含む。



P20
1層 2.515/3 灰褐色砂質土 粘性弱し。しまり弱。砂粒多量含む。
2層 2.514/3 オリーブ褐色砂 粘性・しまり強。砂粒多量含む。



P21
1層 7.514/1 灰色土 粘性弱。しまり弱。シルトブロック少量含む。



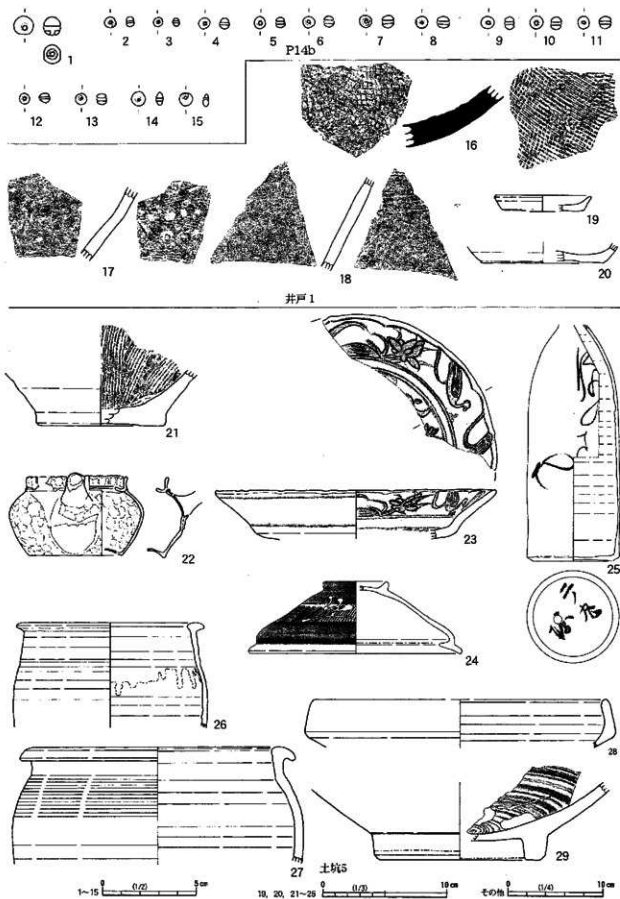
P22
1層 2.515/2 暗灰黄色土 粘性・しまり強。シルト粒多量含む。



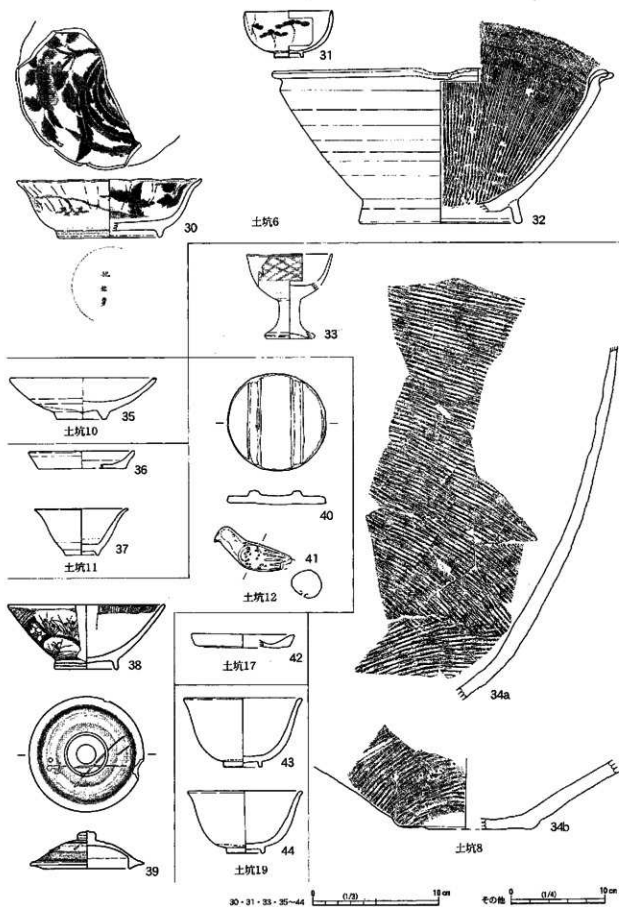
P23
1層 2.515/2 暗灰黄色シルト質土 粘性・しまり強。



第10図 平面図1の遺構断面図 (2)



第11図 P14b・井戸1・土坑5の出土遺物



第12図 土坑6・8・10~12・17・19の出土遺物

4. 調査区①の出土遺物

出土遺物は第11・12図に掲載し、個々の法量、観察所見は表3にまとめた。遺構および擾乱からの出土が多く、Ⅰ'層・Ⅱ層からはほとんど出土していない。

a. 平面図1の出土遺物

1～15はP14bから出土した念珠である。1は観玉でT字に穿孔が入り下端面は平坦に磨かれている。2～11は球状、12・13は俵状、14・15は薄い算盤玉状を呈す。透明に磨かれたもの、表面にくもりが残るものがある。また、穿孔面の端部に紐擦れによる微細な刻面を残すものがある。

16～20は井戸1出土遺物で、須恵器の大甕底部片(16)、甕前の甕胴部片(17・18)、底部回転ヘラ切りの中世土師器(19・20)がある。21～29は土坑5(擾乱)出土遺物で、21は14世紀の珠洲片口鉢、23は17世紀代の青花漳州窯系の段皿、29は18世紀代の肥前陶器の鉢。ほかは19世紀代とみられる陶器類で、25の底面には「二ノ丸堀」と墨書されている。底部の「堀」字付近は墨書後に穿孔されている。「堀」は江戸後期から幕末にかけて、調査地点付近に居住した重臣の姓である。陶器の産地はいずれも産地不明で、鉄軸が施される。

30～32は土坑6出土遺物で、30は肥前磁器の鉢、31は京信楽系の小杯、32は肥前陶器の掻鉢である。31は外面に緑釉・青釉による松葉文の上絵が描かれる。土坑8からは肥前磁器の仏飯器(33)、V期頃の珠洲大甕の胴部片(34a・34b)が出土。35は土坑10から出土した波佐見の白磁皿で、見込みが蛇の目軸割ぎされている。土坑11からは中世土師器の小皿(36)、肥前白磁の小杯(37)が出土。土坑12からは肥前磁器の碗(38)、産地不明の行平蓋(39)、瓦質土器の蓋(40)、型打ちによる鳥型土製品(41)が出土。瓦質の蓋は玩具とみられる。土坑17からは中世土師器小皿、土坑19からは京信楽系陶器の燗反碗(43・44)が出土した。

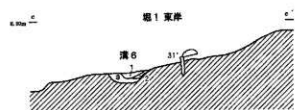
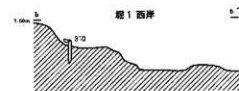
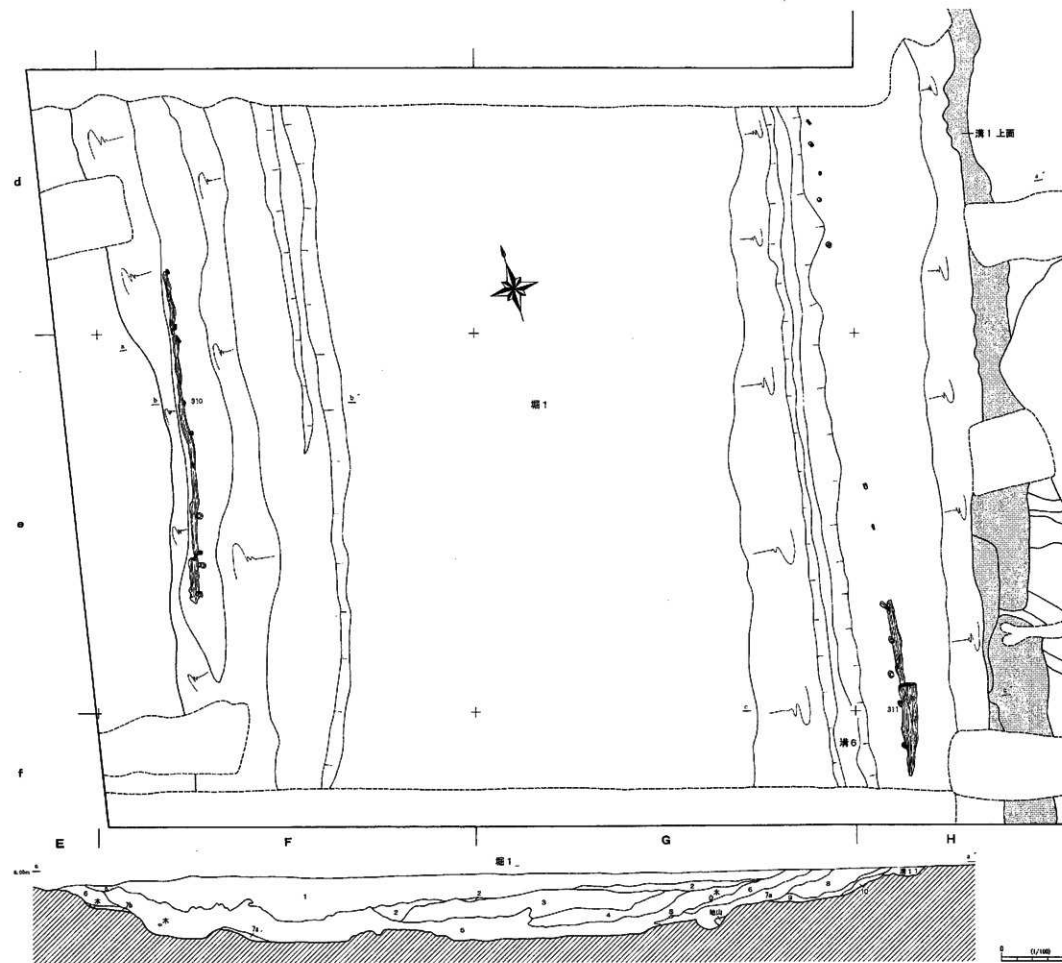
5. 調査区②の遺構

調査区②は、近世末期の絵図面で見ると、堀とその東方の土塁、土塁内側の重臣屋敷地内を含む範囲にあたる。土坑30基、溝7本、堀1本、ピット6基を検出し、平面図2～4に分けて図示した。以下、平面図ごとに遺構の概要を記述する。

a. 平面図2の遺構

1) 堀(第13図・図版1・5)

堀1は、調査区の西端部E～H・d～fグリッド付近にあり、ほぼ南北方向に軸線を持つ。調査区②の所見から西岸はFgグリッドの南東端付近で軸線が、徐々に東西方向へと移行する。確認面での幅は22.14m、深さ1.70mで、西岸の標高が東岸よりも20cm程低い。西岸は上端から60cm下がったところに平坦面を持つ。平坦面の西際には、堀の軸線に沿って丸太の横木を3本置き、杭で固定している。平坦面の下はFdグリッド側が幅200cm、深さ25cm前後の溝状を呈すが、Feグリッド側では溝の窪地がなく平坦面を呈する。東岸は後述する溝の埋土中で堀の上端ラインを検出した。堀と溝1の東側の上端がほぼ平行し、東岸の上端から70cm下で東西幅230～300cmの平坦面を持つ。平坦面の西際寄りのHe1-4～Hf1-1グリッドで丸木・半割材の横木を検出した。横木は5本の杭で固定している。杭はHdグリッドに5本、Heグリッドにも2本、横木の延長線上で検出してい



- 堀1
 1層 2.574/2 埴垣黄土 粘質・しまり強し、堀跡多量含む。
 2層 2.574/2 灰黄色粘砂 粘質・しまり強し、堀跡多量の堀跡。
 3層 2.574/2 埴垣黄土 粘質粘質、しまり強し。

- 堀1
 1層 2.574/2 埴垣黄土 粘質・しまり強し。
 2層 2.574/2 灰黄色土 粘質・しまり強し、砂礫がゴツゴツとまがらに含む。
 3層 1078/2 灰黄色土 粘質・しまり強し、シルト粒が少量含む。
 4層 2.574/2 埴垣黄土 粘質・しまり強し、シルト粒が少量含む。
 5層 1078/2 灰黄色土 粘質・しまり強し、有層砂少量含む。(堀下層)
 6層 2.574/2 埴垣黄土 粘質・しまり強し、有層砂少量含む。
 7層 2.574/2 埴垣黄土 粘質・しまり強し、有層砂少量含む。
 8層 1078/2 灰黄色土 粘質・しまり強し、有層砂少量含む。
 9層 1078/2 灰黄色土 粘質・しまり強し、有層砂少量含む。
 10層 2.574/2 灰黄色シルト質土 粘質・しまり強し、シルト粒多量含む。
 堀2 2.574/2 灰黄色粘砂 粘質・しまり強し。

第13図 平面図2・断面

るため、以前は同様の横木が並んでいた可能性があろう。平坦面の西は溝6を跨いで堀の底面へ緩く傾斜する。

堀の底面は地山の粗砂層に達し、ここからの湧水が著しい。堀底はほぼ平坦で、幅は10.2~11m、中央部分がやや高まりを持つ。堀の下層には有機物を含む黒褐色粘質土が堆積するため、水は流れずに停滞していたとみられる。なお、調査時に稼動していたポンプを止め、数日経つと両岸の中段の平坦面付近まで水位が上昇する(図版1)。このため、両岸の横木と杭列は汀線付近の護岸施設とみられる。

堀の埋土は西岸の中段に6・7b層、東岸の中段に8~10層が堆積し、それを覆うように1~5層が堆積する。1~4層は近代以降に堀を人為的に埋めたときの層である。主に東側から投入されている。5層は有機物を多く含む黒褐色粘質土で、堀が機能していた頃に堆積したとみられる。近世の陶磁器・木製品が出土した。6・7層からの出土遺物は少ないものの19世紀代の陶器が含まれる。また、東岸の斜面に堆積した8層からは古代・中世の遺物が多いほか18世紀後半以降の陶磁器片を含む。よって、東岸の中段は幕末の段階では埋まっていた可能性がある。

2) 溝(第13図・図版5)

溝6は堀の東斜面下部、護岸杭列の下に位置する。幅100~120cm、深さ40cmの溝6が堀と並行して通っている。溝の底面は地山の粗砂層にまで達し、底面での湧水が著しい。堀の下端ラインよりもやや西に軸がずれるものの、杭列とはほぼ平行である。埋土は1層が堀1の7a層と対応する。

b. 平面図3の遺構

調査区②の堀東側北半部を第14図に示した。主な遺構として、堀東岸の東方で南北軸を持つ幅広の溝1・2、Hグリッドの東半部からIグリッドの西半部で南北に連続する大形の土坑群、J列の調査区東壁に沿って連続する大形の土坑群、堀に隣接する溝を検出した。

1) 土坑墓(第14・16図・図版6)

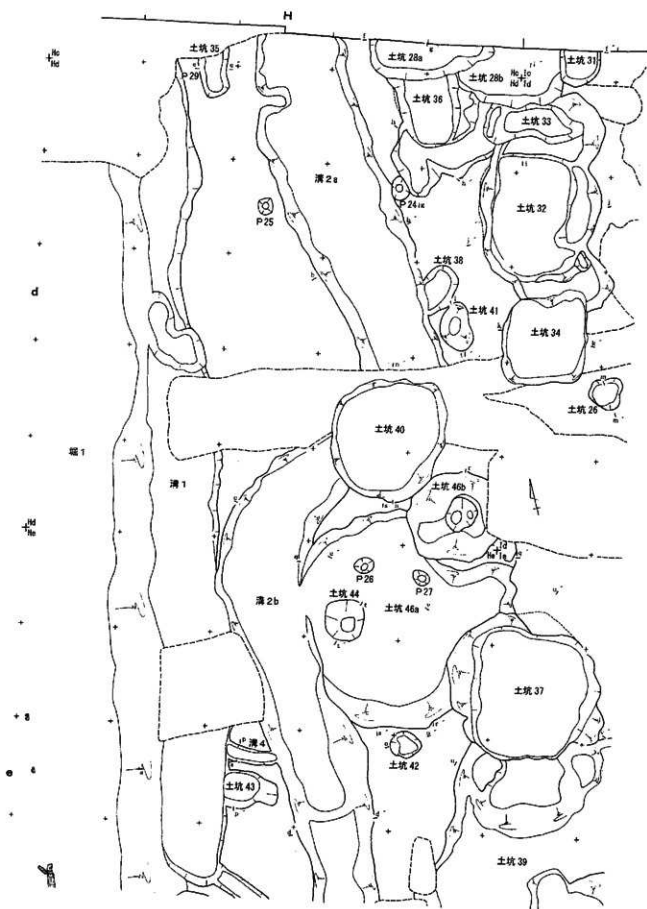
土坑42はHe3-3グリッドで検出した径66×55cm、深さ11cm、地山の粗砂に浅い土坑で、炭化物と焼骨が出土した。土圧で固まっている部分は土ごと持ち帰ってクリーニングした。副葬品は認められず、分析の結果、骨は成人の焼人骨と判明した。調査区①でも同様の形状の土坑墓を検出している。

2) 土坑(第14~18図・図版7)

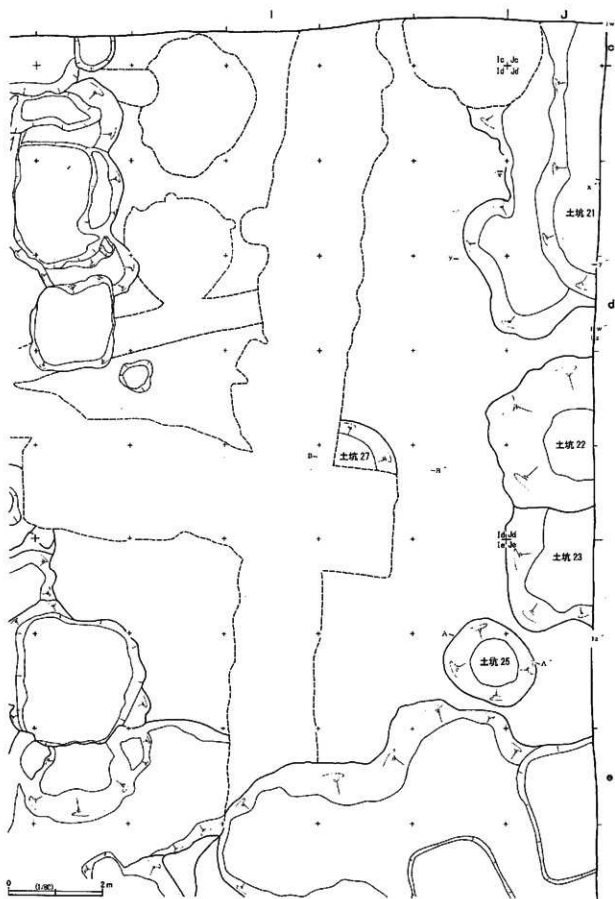
土坑21・22・23は調査区北東コーナーから東壁に沿って並び、調査区外へ延びるため個々の形状は不明だが、検出した範囲では不定形を呈す。調査区東壁付近の地山が崩落しやすい砂層でここから湧水が認められた。土坑21は直上に大きな攪乱が入っている。底面は2段に掘り込まれている。下層から有機物片が出土したが、図化可能な遺物はほとんどなかった。土坑22は楕円形、土坑23は不整形である。土坑22が土坑23よりも新しい。土坑22はIIa層に掘り込まれており、19世紀中頃の遺物が出土した。土坑23はIIb層に掘り込まれており、18世紀代の遺物が出土した。ただし、IIb層に覆われた土坑24bから19世紀中頃の遺物が出土しているため、これらの土坑はほとんど時期差がない。

土坑25は大形で楕円形を呈し、18世紀代の遺物が出土した。土坑27は攪乱によって大半が失われている。15~16世紀初頭の遺物が出土した。(第14・18図・図版7)土坑26は径72cm、深さ36cmで15世紀の遺物が出土した。(第14・16図)

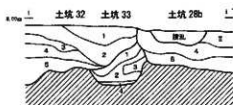
土坑28a・28b・31はHc4-5からIc1-5グリッド付近の調査区北壁に沿って並び、土坑31→土坑28b→土坑28aの順で構築されている(第14・15図・図版6)。いずれも全体の形状を明らかにしえないが、土坑31は中央部の底面に板材が複数重なっており、これを礎盤とみれば柱穴の可能性がある。土坑31の西半部は土坑



第14圖 平面圖 3



第14図 平面図3



土坑 33b

- 4層 2.574/1 黄灰色土 粘性無し、しまり強、炭化物粒多量、砂粒・泥土粒少量含む。
5層 10793/1 褐色土 粘性弱、しまり強、炭化物粒・有機物粒少量含む。

土坑 32

- 1層 515/1 灰白色土 粘性弱、しまり強、砂粒・炭化物粒少量含む。
2層 515/1 灰白色土 粘性弱、しまり強、シルト・小ブロック多量含む。
3層 2.514/1 黄灰色土 粘性強、しまり強、砂粒・炭化物粒少量含む。
4層 2.515/1 黄灰色土 粘性強、しまり強、シルト・小ブロック多量含む。

土坑 33

- 1層 2.513/1 黄褐色土 粘性・しまり強、炭化物粒・炭粒多量含む。
2層 2.514/2 黄灰色土 粘性・しまり強。
3層 517/1 深褐色シルト質土 粘性弱、しまり強、シルト・小ブロック含む。
4層 10793/1 黒褐色腐植土 粘性弱、しまり強。



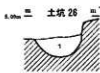
土坑 34

- 1層 2.515/1 黄灰色土 粘性弱、しまり強、砂粒・炭化物粒少量含む。
2層 2.514/1 黄灰色土 粘性弱、しまり強、シルト・小ブロック少量含む。



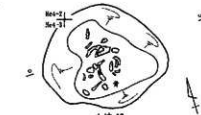
土坑 41

- 1層 515/1 灰白色土 粘性・しまり強、砂粒少量含む。
2層 513/1 オリーブ灰色土 粘性・しまり強、炭化物粒少量含む。



土坑 26

- 1層 2.514/2 暗灰色土 粘性弱、しまり強、砂粒少量含む。



土坑 42



土坑 42

- 1層 2.513/1 黄褐色土 粘性・しまり強、炭粒多量、炭化物粒少量含む。



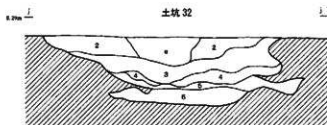
土坑 43

層 4

- 1層 2.515/1 黄灰色シルト質土 粘性・しまり強。

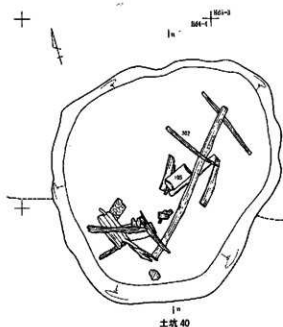
土坑 43

- 1層 2.515/1 黄灰色土 粘性・しまり強、シルト・小ブロック多量含む。
2層 2.514/1 灰白色土 粘性・しまり強。

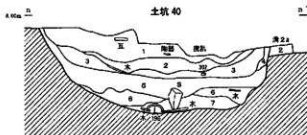


土坑 32

- 4層 7.514/1 灰白色土 粘性無し、しまり強、砂粒多量、炭化物粒少量含む。
5層 2.515/1 黄灰色土 粘性・しまり強、シルト・小ブロック多量含む。
6層 514/1 灰白色土 粘性・しまり強、シルト・小ブロック少量含む。



土坑 40

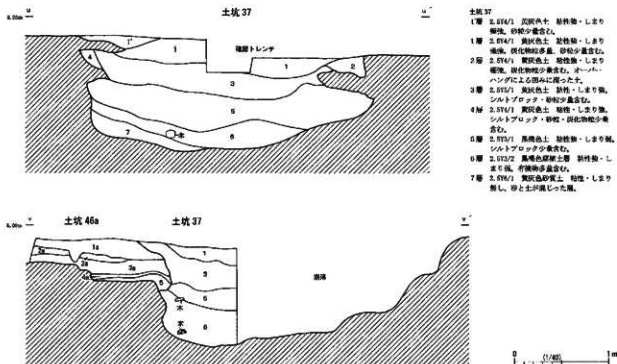
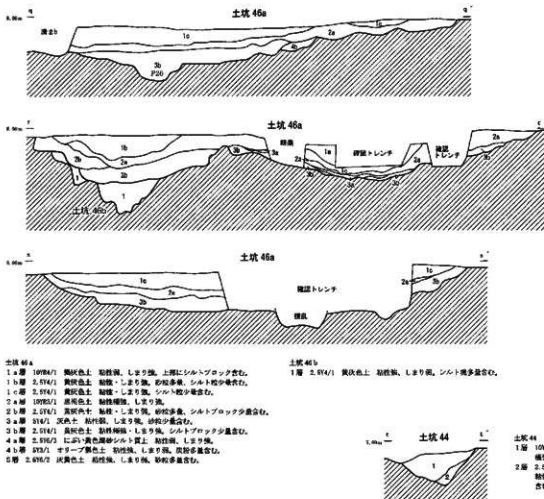


土坑 40

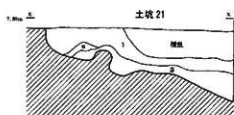
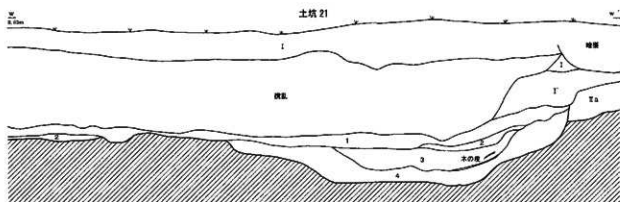
土坑 40

- 1層 7.515/1 灰白色土 粘性弱、しまり強、砂粒多量含む。
2層 10793/2 黄褐色土 粘性弱、しまり強、有機物粒多量含む。
3層 2.514/2 暗灰色土 粘性弱、しまり強、炭化物粒・炭粒少量含む。
4層 2.513/1 黄褐色土 粘性強、しまり強、シルト・小ブロック多量含む。
5層 515/1 灰白色土 粘性・しまり強、シルト・小ブロック多量含む。
6層 516/1 灰白色シルト 粘性弱、しまり強、有機物粒少量含む。
7層 2.514/1 黄灰色土 粘性弱、しまり強、有機物粒少量含む。

第16図 平面図3の遺構詳細図(2)

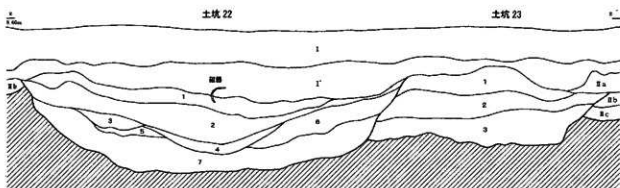


第17図 平面図3の遺構断面図 (1)



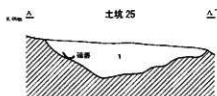
土坑 21
1層 2.577/1 灰白色砂礫層 粘性・しまり弱。有機物片少量含む。
2層 10184/2 灰黄色土 粘性・しまり強。有機物片多量含む。
3層 10184/2 灰白色腐植土層 粘性・しまり弱。有機物片多量含む。

4層 7.514/1 灰褐色 粘粒質、しまり強。有機物片多量含む。
a層 堆砂ブロック。



土坑 22
1層 2.574/2 褐色土 粘性・しまり弱。灰化跡の多量。粘砂粒少量含む。
2層 2.574/1 黄灰色土 粘性弱。しまり弱。シルト粒少量含む。
3層 2.575/1 黄灰色砂質土 粘性・しまり弱。砂粒多量含む。
4層 10184/2 灰白色腐植土層 粘性・しまり弱。木の葉・葉を多量含む。腐葉土。
5層 2.576/2 灰黄色細砂 粘性・しまり強。
6層 585/1 灰色砂 粘性・しまり弱。腐砂が腐植土に入る。
7層 10184/1 腐灰色腐植土層 粘性弱。しまり強。

土坑 23
1層 574/1 褐色土 粘性弱。しまり強。砂粒・腐植物多量含む。
2層 a層 574/1 灰褐色 粘粒質。しまり強。砂粒多量含む。
3層 b層 2.574/1 黄灰色土 粘性弱。しまり強。砂粒多量。灰化跡少量含む。
4層 c層 2.574/1 黄灰色土 粘性弱。しまり強。砂粒少量含む。
1層 2018/1 灰色シルト質土 粘性弱。しまり強。シルトブロック・砂粒多量含む。
2層 574/1 灰色砂質土 粘性弱。しまり強。粘砂粒少量含む。
3層 2.574/1 黄灰色砂質土 粘性弱。しまり強。粘砂粒多量含む。



土坑 25
1層 2.574/1 黄灰色砂質土 粘性弱。しまり強。砂粒多量含む。灰化物粒少量含む。層土中に灰化物粒の細粒の分布が3箇所あるが、土質は同じ。土坑 22 より弱い。



土坑 27
1層 2.574/1 黄灰色土 粘性弱。しまり強。砂粒多量含む。
2層 10182/2 黄褐色土 粘性・しまり強。シルト粒多量含む。
3層 2.574/1 黄灰色土 粘性・しまり強。シルト粒多量含む。
4層 10182/2 黄褐色土 粘性・しまり強。シルト粒多量含む。



第18図 平面図 3 の遺構断面図 (2)

28bの埋土が堆積する。土坑31を柱穴とみた場合、土坑28bは柱の抜き取り痕の可能性がある。また、土坑28aは南に隣接する土坑36を、土坑28bは南に隣接する土坑32・33よりも新しい。土坑28aから19世紀中頃、土坑31からは19C前半の遺物が出土。土坑28bは磁器の小片が出土したのみで、詳細な時期は不明である。

土坑32は400cmを超える大形土坑で、確認面付近の地山は固いシルト層、5・6層付近の地山下部が水を含みと崩れやすい砂質土で、砂質土の崩落により深くオーバーハングしている。平面形は長方形を基調とするが地山崩落の影響で一部が不整形になっている。埋土から17世紀代の青花皿・瀬戸美濃志野向付が出土しているほか、17世紀後半から18世紀代の肥前磁器が出土している。

土坑33は長方形を呈し、土坑28b・土坑32により南北方向から挟まれ下部しか残っていない（第14・16図・図版6）。

土坑34は一辺180cm程の方角を呈し、深さは20cmと浅い。底面はほぼ平坦で壁の立ち上がりは急である。19世紀代の陶磁器が出土した（第14・16図・図版6）。

土坑35は南北方向に軸線を持つ。北端部は調査区外となり、溝の一部かも知れない。半截時に埋土中でP29を検出した（第14・15図・図版5）。

土坑36は大きさが200cmを超える大形の土坑で、1～7層からなる平面形が隅丸長方形の深い部分と、5層のみが堆積する浅い不定形な部分がある。深い部分の西壁は滞水時の地山砂質土の崩落によりオーバーハングしている。5層が南側・東側の浅い段を経て流入し、その後、1～4層が堆積したとみられる。19世紀中頃の遺物が出土しているが小片のため砥石のみを図化した（第14・16図・図版6）。

土坑37は径300cm弱、深さ1mを呈し、周囲で切り合っている土坑39・46aよりも新しい。この土坑もオーバーハングが顕著である。埋土に炭化物粒を多く含み、19世紀中頃の陶磁器・木製品が多量に出土した。（第14・17図・図版7）

土坑38は楕円形の土坑で埋土は溝2aと共通する。当初、溝2aの範囲に含めて調査したため、土坑38の断面図は取れなかった。

土坑40は径300cm弱の楕円形を呈し、底面から19世紀代の陶磁器・赤瓦などに混じり部材がまとまって出土した。

土坑41は楕円形を呈し、埋土から18世紀頃の肥前磁器片が出土。土坑43は溝1よりも切り合いが古い。古代の遺物が出土した（第14・16図）。

土坑46aは径450cm前後の楕円形を呈する。溝2b、土坑37よりも古く、土坑46bよりも新しい。土坑46bは土坑46aの北東隅で検出した。土坑44は土坑46aの底面で検出した。両者の新旧関係は不明である。また、底面でP26・P27を検出した。土坑46a・bから15世紀前半代の陶器が出土した（第14・17図・図版7）。

3) 溝（第14～16図）

溝1は、Hd2-1グリッドからHf3-2グリッドへ堀1と平行して南北方向に軸線を持つ。北端部は暗渠排水掘削時に壊れたものの、堀1とともに調査区外へ延びるとみられる。西の立ち上がりが堀1の斜面によって斜めに削られているため、幅は明らかにし得ない。深さは10cm程と浅く、底面は全面にわたり細かな凹凸が著しい（図版5）。Hd2-3グリッドの底面に不整楕円形の窪みがある。He3-4グリッド付近で、幅20cm程で、途切れる部分がある。出土遺物は8世紀末～15世紀代の土器・陶器が主体で、わずかに近世の陶器片（時期・産地不明）、越中瀬戸播磨片が含まれる（第14・15・19図）。

溝2aはHc3-5グリッドからHd4-3グリッド、溝2bはHd4-5グリッドからHf4-2グリッドへ延びる。幅と主な軸線の方向や埋土の特徴が共通するため、同じ溝とみられる。両者が接する部分は攪乱と土

坑40によって壊されていることから北側を溝2a・南側を溝2bとして区別した。溝2aからは、近世陶磁器の小片が少量出土しているが、攪乱からの混入品とみられる。溝2b南側の掘り込みが深く、水路ならば南が下流となるであろう。幅は200cm前後、深さは30cm前後である。Hd3-2、Hd4-2グリッドでP24・25を検出した。溝2bはHe4-3グリッドで段を持つ。古代・中世の遺物が主体である(第14・15・19図・図版5)。

溝4はHe3-3グリッドに位置し、東西方向に軸線を持つ。溝1・溝2bに東西端が壊されている。9世紀中頃の黒色土器・土師器が出土した(第14・16図)。

c. 平面図4の遺構

調査区②の堀東側南半部の平面図を第19・20図に示した。堀東岸の溝1・2bとその東方の大形土坑が分布する。調査区南壁寄りのIf1-1・If2-1グリッドで南へ延びる確認調査の6トレンチを検出した。確認調査の所見により、トレンチの北端から南へ8m付近に東西方向に屈曲した堀の上端ラインが通る。

1) 土坑(第19～22図・図版8)

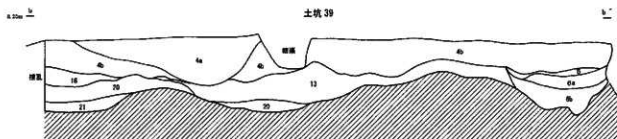
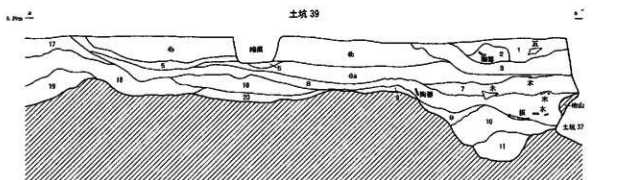
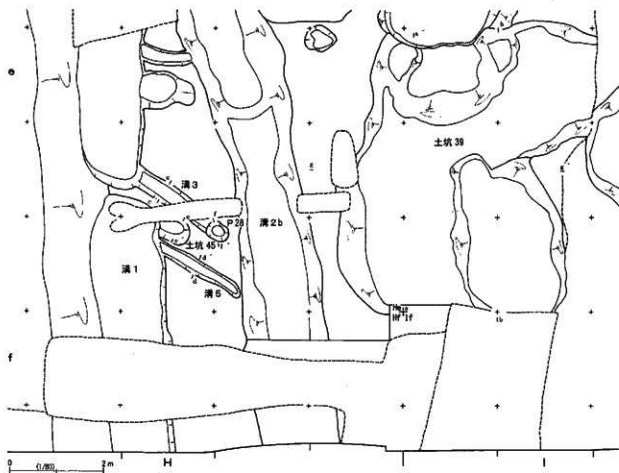
土坑24aは東西800cm以上の不整形の大形土坑で、窪地状の地形の落ち込みの可能性がある(第20～22図)。東壁に沿ってサブトレンチを入れたところ、有機物片を多量に含む方形の土坑を検出し、これを土坑24bとした。その後平面プランを精査しIe5-5グリッド付近でも同様の方形プランが想定できたため、k-k'ラインでベルトを設定し、ここで土坑24cを確認した。断面観察では土坑24b・cは土坑24aの1b層に掘り込まれているものの土坑24aの1b層と土坑24b・cの上層はほとんど区別がつかない。土坑24aの埋土は黄灰色砂質土を主体とし、基本土層のIIc層に対比できる。土坑24a西端部の攪乱範囲内で土坑39と重複するが、攪乱により両者の新旧関係は判断できない。19世紀中頃の陶磁器類・瓦・金属製品などが出土した。土坑24bは東半部が調査区外となるが方形を呈するとみられ、確認できた辺の長さが286cm、深さは46cmである。壁の立ち上がりは急で、IIc層と土坑24の1b層に掘り込まれ、埋土の上層にIIc層の上部に薄く堆積する黒褐色粘質土(a層)が流入する。下層に松・桜・萱の葉を多量に敷いた黒褐色土が堆積し、ここから19世紀中頃に比定される陶磁器類、瓦、多数の部材・へぎ板片・木製品が出土した(第20・22図)。土坑24cはIe5-4グリッドに位置する。一辺330cm×214cm、深さ82cmの長方形で土坑24・30よりも新しい。壁の立ち上がりは急で埋土の状況は土坑24bと共通する。19世紀中頃の陶磁器類、瓦、木製品が多量に出土した。一部の部材は竪穴の軸線に平行もしくは直交するように出土した。

土坑29はJe1-5グリッドの東壁際で検出した。土坑24aと重複し、土坑24aの1b層よりも新しい。古代の須恵器が出土しているが、土坑24aとの切り合いから19世紀代に比定される。(第20図・図版8)

土坑30は径150cm程の構円形を呈し、須恵器・珠洲の小片が出土した。土坑24cに北東端部が切られている。

土坑39はIe1-4グリッド付近に位置する(第19・20図・図版8)。600cmを超える大形の土坑で平面形は不整形、底面に段を持つ。土坑37と重複しており本遺構の方が先行する。複数の遺構が重複していると想定して南北方向に2列、東西方向に1列のベルトを設定し、掘り下げた。この結果、1～3層、4a層、4b～8層、9～11層、12～21層などを埋土とする切り合いを確認したものの、セクションベルトで確認するまで埋土の掘り込みを面的に捉えることができず、別遺構とはせずに扱った。整理作業時に新旧関係が明確な1～11層と12層～21層の間で遺物の年代差を確認した。出土遺物は1～11層からは17～19世紀代の陶磁器が混在し、13層以下からは17世紀代の土器・陶磁器・金属器が出土した。したがって、最初に掘削された年代は17世紀代と推定され、その後、19世紀代に掘りなおされたとみられる。1～11層から木簡・下駄など、21層から木簡が出土した。

土坑45は溝1・攪乱などに壊されている。古代の土師器破片が出土した。



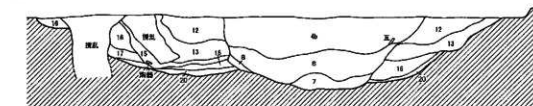
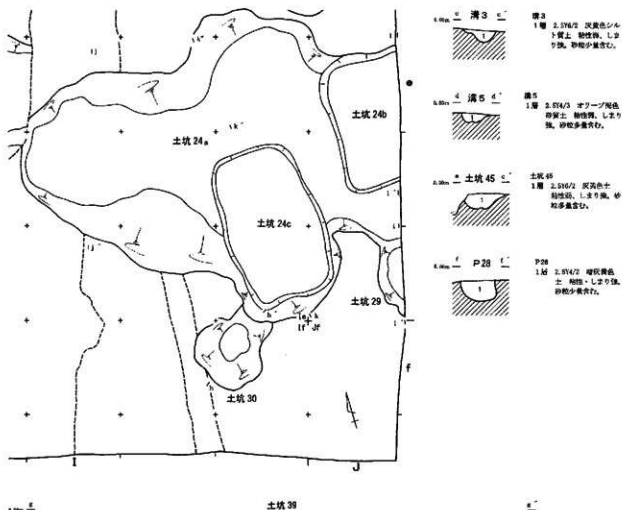
土坑39

- 1層 576/1 灰色シルト質土、粘性弱、しまり極強、砂粒・シルトブロック多量含む。
 2層 1814/2 褐色土、粘性弱、しまり極強、砂粒多量、炭化物粒少量含む。
 3層 10763/1 褐色土、粘性弱、しまり極強、砂粒・炭化物粒多量含む。
 4a層 574/1 灰色砂状土、粘性強、しまり極強、砂粒多量、炭化物粒一層面的に広がる少量含む。
 4b層 2.576/1 黄灰色シルト質土、粘性弱、しまり極強、シルト粒多量含む。
 5層 2.574/1 黄灰色土、粘性・しまり強、砂粒少量含む。

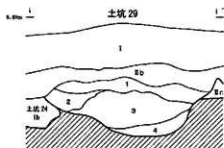
- 6a層 10763/3 暗褐色腐植土、粘性弱、しまり強、有機物多量、炭化物粒少量含む。
 6b層 2.575/1 黄灰色土、粘性・しまり強。
 7層 2.574/2 暗灰色土、粘性強、しまり極強、炭化物粒多量、有機物少量含む。
 8層 2.572/1 黄褐色土、粘性・しまり強、炭粒多量含む。



第19図 平面図4の遺構詳細図(1)



- 土坑 30
- 9層 314/1 灰黄色シルト質土 粘性・しまり強。池山・二次堆積。
- 10層 2.314/2 暗灰黄色土 粘粒強。しまり強。
- 11層 2.315/1 黄灰色シルト質土 粘性強。しまり強。
- 12層 2.315/1 黄灰色土 粘性強。しまり強。炭化物粒散在。炭粒・シルト粒少量含む。
- 13層 2.314/2 黄灰色土 粘性・しまり強。シルトブロック多量含む。
- 14層 2.312/2 黄褐色土 粘性・しまり強。
- 15層 314/1 灰黄色土 粘性・しまり強。砂粒少量。シルトブロック多量含む。
- 16層 314/2 灰黄色土 粘性・しまり強。シルト粒少量含む。
- 17層 315/1 灰黄色土 粘性・しまり強。シルト粒少量含む。
- 18層 315/1 灰黄色土 粘性・しまり強。シルト粒少量含む。
- 19層 315/1 灰黄色土 粘性・しまり強。シルト粒少量含む。
- 20層 315/2/1 黄褐色土 粘性強。しまり強。木片等の有機物多量含む。
- 21層 2.314/1 黄灰色土 粘性・しまり強。砂粒少量。有機物多量含む。



- 土坑 29
- 1層 315/1 灰黄色土シルト 粘性強。しまり強。黄褐色土粒含む。
- 2層 2.312/2 灰黄色土 粘性強。しまり強。砂粒少量含む。
- 3層 2.314/1 黄灰色土 粘性強。しまり強。砂粒少量含む。
- 4層 315/2/2 灰褐色土 粘性・しまり強。砂粒少量。シルトブロック多量含む。

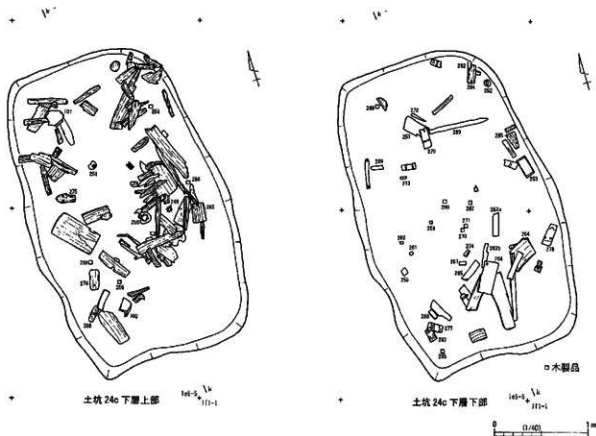
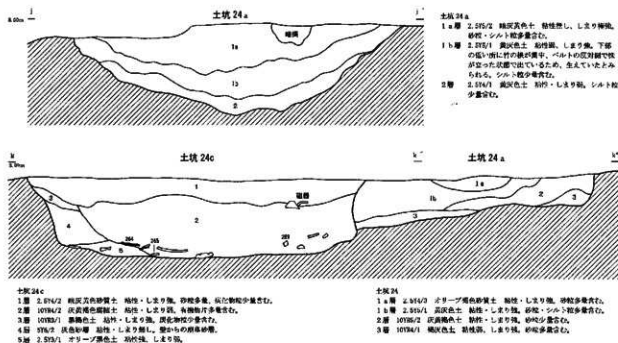


- 土坑 30
- 1層 2.314/2 暗灰黄色砂質土 粘性弱。しまり弱。砂粒多量含む。

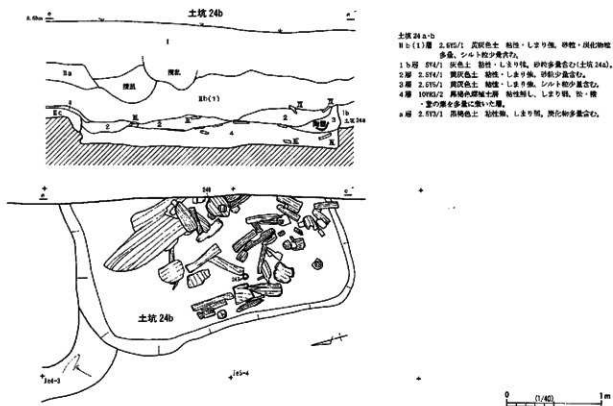
第20図 平面図4と遺構断面図 (2)

2) 溝・ピット (第19・20図)

溝3・5は、He3-4、He3-5付近に位置する小規模な溝で軸線が平行する。ともに溝1よりも先行する。溝3から9世紀代の土師器・須恵器が出土。溝3の南端でP28を検出した。新旧関係は不明で、古代の黒色土器が出土した。



第21図 平面図4の連携詳細図(1)



第22図 平面図4の遺構詳細図（2）

表2 遺構一覧表

土坑

遺構名	調査区	主なグリッド	規模 (cm)			時期	出土遺物	切り合い (旧→新・不明 ⇄)	挿図		図版
			長軸	短軸	深さ				平面	断面	
土坑1	①	B3-3	78	64	3	中世	赤漆片、元豊通寶、皇宋通寶、ほか4枚 (融着)	土坑1→土坑8	8	8	3
土坑2	①	B1-3	102	93	33	19C	肥前陶器京焼風碗、碗、指鉢、陶器土瓶	土坑2→土坑11	7	9	
土坑3	①	B1-3	100	82	13	15C	中世土師器皿	—		8	
土坑4	①	B2-4	(174)	(126)	51	19C	磁器碗、京信楽系端反碗、陶器土瓶・瓶・皿、中世土師皿	土坑10→土坑4→1'層→土坑5			

遺構名	調査区	主なグリッド	規模 (cm)			時期	出土遺物	切り合い (旧→新・不明 →)	掘削		図版	
			長軸	短軸	深さ				平面	断面		
土坑5 (攪乱)	①	Jb2-4					青花段皿(23)、肥前磁器青磁碗・碗・皿・大皿・瓶、京信楽系徳利(25)・陶器甕(26・27)・行平蓋(24)・鉢(29)・撥鉢・植木鉢・燈罩・燈格(28)、中世土師器皿・古瀬戸瓶子・珠洲片口鉢(21)	土坑10→土坑4→1'層→土坑5		8		
土坑6	①	Jc2-2	(223)	(199)	58	19C前	肥前磁器鉢(30)、碗・皿・小瓶、肥前陶器撥鉢(32)、京信楽系小杯(31)、産地不明鉄粉甕・徳利、焙烙、珠洲甕・甕、中世土師器皿、須恵器甕	—	7		3	
土坑7	①	Ib3-2	218	99	33	19C	陶器土瓶・碗、越前播鉢、甕			9		
土坑8	①	Ib3-3	289	223	77	19C	肥前磁器仏飯器(33)・水漬、青花漳州窯系皿、須恵器横瓶、陶器鉢、黒瓦、机、珠洲甕(34a・34b)・中世土師皿	土1→土坑8				
土坑9	①	Ib5-4	108	(76)	36	中世	古代・中世土師器小片	—				
土坑10	①	Jb2-5	456	(48)	53	19C前	渡佐見白磁皿(35)、青花漳州窯系皿、肥前磁器碗・瓶、中世土師器皿・青磁	土坑10→土坑4→1'層→土坑5		8		
土坑11	①	Jb1-4	128	(120)	63	19C	肥前磁器徳利・小杯(37)・皿、陶器鍋・甕、黒瓦、中世土師皿、須恵器瓶類、鉢	P5→土坑11、土坑12→土坑11	7		3	
土坑12	①	Ib5-5	(109)	109	31	19C	肥前磁器碗(38)・蓋付鉢、陶器行平蓋(39)、瓦質土器蓋(40)、陶器皿・甕・ヒョウソク、鳥型土製品(41)、包丁	土坑12→土坑11		9		
土坑14	①	Ic4-2	194	(97)	62	近世	肥前磁器、中世青磁、土師器(すべて小片)	—			4	
土坑15	①	Ic5-2	(193)	(123)	32	19C	陶器甕、磁器徳利、	P21→土坑15		10		
土坑16	①	Ib1-4	(127)	(114)	11	中世	銭貨6枚(崇武通寶、熙寧元寶、開元、口口口、口口通口、口元通寶)、黒・赤漆片、骨片	土坑16→P12	8	8		
土坑17	①	Ib1-3	(80)	(54)	15	15C	中世土師器小皿(42)・小皿、フイゴ羽口	土坑17→土坑19			3	
土坑19	①	Ib2-2	193	126	41	19中～	肥前磁器碗・皿、青磁香炉、磁器薄手小杯、京信楽系端反碗(43・44)、鉄輪鍋、黒平瓦(中山市郎右衛門印)、赤瓦	土坑17→土坑19	7	10		
土坑21	②	Jd1-1	(672)	(284)	62	19C	肥前磁器碗・青磁香炉、京信楽系端反碗、肥前陶器播鉢、鉢、中世土師器皿、須恵器甕	—				
土坑22	②	Jd1-4	(409)	(222)	100	19C中～	青花皿、肥前磁器青磁碗(46)皿(45)・中皿・蓋付鉢・色絵小杯(47)・水漬・徳利・青磁香炉、瀬戸美濃磁器端反碗、磁器薄手小杯(48)、肥前陶器鉢(55)、信楽三耳蓋(54)、相馬駒形香茶碗(51)、陶器鉢(56)・鉄輪鍋、行平蓋(52・53)、黒瓦(60)、赤瓦(58)、中世土師器皿、土師、和釘	土坑23→土坑22		14	18	7

遺構名	調査区	主なグリッド	規模 (cm)			時期	出土遺物	切り合い (旧→新・不明 *)	埋没		図版
			長軸	短軸	深さ				平面	断面	
土坑23	②	Je1-1	(257)	(188)	62	18C	肥前磁器碗・皿・小杯(61)、肥前陶器 鉢・鉢・漆鉢、和釘(62)、駒、漆器	土坑23→土坑 22	14	18	7
土坑24	②	Je5-3	(810)	569	50~ 95	19C中 ~	青花皿(63)・肥前磁器皿(65)・碗・鉢 (67)・蓋(66)・蓮華・小杯・徳利(69)・ 瓶(68)・水筒・白磁皿(64)・青磁碗。瀬 戸美濃磁器端反碗(70・71)・磁器薄手 小杯(73)、会津系美濃碗(73)・肥前陶器 灯火具(78)・陶器碗・皿(77)・鉢・漆 鉢・甕。京信系系端反碗(74)・占四碗 (75)・萩ビラ掛け碗(76)、陶器甕・鉢・ 行平鍋・行平釜(81・82)・鉄輪鍋 (83)・土瓶・ヒョウソク(80)・碗・皿・ 植木鉢・火入れ・土師質燗炉、赤瓦 (84)、古代須恵器杯・甕、土師器甕・ 中世土師器皿・鉢(85)	土坑29・土坑 24b・24c→ 土坑24a	20	21	9
土坑24b	②	Je1-3	286	(172)	46	19C中 ~	肥前磁器碗・皿・小杯(86)・水筒(88)・ 御神酒地利(87)・蓋・瓶・甕(89)、瀬戸 美濃磁器端反碗、陶器甕(90)・碗・植 木鉢・土瓶・鉄輪鍋・火入れ・ヒョウ ソク、土製玩具、火消蓋(91)、赤瓦 (92・93)、駒? (246)円形蓋板(248)、 下駄、桶(側板)、漆器蓋(247)、砥石	土坑24b→土 坑24a	22	22	
土坑24c	②	Je5-4	330	214	82	19C中 ~ 寛延 元年 1860 年	肥前磁器碗・広東碗(95)・小皿(94)・猪口・ 蓋(96)・鶴首瓶(97)、戸草(104)、瀬戸美濃 磁器端反碗(98)・急須、磁器薄手小杯、肥 前陶器皿・甕・漆鉢(103)、京信系系端反 碗(99)、徳利、陶器碗・ヒョウソク・急須・ 鉢(101)・植木鉢・行平鍋蓋(100)・鉄輪 鍋・甕(102)、黒地瓦(105)・赤瓦、漆器 桶(249・250)、蓋(251)、托(252)、菊蓋 (257)、木製品桶(256)、円形蓋板(254)、 桶、寄、串、板、下駄(275~287)、櫛、木筒 (266~271)、櫛蓋板(263~265・272 ~274)、漆鉢(288)、箱(253)、木札(258 ~262)	土坑24c→土 坑24a	21	21	8・9
土坑25	②	Je5-2	192	159	39	18C	肥前磁器碗(109・110・111)・小杯 (113)・皿(107・108)・大皿(106)・合 子(114)・水滴、色絵皿、陶器鉢・甕、 越前漆鉢、備前漆鉢、鉄製火箸(115)、 黒瓦	—	18	7	6
土坑26	②	Id2-4	72	72	36	15C後 半	中世土師器皿(116)、青磁碗、白磁皿	—	14	16	
土坑27	②	Id5-4	(137)	(100)	32	16C初	中世土師器皿(120・121)、珠洲片口鉢 (119)、青磁碗、瀬戸美濃大窯1割形香 炉(118)、古墳高坏(117)	—	18	7	
土坑28a	②	Hc4-5	(455)	(100)	82	19C中 ~	肥前磁器碗(122)・皿(127・128)・紅猪口 (124)・端反碗(132)・猪口(126)・香炉・仏 飯鉢(125)・蓋物身(123)・水滴(129)、瀬戸 美濃磁器端反碗(131・133)・蓋(134)・磁 器薄手小杯・土瓶、陶器肥前碗・皿・甕・漆 鉢・瓶・京信系系端反碗・燈明皿受(136)・ 徳利、大形粗馬徳利(135)、陶器火入 (137)・漆鉢(139)・土瓶・急須・銅・行平 鍋・鉢(138)・植木鉢(140)、土器燗炉、赤 瓦、珠洲焼、青磁碗、瀬戸美濃内八割皿、 中世土師器皿、木製品、燗台脚(290)、取 手(291)、櫛(292)、和釘、盞金、煙管吸口	土坑36→土坑 28b→土坑 28a	15	15	6
土坑28b	②	Hc5-5	(225)	(128)	54	近世	磁器小片	土坑33・土坑 28b→土坑 28a・土坑 31			

遺構名	調査区	主なグリッド	規模 (cm)			時期	出土遺物	切り合い (旧→新・不明 →)	採掘		図版
			長軸	短軸	深さ				平面	断面	
土坑29	②	Jc1-5	(167)	(52)	51	19c中	須恵器杯	土坑24→土坑29	20	20	8
土坑30	②	If5-1	(158)	154	25	中世	珠洲甕, 須恵器甕・瓶類	—			
土坑31	②	Ic1-5	(88)	(76)	54	19C前	肥前磁器碗, 京信系系碗, 陶器碗, 和釘, 土師器皿	土坑28b→土坑31	15	15	6
土坑32	②	Id1-2	456	357	70	18C?	青花皿(148・149), 呉須赤絵皿, 肥前磁器碗・小杯・徳利・大皿(150), 瀬戸美濃志野向付(147)・菊皿, 陶器褐釉甕, 珠洲甕(142)・片口鉢(141), 古瀬戸飯子, 青磁碗(144), 土師器(ヘラ切皿・手づくね小皿(145・146)・漆	土坑33→土坑32→土坑28b・土坑32→土坑34	16	16	
土坑33	②	Id1-1	(209)	(82)	52	—	遺物なし	土坑33→土坑32→土坑28b			
土坑34	②	Id1-3	182	180	20	19C	磁器碗・皿・瓶, 陶器鉢(151), 播鉢, 鉄胎甕, 燈炉目皿	土坑32→土坑34			
土坑35	②	Hc2-5	(140)	63	11	15C	中世土師器皿	土坑35→P29	14	5	
土坑36	②	Hd5-1	(203)	(200)	87	19C中～	青花碗・皿, 肥前磁器皿, 薄手磁器小杯, 陶器皿, 産地不明陶器灰釉蓋・鉢, 鉄胎甕, 漆, 珠洲甕, 土師器皿, 須恵器甕, 磁石(152)	土坑36→土坑28b→土坑28a		15	6
土坑37	②	Ic1-2	278	273	104	19C中～	肥前磁器碗(153)・皿・大皿・猪口・蓋(155・156)・小杯(154)・急須・青磁香炉, 肥前陶器灰焼風筒・甕・播鉢, 瀬戸美濃磁器碗反碗(157), 京信系系碗反碗(158), 陶器鉄胎蓋・灰釉鉢・行平碗, 行平飯蓋(播鉢), 瓦質火鉢, 大堀相馬系土版(161), 黒瓦(163・164), 赤瓦, 漆喰壁, 木間(294・295)	土坑46a→土坑37・土坑39→土坑37	17	7	7
土坑38	②	Hd5-3	110	72	—	—	—	土坑38→溝2a	—	—	
土坑39	②	Ie1-4	(617)	(480)	128	19C中～ (13層以下は17世紀後半)	上層: 肥前磁器(皿・V期が主体, II期散量・IV期少量: 天目形碗(165)・丸碗(166～168)・筒碗(169)・青磁碗(170)・青磁香炉(171)・京信系系碗反碗(174・175)鉢類・瓶類・皿・色絵鉢, 瀬戸美濃志野向付皿・磁器碗反碗(172・173), 薄手磁器小杯・肥前陶器甕(177)・刷毛目鉢(176)・清蘇皿, 京信系陶器丸碗, 堺系播鉢・相馬駒焼香茶碗(51), 大堀相馬系土版(179)・鉢(180), 産地不明陶器播鉢(178)・鉄胎蓋・鉢・土鍋, 行平碗, 下飯(300), 木版(297～299), 漆, 円形蓋板(296), 刀掛(302) (下層(13層以下): 青花皿(185), 肥前磁器碗(185)・陶器丸皿(187), 瀬戸美濃内八半皿(182・183), 産地不明天目茶碗(184), 土師器皿(188), 釘(181), 金具(189)	土坑39→土坑37・土坑39→土坑24a	19	19・20	8
土坑40	②	Hd4-4	277	239	86	19C	肥前磁器碗・大皿(190)・猪口・瀬戸美濃磁器碗(192), 肥前陶器碗・播鉢・鉢・甕, 京信系系徳利, 産地不明磁器皿・陶器小杯・土鍋, 土器燈炉, 瀬戸美濃天目茶碗・皿, 青磁碗・青花碗, 須恵器杯・甕類・小刀(193)・鏡形漆(129), 枕, 板, 赤瓦(195)	溝2a・溝2b→土坑40	16	16	6

遺構名	調査区	主なグリッド	規模 (cm)			時期	出土遺物	切り合い (旧→新・不明 →)	採掘		図版
			長軸	短軸	深さ				平面	断面	
土坑41	②	Hd5-3	106	64	36	18C~	磁器碗・黒基石・和釘	—	14		—
土坑42	②	He5-3	66	55	11		人骨	—	16		
土坑43	②	He3-3	121	79	19	古代	古代土師器碗・甕	土坑43→溝1	14	16	6
土坑44	②	He4-1	89	81	41	—	なし	土坑44→土坑46a			7
土坑45	②	He3-5	(70)	(48)	16	古代	古代土師器甕	土坑45→溝1	19	20	8
土坑46a	②	Ile4-1	462	460	42	15C前半	古代小治産須恵器杯, 菅神産須恵器有台杯(196)・甕, 中世珠洲片口鉢(198)・甕, 中世土師器皿(197), 石硯	土坑46b・P26→土坑46a→溝2b, 土坑44→土坑46a	14	17	7
土坑46b	②	Hd5-5	188	(168)	33	15C前半	古代土師器甕・碗, 中世土師器皿	土坑46b→土坑46a			

堀

堀1	②	Ge	—	2214	170	19C	1層~7層:19C中~近世後半主体, 8層:古代・中世主体18C中~の陶磁器片を少含む。9・10層:建物なし, 肥前磁器碗(220)・陶器碗(221・222)・大皿(225)・皿(226・227)・角皿(228)・段重(223)・猪口(224)・小杯・合子・鉢・蓋付鉢・蓋(229)・仏飯器・色絵碗・青磁鉢(231)・青磁香炉(230)・青磁碗・瓶, 瀬戸美濃磁器碗(232・233), 肥前陶磁鉄絵皿(234)・耀鉢(242・243)・甕(241)・鉢, 京信楽系陶器(237), 小杉鉢(235・236)・陶器土瓶蓋(238)・鉄土鍋(239・240)・甕・鉢・行平蓋・徳利・燈明皿(243)・土器信子・焙烙, 瓦質火鉢・黒瓦・赤瓦・漆器碗・皿(303)・燗台皿(304)・円形蓋板(306), 下駄(307~309), 杭(310・311), 硯, 珠洲焼・片口鉢, 中世瓦質火鉢, 青花皿, 中世土師器皿, 須恵器有台杯, 土師器甕, 8層:肥前磁器, 肥前陶器鉢, 京信楽系陶器, 陶器鉄絵皿, 中世土師器(218), 珠洲片口鉢, 越前磁鉢(244)・甕, 須恵器杯・甕, 土師器甕, 砥石	溝1→堀1	13	13	1・5
----	---	----	---	------	-----	-----	---	-------	----	----	-----

溝

溝1	②	Hd2-5	(1862)	(133)	11	16C末~	古代・中世遺物が主体。古代須恵器無台杯(199・200), 有台杯, 甕, 土師器甕, 小型小甕(201), 珠洲焼, 登下皿, 遼R甕(204), 片口鉢(205), 玄器系北越窯甕, 中世土師器皿(203)・小皿(202), 越中瀬戸漆鉢(206), 陶器甕	土坑43・45・溝3・4・5→溝1→堀1	14・19		
溝2a	②	Hd4-2	(764)	222	29	15C~	古代・中世遺物が主体。古代須恵器無台杯, 有台杯(207), 甕, 土師器甕, 珠洲片口鉢(210), 越前甕, 中世土師器皿(208)・小皿(209), 近世磁器碗・京信楽系陶器皿・陶器漆鉢・鉄絵碗	溝2a→土坑40	14	15	5
溝2b	②	He3-1	(1464)	189	29~36	15C	古代・中世が主体。古代小治産須恵器無台杯(211)・蓋, 菅神産無台杯・横瓶, 土師器碗・甕・瓶, 黒色土師器(212), 中世珠洲登R甕(213), 片口鉢(216), 青磁磁連升文碗, 中世土師器皿・小皿	溝2b→土坑40	14・19		

遺構名	調査区	主なグリッド	規模 (cm)			時期	出土遺物	切り合い (旧→新・不明 →)	押図		図版
			長軸	短軸	深さ				平面	断面	
溝3	②	He3-4	(172)	42	12	9C中～	土師器小壺、銅、須恵器甕(215)	—	19	20	7
溝4	②	He3-3	(112)	36	17	9C中～	黒色土器甕(216)、土師器碗・甕	—	14	16	
溝5	②	He3-5	(198)	32	9	—	—	—	19	20	
溝6	②	Ge5-1	—	74	31	17C後半～	肥前陶器灯明皿(217)、漆碗、下駄	—	13	13	5

井戸

井戸1	①	Ib5-5	146	138	55	15C	越前甕(17・18)、中世土師器皿(19～20)、漆器皿、須恵器杯・甕(16)	—	7	8	3
-----	---	-------	-----	-----	----	-----	---	---	---	---	---

ビット

遺構名	調査区	主なグリッド	規模 (cm)			時期	出土遺物	切り合い (旧→新・不明 →)	押図		図版	
			長軸	短軸	深さ				平面	断面		
P1	①	Ib2-2	28	26	16	8C末～	須恵器甕		7	10	4	
P2	①	Ib3-3	52	32	45	15C	中世土師器皿 (ヘラ)				—	
P3	①	Ib3-4	44	39	29						4	
P4	①	Ib5-4	39	35	15					—		
P5	①	Ib5-4	50 (32)	7				P5→土坑11		—		
P6	①	Ib3-4	24	19	14		古代土師器			10	4	
P7	①	Ib3-5	54	34	47		中世土師器					—
P8	①	Ib2-4	32	32	12							—
P9	①	Ib2-4	42	30	21						—	
P10	①	Ib2-4	43	30	17	18C～	古代土師器・近世陶器小片				—	
P11	①	Ib2-4	23	21	33					—	—	
P12	①	Ib1-4	21	21	14			土坑16→P12	7・8	—		
P13	①	Ib1-5	(42)	(24)	18				7	10	4	
P14a	①	Ic1-2	31	(22)	4				7・8	8	3	
P14b	①	Ic1-2	31 (19)	8			念珠(1～15)		7・8	8	3	
P15	①	Ib1-5	24	23	25				7	10	4	
P16	①	Ic2-1	26	21	10						—	
P17	①	Ic2-1	25	23	17						—	
P18	①	Ic2-1	23	21	13						—	
P19	①	Ic3-1	28	28	16		木片				—	
P20	①	Ic4-1	(56)	(54)	37		鉄器片			—		
P21	①	Ic4-1	51	32	17			P21→土坑15		—		
P22	①	Ic3-2	33	29	57	古代	机、土師器甕			—		
P23	①	Ic2-2	38	32	41					—		
P24	②	Hd4-2	49 (38)	30						14	—	—
P25	②	Hd3-2	34	30	40							
P26	②	Hc4-1	42	32	23	18C～	肥前磁器碗					
P27	②	He5-1	40	29	15							
P28	②	He4-5	49	39	25	9C～	黒色土師器碗					
P29	②	Hc2-5	24	—	14			土坑35→P29	14	15	5	

6. 調査区②の出土遺物

調査区②の遺構からは陶磁器のほかにも木製品・漆器が多数出土した。ここでは陶磁器と木製品・漆器を分けて掲載し、土製品・金属製品・石製品は陶磁器とともに示した。

a. 調査区②出土の土器・陶磁器・土製品・金属製品・石製品

1) 土坑出土の遺物 (第23～31図・図版9～18)

45～60は土坑22から出土した(第23図)。45～47は肥前磁器で、45は手皿皿、46は外面青磁釉による碗、47は色絵の小杯、48は薄手小杯で、焼き雑症が残る。見込みに扇を持って舞う人物像が描かれる。49・50は瀬戸美濃磁器の端反碗である。

51～56は陶器である。51は相馬駒焼の香茶碗で、口縁部が外反し胴部が指押ええによりゆがむ。高台に一箇所切り込みが入り、ヘラ痕は胴下半部へ達する。高台内にヘラ削りによる渦巻き文が入る。鉄絵の走駒文が外面に三単位、内面に一単位描かれる。文化・文政期頃(19世紀前半頃)に比定される。52・53は行平の蓋、54は信楽の三耳蓋で腰白茶壺の類とみられる(畑中2003)。胴上半部の鉄釉は薄く、胴下半部は白釉ではなく灰釉が掛かる。55は内面に刷毛目が施された肥前陶器鉢である。56は内面灰釉・外面鉄釉の鉢で、見込みに目跡が5箇所、露胎の高台内に「二」の墨痕がある。

57は素焼きの細型管状土甕である。58は太線による均整唐草文の赤軒平瓦、59は三つ巴文+珠文の赤軒丸瓦、60は黒丸瓦である。内面に布袋瓦痕と棒状工具による叩き締め痕が残る。伴出している瀬戸美濃端反碗などからこれらの年代は19世紀中頃に比定されよう。

土坑23からは肥前磁器小杯(61)と和釘(62)が出土した(第24図)。

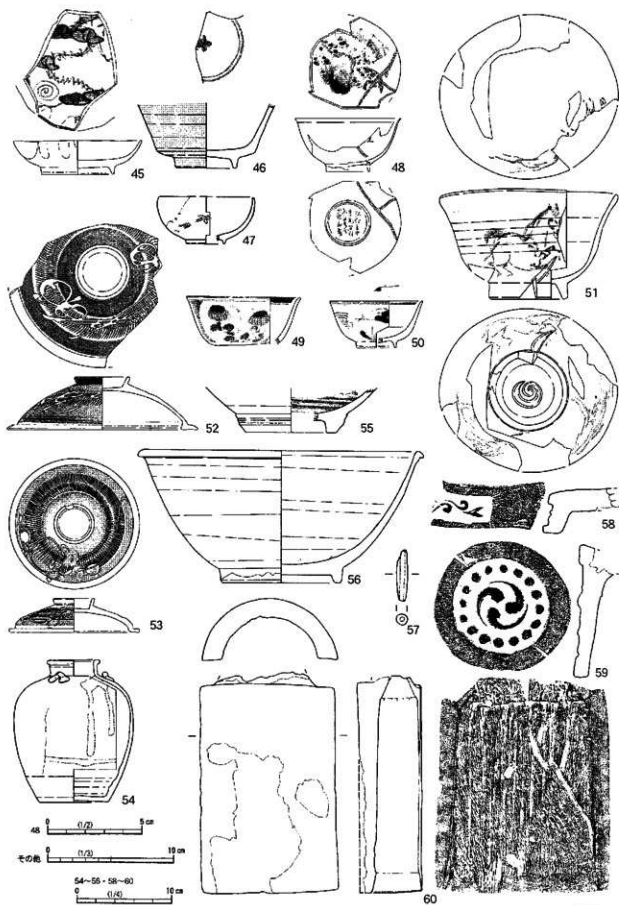
63～85は土坑24aから出土した(第24・25図)。63は青花皿で内面に墨弾きによる牡丹唐草文見込みに草花文が描かれる。64～69は肥前もしくは波佐見の磁器で、64は型押しによる菊花文、65は内面唐草文と見込み五弁花による皿、66は内外面に文様を持つ薄手の碗蓋、67は外面が薄い青磁釉で口縁が外反する鉢、68が瓶、69は徳利で、底面に「客問」と墨書が残る。70～72は瀬戸美濃磁器、70・71は端反碗、72は薄手小杯で側面の「櫻」字は上絵付けによる。73は会津蛋養窯(柳田1990)の湯呑碗である。

74～83は陶器である。74は京信楽系の端反碗、75は凸凹碗である。76は萩焼のピラ掛け碗で、外側面に灰釉と鉄釉が網目状に掛かる。内面は黒灰釉。77は産地不明の緑釉皿で、口縁内面に浮文による雷文が巡る。78は肥前の灯火具。79は白泥の上に口縁部のみ緑釉をかけた火入れで口縁上端の器壁が脱落している。80はヒョウソク、81はボタン状のつまみを持つ行平蓋、82は高台状のつまみを持つ行平蓋、83は鉄軸鍋である。

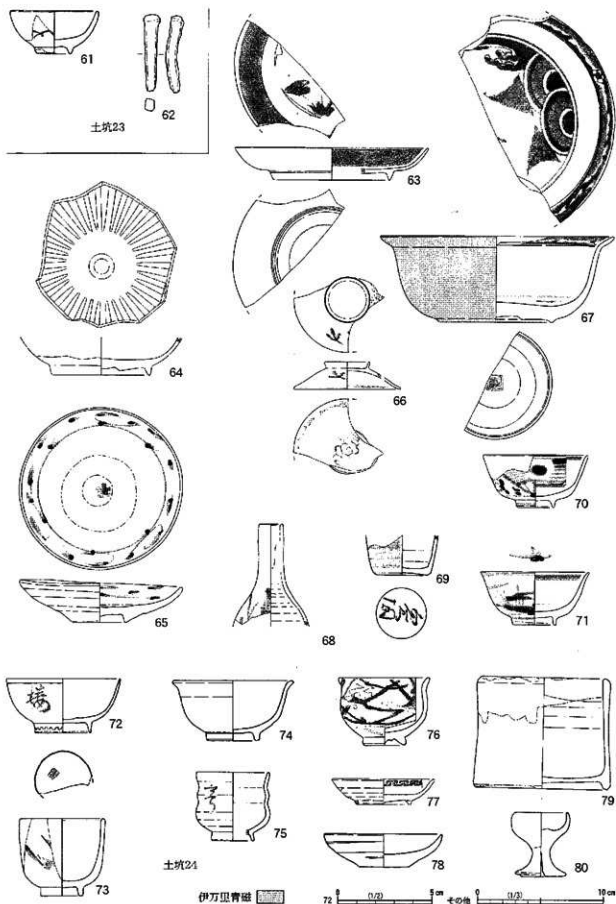
84は巴文の赤軒丸瓦、85は鎌である。刃部に孔が開けてある。伴出遺物に瀬戸美濃磁器を含むためこれらは19世紀中頃に比定される。

86～93は土坑24bから出土した(第25図)。86～89は肥前磁器で、86が紅猪口、87は小瓶、88は水滴である。89は簪で装飾部は菊の花弁が陽刻と線刻で表現され、中央部には細かく刻みを入れておしべを表現し、断面円形と三角形の軸部に固定されている。呉須と鉄釉により彩色されている。

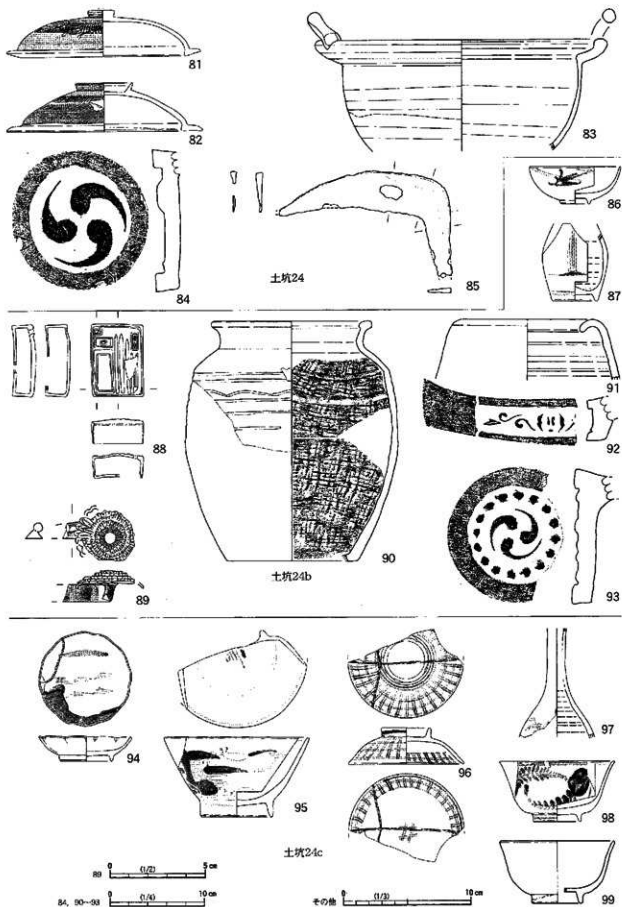
90は肥前陶器甕である。91は土器の火消壺で、表面に細かいミガキが入る。92は太線の均整唐草文による赤軒平瓦、93は三つ巴+珠文による赤軒丸瓦である。土坑24bからは図示していないが瀬戸美濃磁器端反碗片も出土しているため、91～93の年代は19世紀中頃とみられる。



第23図 土坑22の出土遺物



第24図 土坑23・24aの出土遺物



第25図 土坑24a・24b・24cの出土遺物

94～105は土坑24cから出土した(第25・26図)。94～97は肥前磁器である。94は手塩皿、95は広東碗、96は碗蓋、97は鶴首の瓶である。94・96は焼継ぎ痕がある。98は瀬戸美濃の磁器端反碗である。

99～103は陶器である。99は京信楽系の端反碗、100は産地不明～102は産地不明で100は行平蓋、101は鉢、102は甕、103は肥前の襷鉢である。

104は肥前磁器製の窯道具で、無釉の側縁部に細かな捺痕が入り、戸車に転用されている。105は黒色の海鼠瓦で、縁の内側にケビキ線が入り、その内側に付着物が薄く残っている。

106～115は土坑25から出土した(第26図)。106～114は肥前・波佐見磁器である。106は大皿で外面に唐草文、内側面には区画された中に宝文が配された芙蓉手のモチーフが描かれる。器形は17世紀後半の直線的に開く器形ではなく、口縁部が内湾する。18世紀頃か。107・108は波佐見の五寸皿で、107は内面にコンニャク印判の五弁花、108は内面に網目文・半菊文、外面に唐草文が施される。109・110は二重網目文のくらわんか碗、111は外面松竹梅文の碗、112は雨降り文の口縁が内湾する小杯、113は草花文の口縁が外反する小杯、114は合子である。115は鉄製の火箸である。

116は土坑26から出土した中世の土師器小皿である。

117～121は土坑27から出土した(第27図)。117は土師器高杯である。中空の脚部で、中央部が膨らむ。古墳時代中期に比定され、本遺跡では最も古い時代の所産となる。118は瀬戸美濃大窯1か2段階の筒型香炉、119はⅣ期の珠洲片口鉢、120・121は中世土師器の小皿である。

122～140は土坑28aから出土した(第27・28図)。122～130・132は肥前もしくは波佐見の磁器である。122は外面二重網目文、内面一重網目文で見込みにコンニャク印判による菊花文が入る。123は外面に蝙蝠文が描かれた蓋物の身で、焼継ぎ痕がある。124は紅猪口、125は仏飯器、126は蛸唐草文と草花文が施された猪口、127は蛸唐草文の皿、128は唐草文とコンニャク印判の五弁花がある五寸皿、129は竹と虎が浮文で表現された水滴、130は香炉、132は端反碗である。131・133は瀬戸美濃磁器の端反碗、134は蓋である。外面に山水樓閣文、口縁内外面に墨弾きによる渦文が走る。

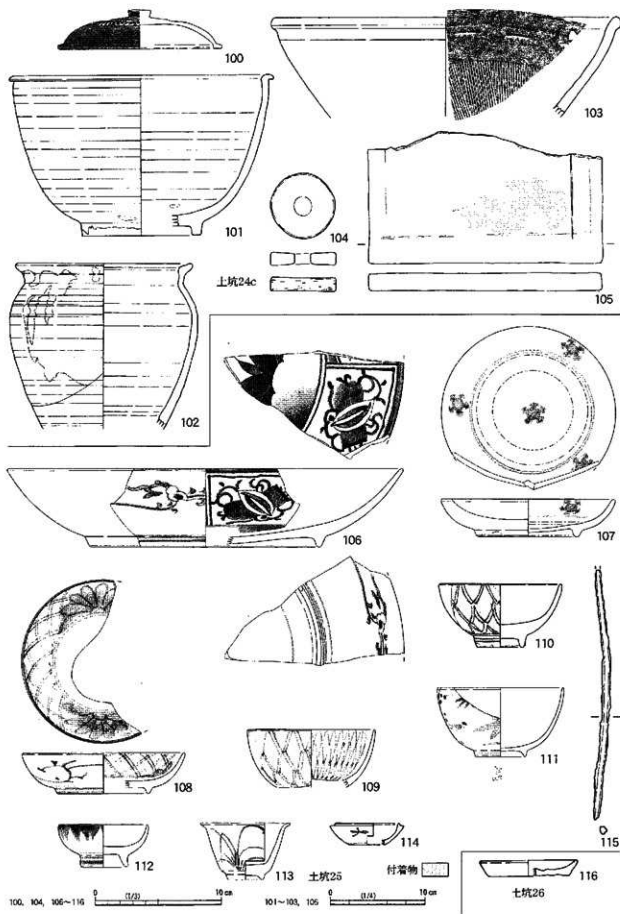
135～140は陶器である。135は大塚相馬焼の徳利で外面に鉄絵で走駒文が描かれる。136は京信楽系の灯明皿受、137は産地不明の火入れ、ロク口成形の後、四方から胴部に板を押し当て、隅丸方形にしている。口縁部に鉄絵で唐草文を描く。138は灰釉の鉢で内面に目跡が残る。高台内に墨書「西屋ウモチ」か。139は襷鉢、140は簀木鉢で口縁が外へ折れ、口縁端がやや下がる。胴部に灰釉の後、部分的に白釉を施す。会津本郷に類似例がある。土坑28aから出土した遺物は、瀬戸美濃磁器・大塚相馬焼・京信楽系陶器を含むため、19世紀中頃以降に比定されよう。

141～150は土坑32から出土した。141・142は珠洲の片口鉢と甕片、143は壺器系北越窯の甕、144は中国の青磁碗で、13世紀中頃から15世紀頃の所産である。145・146は17世紀初頃の手づくね土師器、147は登窯期の瀬戸美濃の志野向付、148・149は青花皿、150は肥前磁器皿で内面に梅樹文、外面に如意頭唐草文が施される。17世紀後半～18世紀頃とみられる。土坑32の出土遺物は17世紀代のものが多く、18世紀代のものが少量含まれる。

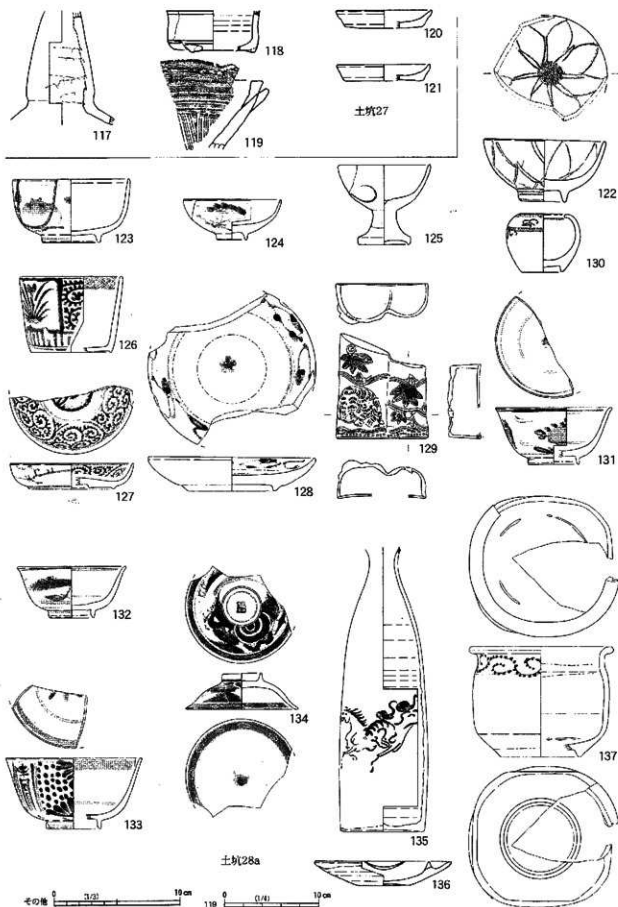
151は土坑34から出土した産地不明の陶器鉢である。本遺跡からはほかに陶器鉄釉鍋、焜炉目皿が出土しているため19世紀代に比定されよう。

152は土坑36から出土した中砥石である。

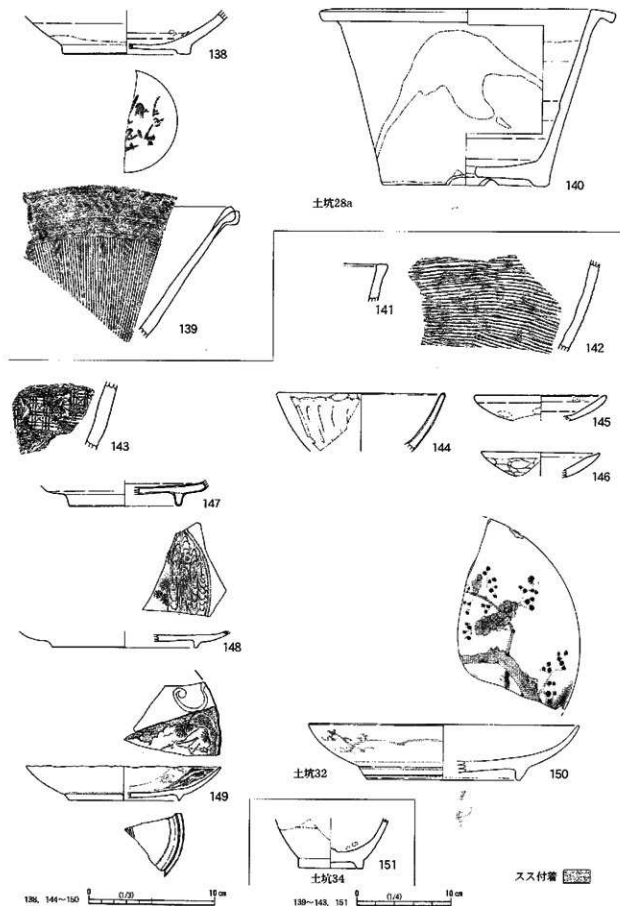
153～164は土坑37から出土した(第29図)。153～156は肥前・波佐見の磁器で、153は碗、154は小杯、155は碗蓋、156は蓋付鉢の蓋である。157は瀬戸美濃磁器端反碗、158～160は京信楽系陶器の端反碗、小杉碗、皿である。161は大塚相馬焼の土瓶(関根1998)で、注口部は鉄砲口、取っ手を繋げるための耳はリング状を呈す。



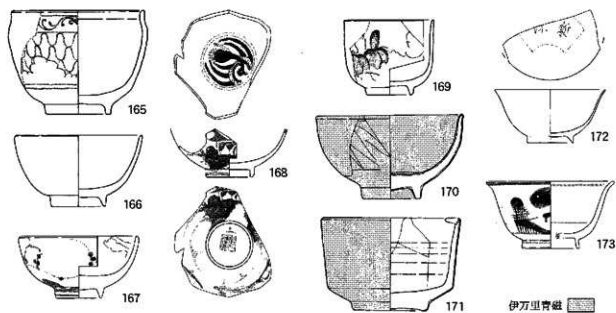
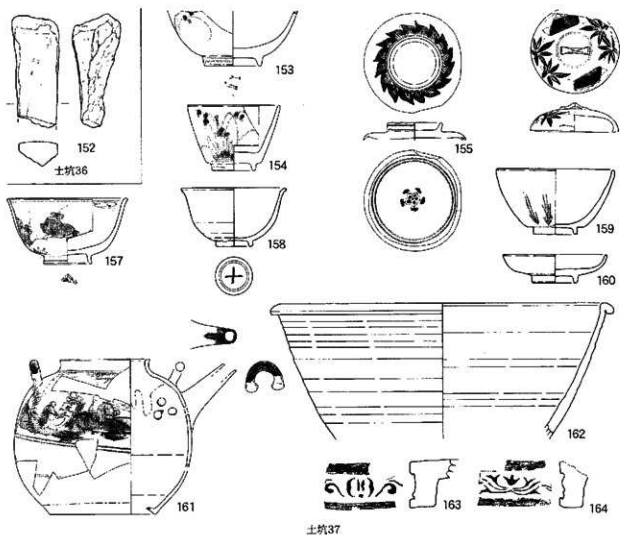
第26図 土坑24c・25・26の出土遺物



第27図 土坑27・28aの出土遺物



第28図 土坑28a・32・34の出土遺物



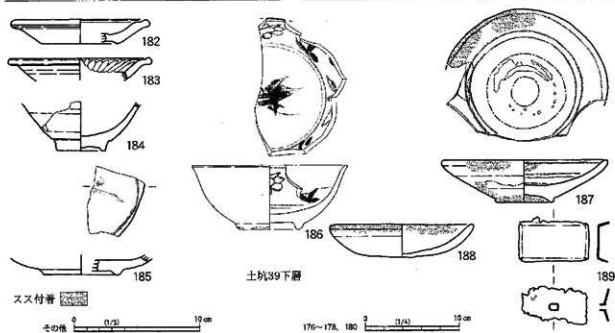
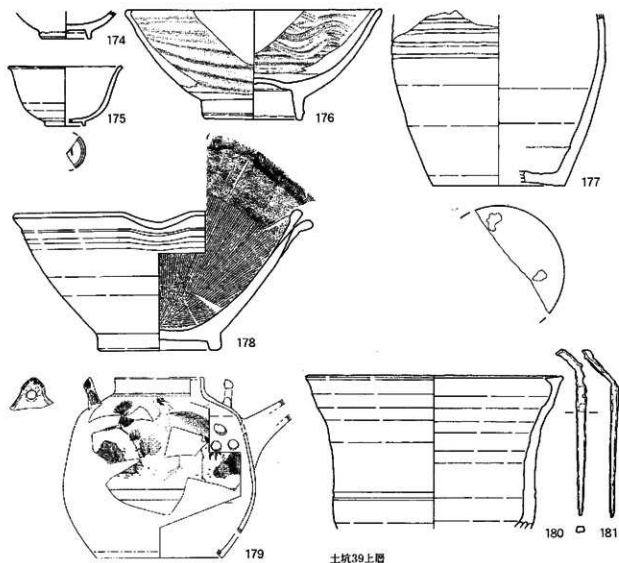
土坑39上層

その他 0 0.5 10 cm

162~164 0 0.5 10 cm

172 0 0.5 5 cm

第29図 土坑36・37・39の出土遺物



第30図 土坑39の出土遺物

160は外面鉄軸、内面白釉の口縁が外反する鉢である。163・164は黒軒平瓦で、163は太線による均整唐草文、164は菊花文が付く。瓦の年代は伴出した瀬戸美濃磁器・大塚相馬焼土瓶などの特徴から、19世紀中頃に比定される。

165～189は土坑39から出土した。165～181は2～7層の土坑上層、182～187は13層～20層の土坑下層出土として扱った。

165～171は肥前・波佐見の磁器である。165はⅡ-2期（1630～1640年）の天目形碗、166～168は丸碗、169は筒碗である。168の高台内に焼き雑白玉粉に赤色顔料を混ぜたもので「二」字の印を付けている。170は青磁碗、171は青磁香炉である。172は瀬戸美濃磁器の薄手小杯、173は端反碗である。

174は京信楽系陶器の碗、175は端反碗である。176は肥前陶器の刷毛目鉢、177は甕で、胴上部の外面に沈線文、底面に胎土目の融着痕が残る。178は産地不明の播鉢である。179は大塚相馬の土瓶で、耳は板状である。180は鉄軸が施された鉢で、内外面に胎色の鉄軸が施される。181は鉄製の和釘で頭部が折れている。

182・183は瀬戸美濃折鉢皿で、183は内面に花卉状のソギが入る。184は天目茶碗で登窯期の瀬戸美濃産か。185は組成の青花皿、186は肥前産とみられる磁器の碗で、葦筒底皿の高台で、口縁部が外反する。187は肥前陶器皿で、内面に鉄絵による團線が巡る。見込みは蛇の目釉割ぎで砂粒が付着する。風化したタール状の付着物がある。188は手づくねの土師器小皿でタール状の付着物がある。187・188は灯明皿として使用していたとみられる。189は銅製の金具で、二つの部品に分かれているが、重なって出土したため、元は一体となって箱状を呈していたとみられる。上の図は銅板の四辺を折り曲げ、下の図は板の中央が穿孔され、方形の筒と組み合わせている。土坑39の遺物は17世紀代～19世紀代の陶磁器が混在する。土層の堆積状況からみて、埋没後中央部が後から掘りなおされたとみられ、切り合いが古い下層からの出土遺物は、186の年代が不明ながら他は17世紀代である。

190～195は土坑40から出土した。190は肥前磁器皿で、口縁が外反し、呉須の発色は悪い。191は産地不明の陶器小杯、192は瀬戸美濃磁器碗である。193は片刃の小刀、194は椀形滓である。195は赤丸瓦で内面に鉄線による直線的なコビキBの切り離し痕が残る。

196～198は土坑46から出土した。196は在地産の須恵器有台杯B、197は中世土師器で198は珠洲片口鉢である。15世紀前半頃に比定される。

2) 溝出土の遺物（第31・32図・図版9・17・18）

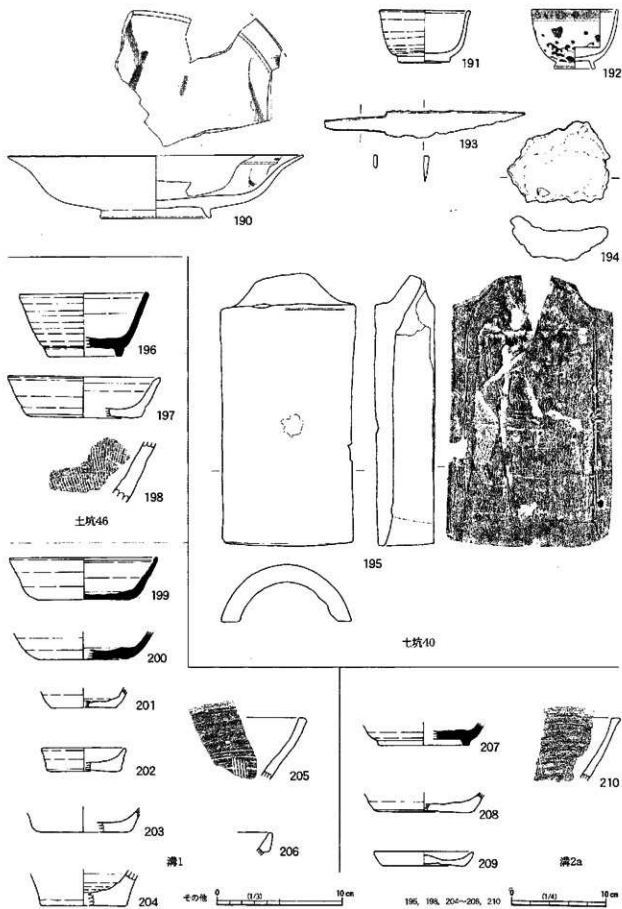
199～206は溝1から出土した。199は小泊産、200は在地産の須恵器無台杯、201は土師器小型小甕、202・203は中世土師器小皿と皿である。204は珠洲産R種、205は片口鉢である。206は越中瀬戸の播鉢である。199～201は9世紀中頃、202～205は14～15世紀頃、206は16世紀末に比定される。

207～210は溝2 aから出土した。207は在地産の有台杯A、208・209は中世土師器の皿・小皿、210は珠洲片口鉢である。207は8世紀末～9世紀前半、208～210は14世紀代に比定される。211～214は溝2 bから出土した。211は小泊産の無台杯で底面に墨書が認められる。212は黒色土器Aの無台碗、213は珠洲産R種、214は片口鉢である。211・212は9世紀後半、213・214は14世紀に比定される。

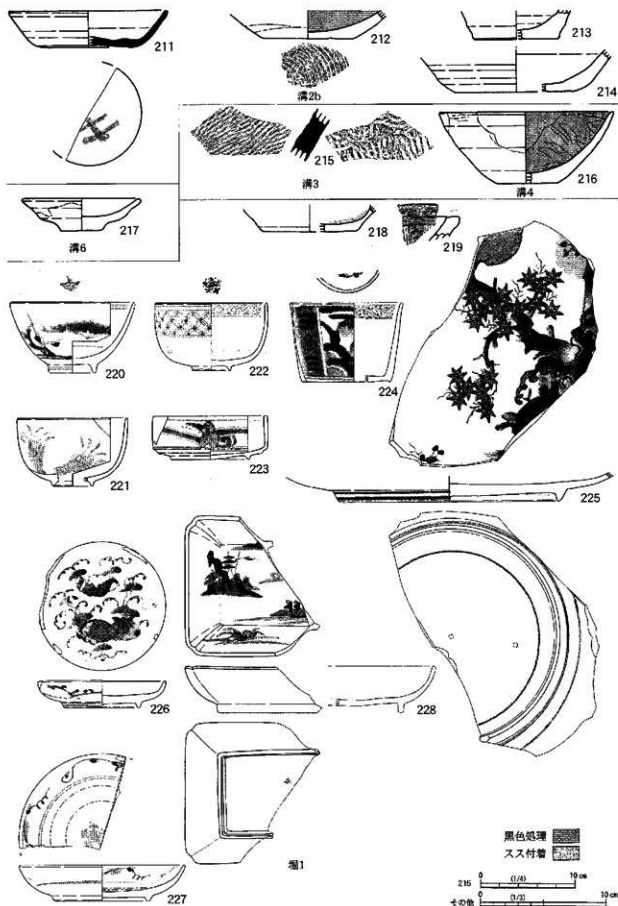
215は溝3から出土した8世紀末～9世紀前半の須恵器甕胴部片、216は溝4から出土した9世紀後半頃の黒色土器Aの碗である。217は溝6から出土した肥前陶器の灯明皿で18世紀前半頃に比定される。

3) 堀出土の遺物（第32・33図・図版9・18）

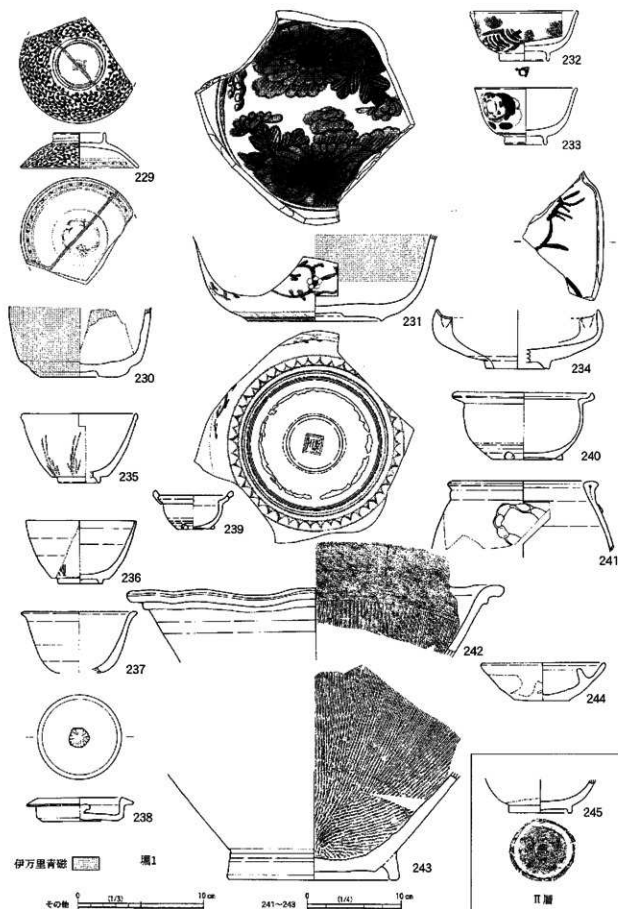
218～243は堀1から出土した。218は中世土師器皿、219は越前の播鉢である。220～231は肥前もしくは波佐見の磁器である。220は碗、221・222は丸碗、223は段重、224は猪口、225は大皿、226は皿、227は波佐見の



第31図 土坑40・46, 溝1・2 a の出土遺物



第32図 溝2b・3・4・6，堀1の出土遺物



第33図 堀1・堀2の出土遺物

五寸皿、228は角皿、229は陶蓋である。230は波佐見の青磁香炉、231は鉢で、口縁内面に淡い青磁釉が施される。226・230が17世紀後半～18世紀前半頃に比定されるとみられ、ほかは、いずれも18世紀末から19世紀代に比定される。232・233は19世紀中頃の瀬戸美濃磁器の端反碗である。

234～244は陶器で、234は鉄絵が施された肥前向付、235・236は京信楽系の小杉碗、238は蓋、239・240は産地不明の鉄緒鍋で、239はミニチュアの玩具である。241は貼り付け花文のある肥前陶器甕、242・243は摺鉢、244は錆釉の灯明皿で、内面にかえりを持つ。234・241が17世紀初頭～前半、243が18世紀前半に比定されるほかは19世紀代に比定される。

4) 遺構外出土の遺物 (第33図・図版9)

245はⅡa層から出土した京焼風肥前陶器で、高台内に押印文がある。

b. 調査区②出土の木製品・漆器

1) 土坑出土の木製品・漆器 (第34～39図・図版19～26)

木製品は、土坑23・24b・24c・28a・37・39・40・堀1から出土した。出土陶磁器類や遺構の切り合いからいずれも近世末期に比定される。

246は土坑23から出土した。4側面に墨痕が認められるが、いずれも解説不能、駒か(第34図)。

247・248は土坑24bから出土した。247は黄漆で花文が描かれた漆器蓋、248は焼印のある樽蓋で「越後・新発田・鈴木」が読み取れる。

249～289は土坑24cから出土した(第34～38図)。249・250は漆器碗、251は漆器蓋で黒色漆地に黄漆で文様が入る。252は托とみられ、上面の環状の窪みに黒色漆が塗られている。

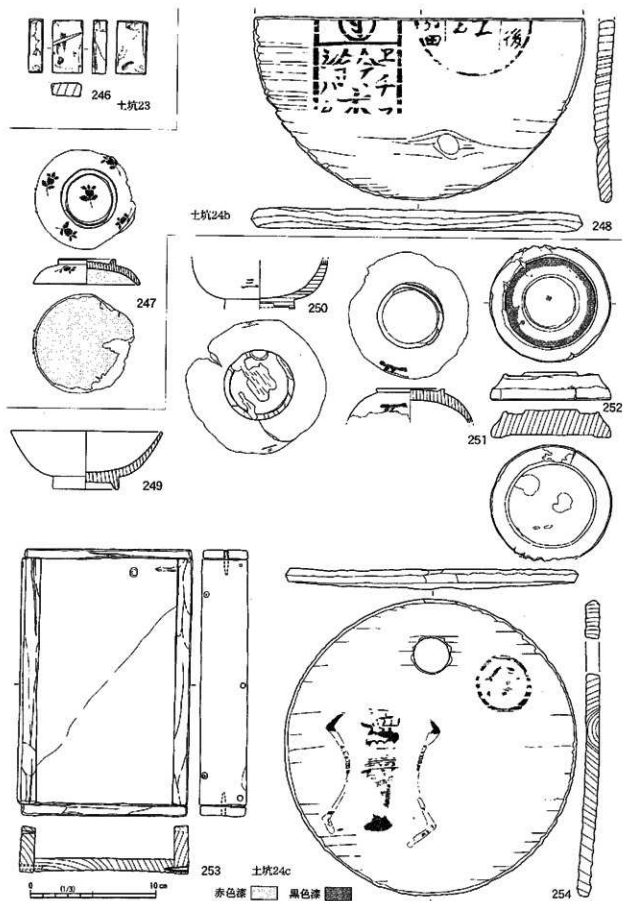
253は箱で木釘により側板が固定されている。254は濁漆油の樽蓋である。256は箱蓋で、絵画とみられる墨痕が残る。墨痕のある面の裏、側縁に沿って溝が彫ってある。255は頭部に焼印のある栓、256・257は箱の蓋である。257は隅丸方形を呈し、左右の側縁に沿って溝を彫り、板をはめ込んでいる。表面に赤色漆が塗布され、丸に堀の焼印と、その下に墨書で天地逆の「か」が認められる。図示した裏面は全面が火を受け、焦げている。左右の縁の板が箱の身に接する部分と推定され、表面が蓋の内面となろう。

258～262は上部に紐穴が残る木札で、258～261は菱形で表裏に墨痕もしくは焼印、262は短冊形状で表面に焼印と墨痕、裏面に墨痕がある。258の表面は「燕」もしくは「点」か。259～261は大きさも同じで、表裏面に丸に「壘」の焼印、262は表面に丸に「古」の焼印と「古田新口」の墨書、裏面に「御入用口」の墨書がある。

263a・263bは、柎目の板材で上下に釘穴を持つ、形状・木取り・大きさが同じであるため同一個体と想定した。接合しないが文字の配置からみて263aが右、263bが左に配置されるとみられる。「西塚氏」の墨書が読める。264は板目材で、周縁部に釘穴、表裏面に細かな刃痕が残るため、箱蓋・敷板などの転用品とみられる。表裏面に複数の筆跡・方向による墨書が認められる。表面は「名慎雪久…徳行なくし…」などの語句がみえ、教訓的な語句の習書とみられる。裏面は複数の「御」「庄屋」などが記載され、これも習書であろう。

265は「萬延元」と記載された1860年の紀年銘木簡、266～271は荷札木簡である。266～269は表面に城下近郊の村名と屋号名、裏面に10～11月頃の日付が記載される。266・269は下端部が斜めに削られ、268は短冊型である。類似例が慶應寺跡に相当する第10地点でまとまって出土している(鶴巻ほか1997)。270・271は穴のあいた板を割り折り、荷札としている。接合しないが、もとは同一の板であったとみられる。「加藤小太郎荷物」と記載される。

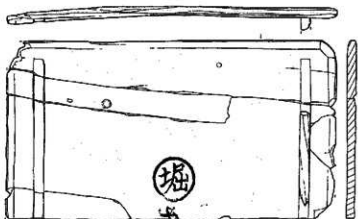
272は背面が欠損しているがもとは棒状の材と推定され、表面の面取りされた部分に「堀又平御口口」の墨書



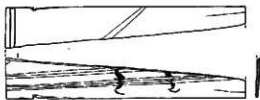
第34図 土坑24b・24cの出土木製品



255



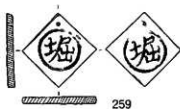
257



256



258



259



260



261



262



263b



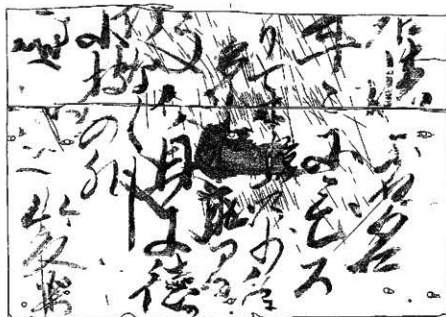
263a

土坑24c



赤色漆

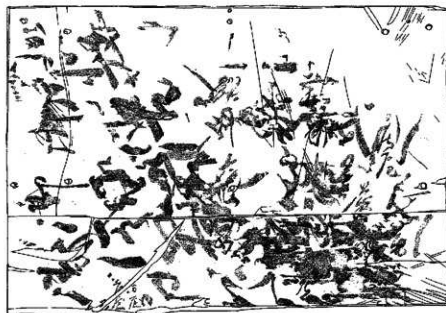
第35圖 上坑24c の出土木製品 (1)



264



265



266



267



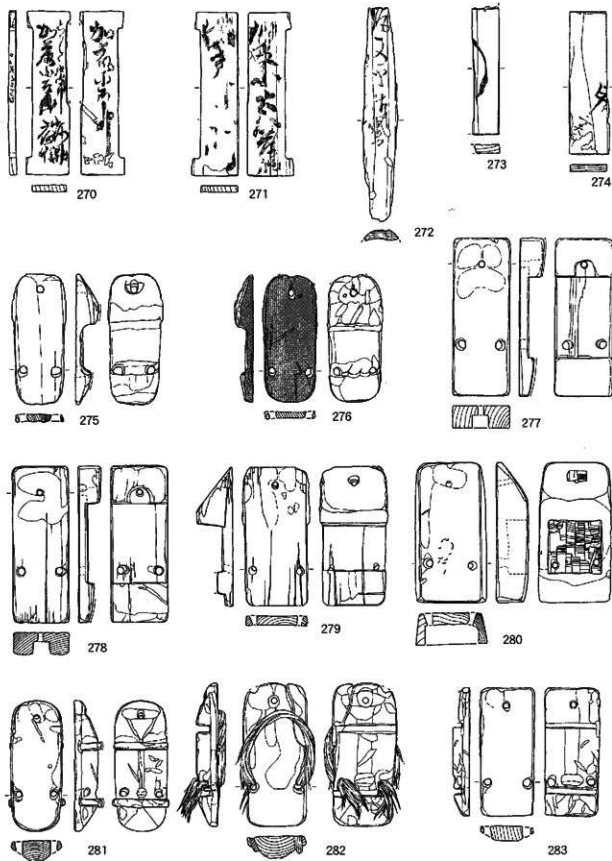
268

土坑24c



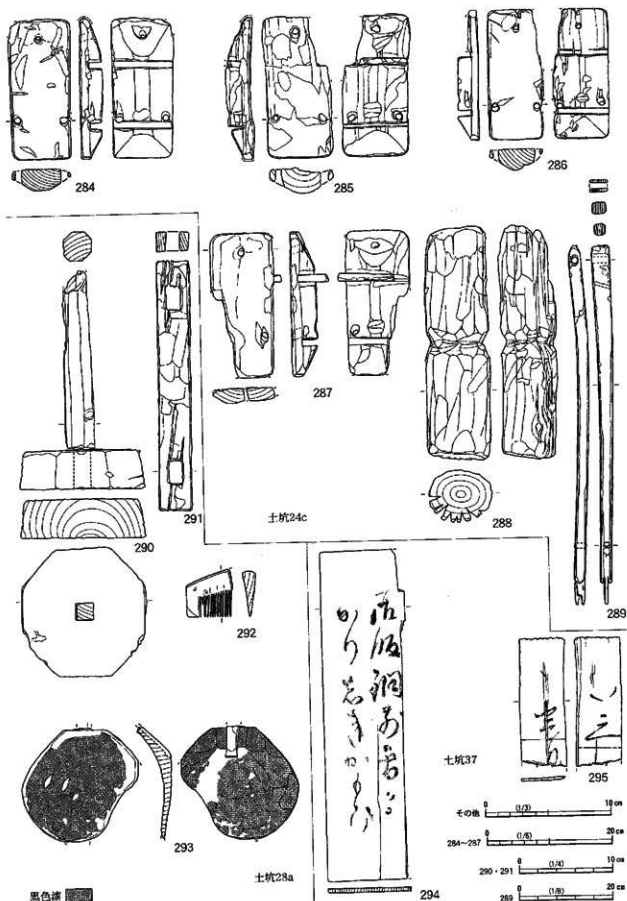
269

第36図 土坑24cの出土木製品(2)



黒色漆

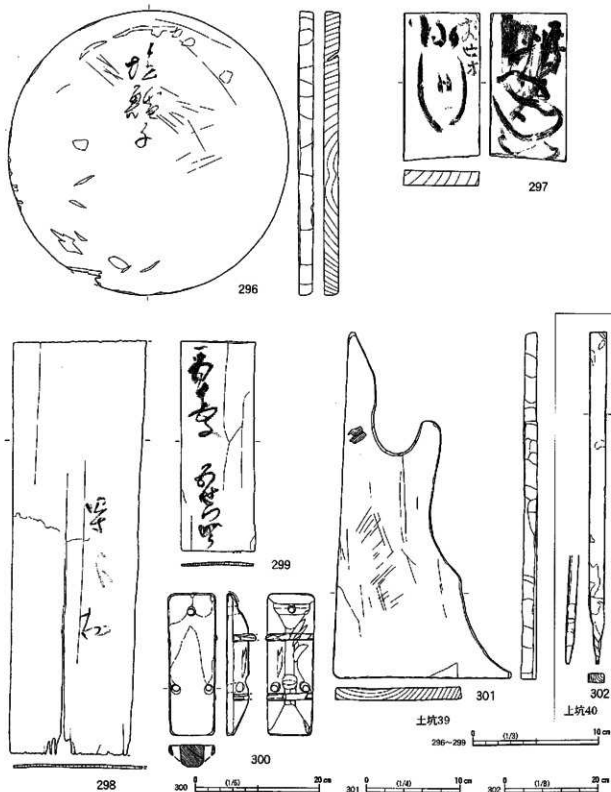
第37図 土坑24cの出土木製品(3)



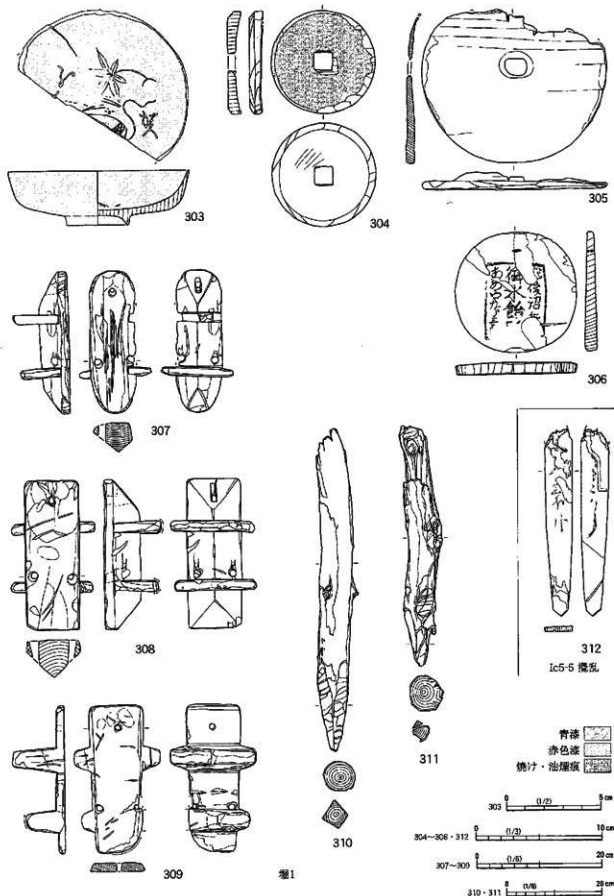
第38図 土坑24c・28a・37の出土木製品

がある。273・274は墨痕が残る板材で273は丸の一部、274は「甲三失氏」と書かれている。

275～287は下駄で、275～280は一木による連歯もしくは割り下駄の木屐である(第37・38図)。両丸長方形もしくは長方形で、前歯のつま先側が斜めに加工されるもの(275・276・279・280)、歯が台の前後両端に付くもの(279・27)、後歯が台の後端よりの内側に入るもの(279)がある。276の上面、側面に黒色漆が塗布されている。



第39図 十坑39・40の出土木製品



第40図 堀1ほかの出土木製品

281～287は構造下駄で、いずれも台の上部に杵穴が明かない陰卯下駄である。隅丸長方形もしくは長方形で、裏面は中央部が面取りされ、つま先側の孔（前壺）周辺と、左右の横緒孔を結ぶ線上の殺の部分にえぐりが入る。歯は板目材を用いており、台と歯は同一樹種、別樹種を用いるものがある。282は棕櫚の鼻緒が横緒孔に通っており、木栓で固定している。台はキリ、木栓はケンボナシである。

288はカエデ属の丸木材の中央にえぐりを入れた甕櫃。289は硬質の材に杵穴、仕口などの加工が施されている。上部部に細釘・針金状の金属が刺さっていた。何らかの器具の一部とみられる（第38図）。

290～293は土坑28aから出土した。290は燗台の脚部、291は桶の取っ手である。292は梳櫛で、歯の根元に漆もしくは墨痕が点状に観察される。293は内外面に黒色漆が塗布された杓子で、別材の柄は欠損する（第38図）。

294・295は土坑37から出土した木筒である（第38図）。294の墨書にある「飯銅」とは、水甕の意味があり、大鉢、手水鉢などを指す。何らかの容器を入れた箱の一部であった可能性があろう。

296～301は土坑39から出土した（第39図）。296は樽の蓋で、「塩鯉子」の墨書がある。297は戯画が描かれた木札、298・299は木簡、300は陰卯下駄である。301は刀掛台の側版とみられ、曲線のえぐりは刀受け部であろう。表面の加工は粗い。2枚で一对、もしくは一对の側版をはかの部材で固定する構造とみられる。

302は土坑40から出土した杭である。先端が両側縁から削られ尖っている（第39図）。

2) 堀出土の木製品・漆器

303～311は堀1から出土した（第40図）。303は内外面赤色漆の皿で、見込みに青漆による紫と、黒色漆で文字・唐草文を描き、その上に金蒔絵を施している。

304は燗台もしくは灯明台の皿部で、内面に煤、油煙痕が付着する。中央部に一辺1.1cmの方形の孔がある。底部外面に軸受けのアタリはない。305は円形底板で中央部分に径1.8cmの孔が開く。306は円形蓋板で、上面に焼印と、その上に桜皮による描みの一部が残る。焼印にある「越後沼垂あめや九郎三郎」は、明治28年刊行の『越後風俗史第五輯』に「寛永年中蒲原郡沼垂町糖屋九郎三郎なる者發明して清潔の水飴を製して領主新発田の清口家より將軍家へ獻せられし事あり」と記載されている。沼垂町には新発田藩の蔵があり、ここの著名な水飴屋が使っていた容器の蓋であろう。

307・308は陰卯下駄で、土坑24cの出土品に比べ、台部が厚い。台の表面に柿渋もしくは、桐漆とみられる塗料が薄く塗られている。308の後歯先端には砂粒が食い込んでいる。309は連歯下駄で後歯の減りが著しい。310・311は丸木杭で、310が第13図の堀西岸、311が東岸の断面図に記載した杭となる。いずれも先端が断面方形に削られ、311は基部が折れている。

3) 遺構外出土の木製品

312は、土坑21上層の撓乱から出土した木筒である。先端は側面から削られて尖り、上部は欠損して不鮮明だが、側面に小さなえぐりが入っている。

表3 陶磁器、金属製品・石製品遺物観察表

・胎土の略称：灰-灰石、黄-石英、黄-安山岩、緑-緑色粘土、赤-赤色粘土、白-白土、黒-黒色粘土、
 緑-緑色粘土、砂-砂、砂-海砂、砂-海砂

調査番号	遺物	土層	グリッド	種類	図記	位置(m)	形状	時期	特徴	二次利用・使用用途	保存状況	発掘地	調査時期
						口径	底径						
1	P14b	1	T13-5	念珠	玉	10.0mm	8.7mm (底)	-	1.2g、横断面(直径) = 1.0mm、縦断面 = 1.0mm、横断面の断面あり、 0.2g、孔のある部分の一部分に平直部あり、	-	-	11	9
2	P14b	1	T13-5	念珠	玉	5.0mm	4.5mm (底)	-	0.2g、孔のある部分の一部分に平直部あり、	-	-	11	9
3	P14b	1	T13-5	念珠	玉	5.0mm	4.5mm (底)	-	0.2g、孔のある部分の一部分に平直部あり、	-	-	11	9
4	P14b	1	T13-5	念珠	玉	6.1mm	5.1mm (底)	-	0.2g、	-	-	11	9
5	P14b	1	T13-5	念珠	玉	6.0mm	5.1mm (底)	-	0.2g、	-	-	11	9
6	P14b	1	T13-5	念珠	玉	6.1mm	5.1mm (底)	-	0.2g、	-	-	11	9
7	P14b	1	T13-5	念珠	玉	6.0mm	5.1mm (底)	-	0.2g、横断面に直径5.5mmの平直部、 孔に接する部分を平直に平直、曲線、曲線あり、 反対側は、欠損により、断面部があるかは不明、	-	-	11	9
8	P14b	1	T13-5	念珠	玉	5.0mm	4.5mm (底)	-	0.2g、横断面に直径5.5mmの平直部、 孔に接する部分を平直に平直、曲線、曲線あり、 反対側は、欠損により、断面部があるかは不明、	-	-	11	9
9	P14b	1	T13-5	念珠	玉	6.0mm	5.1mm (底)	-	0.2g、	-	-	11	9
10	P14b	1	T13-5	念珠	玉	5.7mm	4.5mm (底)	-	0.2g、	-	-	11	9
11	P14b	1	T13-5	念珠	玉	6.1mm	5.1mm (底)	-	0.2g、	-	-	11	9
12	P14b	1	T13-5	念珠	玉	5.3mm	4.5mm (底)	-	0.2g、横断面に、直径5.5mmあり、	-	-	11	9
13	P14b	1	T13-5	念珠	玉	6.1mm	5.1mm (底)	-	0.2g、	-	-	11	9
14	P14b	1	T13-5	念珠	玉	6.5mm	5.1mm (底)	-	0.2g、断面形状、	-	-	11	9
15	P14b	1	T13-5	念珠	玉	7.1mm	5.1mm (底)	-	0.2g、断面形状、孔間辺欠損、	-	-	11	9
16	井戸1	1	T13-5	断面	大	-	-	8~90	断面、断面形状、断面、断面形状、	-	-	11	9
17	井戸1	1	T13-5	断面	大	-	-	150	断面、断面形状、断面、断面形状、	-	-	11	9
18	井戸1	1	T13-5	断面	大	-	-	150	断面、断面形状、断面、断面形状、	-	-	11	9
19	井戸1	1	T13-5	断面	大	-	-	150	断面、断面形状、断面、断面形状、	-	-	11	9
20	井戸1	1	T13-5	断面	大	-	-	150	断面、断面形状、断面、断面形状、	-	-	11	9
21	土坑5	1	T13-5	断面	大	-	-	150	断面、断面形状、断面、断面形状、	-	-	11	9
22	土坑5	1	T13-5	断面	大	-	-	150	断面、断面形状、断面、断面形状、	-	-	11	9
23	土坑10	1	T13-5	断面	大	-	-	150	断面、断面形状、断面、断面形状、	-	-	11	9
24	土坑10	1	T13-5	断面	大	-	-	150	断面、断面形状、断面、断面形状、	-	-	11	9
25	土坑10	1	T13-5	断面	大	-	-	150	断面、断面形状、断面、断面形状、	-	-	11	9
26	土坑10	1	T13-5	断面	大	-	-	150	断面、断面形状、断面、断面形状、	-	-	11	9
27	土坑10	1	T13-5	断面	大	-	-	150	断面、断面形状、断面、断面形状、	-	-	11	9
28	土坑10	1	T13-5	断面	大	-	-	150	断面、断面形状、断面、断面形状、	-	-	11	9
29	土坑10	1	T13-5	断面	大	-	-	150	断面、断面形状、断面、断面形状、	-	-	11	9
30	土坑10	1	T13-5	断面	大	-	-	150	断面、断面形状、断面、断面形状、	-	-	11	9
31	土坑10	1	T13-5	断面	大	-	-	150	断面、断面形状、断面、断面形状、	-	-	11	9
32	土坑10	1	T13-5	断面	大	-	-	150	断面、断面形状、断面、断面形状、	-	-	11	9
33	土坑10	1	T13-5	断面	大	-	-	150	断面、断面形状、断面、断面形状、	-	-	11	9
34	土坑10	1	T13-5	断面	大	-	-	150	断面、断面形状、断面、断面形状、	-	-	11	9
35	土坑10	1	T13-5	断面	大	-	-	150	断面、断面形状、断面、断面形状、	-	-	11	9
36	土坑10	1	T13-5	断面	大	-	-	150	断面、断面形状、断面、断面形状、	-	-	11	9
37	土坑10	1	T13-5	断面	大	-	-	150	断面、断面形状、断面、断面形状、	-	-	11	9
38	土坑10	1	T13-5	断面	大	-	-	150	断面、断面形状、断面、断面形状、	-	-	11	9
39	土坑10	1	T13-5	断面	大	-	-	150	断面、断面形状、断面、断面形状、	-	-	11	9
40	土坑10	1	T13-5	断面	大	-	-	150	断面、断面形状、断面、断面形状、	-	-	11	9
41	土坑10	1	T13-5	断面	大	-	-	150	断面、断面形状、断面、断面形状、	-	-	11	9
42	土坑10	1	T13-5	断面	大	-	-	150	断面、断面形状、断面、断面形状、	-	-	11	9
43	土坑10	1	T13-5	断面	大	-	-	150	断面、断面形状、断面、断面形状、	-	-	11	9
44	土坑10	1	T13-5	断面	大	-	-	150	断面、断面形状、断面、断面形状、	-	-	11	9

[illegible]

種別	通称	土名	グリット	種類	時期	直径 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	時期	特徴	農作物・使用法	産地	生産地	時期	写真
99	土灰24b	2	1e4-4	磁器	曹	16.9	13.8	25.3	1.6	-	表部は陶質、内面・底面は青灰色。	破片	肥前	25	10
99	土灰24b	2	1e4-4	陶器	曹	16.9	13.8	25.3	-	-	破片。陶質。内面・底面に模写目付模 (一部逆目付)。内面に若干タタキ。	破片	肥前	25	10
91	土灰24b	2	1e1-3	土器	大津遺跡	14.8	-	-	-	-	外側、ミダリ。	破片	肥前	25	13
92	土灰24b	2	1e1-3	瓦	歩野宮	17.0 (丸)	-	-	3.0 (高)	-	赤褐色の軟泥、太い馬鹿草文。	瓦片	在池	25	13
93	土灰24b	2	1e1-3	瓦	歩野宮	14.6 (丸)	-	-	-	-	軟泥。十六文字十三つ巴。	瓦片	在池	25	13
94	土灰24c	2	1e4-4	磁器	小皿	7.4	4.0	2.0	-	-	18C後～19C中 コクロ成形。施付、裏付無施。見込みに器文。外側に山文。V型。	破片	肥前	25	13
95	土灰24c	2	1e4-5	磁器	広重納	11.2	5.5	6.4	-	-	18C後～18C中 コクロ成形。施付、裏付無施。見込みに器文。外側に山文。V型。	破片	肥前	25	14
96	土灰24c	2	1e4-4	磁器	納	9.0	4.0	2.9	-	-	18C中 コクロ成形。施付、裏付無施。見込みに器文。外側に山文。V型。	破片	肥前	25	13
97	土灰24c	2	1e4-4	磁器	皿	1.0	-	-	0.7	-	18C後～18C中 施付。コクロ成形。施付、裏面に竹文。V型。	破片	肥前	26	14
98	土灰24c	2	1e4-4	磁器	焼成器	9.2	3.8	4.8	-	-	18C後 コクロ成形。施付、裏付無施。見込みに器文。外側に山文。V型。	破片	肥前	26	14
99	土灰24c	2	1e4-4	磁器	焼成器	9.0	4.0	4.9	-	-	18C後 施付。コクロ成形。施付、裏面に竹文。V型。	破片	肥前	26	14
100	土灰24c	2	1e4-4	磁器	竹平皿	11.6	1.8	3.2	-	-	コクロ成形。施付、裏面に竹文。V型。	破片	肥前	26	14
101	土灰24c	2	1e4-4	磁器	鉢	27.0	12.4	16.9	-	-	外側軟泥。内面軟泥。	破片	肥前	26	14
102	土灰24c	2	1e4-4	磁器	鉢	1.8	-	-	-	-	内外面軟泥。一部は掛けによる、なまこ。外側に山文。V型。	破片	肥前	26	14
103	土灰24c	2	1e4-4	陶器	鉢	36.0	-	-	-	-	18C後～18C中 口縁。明り形一帯のみ、内面にスリ目。軟泥。V型。	破片	肥前	26	14
104	土灰24c	2	1e4-4	磁器	焼成器 (口縁に模写)	5.2	1.4 (丸)	1.1 (高)	-	-	18C後～18C中 器縁部と口の内部に透明釉。コクロ成形の模写を施し、中央に $\phi 1.4$ mmの穿孔。厚みは中央部がやや薄くなる。V型。	破片	肥前	26	9
105	土灰24c	2	1e4-4	瓦	風馬瓦	-	-	-	-	-	破片。縁の内側に花文。	破片	在池	26	14
106	土灰24c	2	1e4-4	磁器	大皿	31.6	11.8	0.3	-	-	コクロ成形。施付、裏付無施。見込みに器文。外側に山文。V型。	破片	肥前	26	10
107	土灰24c	2	1e4-4	磁器	皿	13.9	7.8	3.0	-	-	18C コクロ成形。施付、裏付無施。見込みに器文。外側に山文。V型。	破片	肥前	26	14
108	土灰24c	2	1e4-4	磁器	皿	13.0	7.4	3.2	-	-	18C後～18C前 コクロ成形。口縁、施付、内面に二重割目十文字文。外側に山文。V型。	破片	肥前	26	14
109	土灰24c	2	1e1-1	磁器	鉢	10.2	-	<4.0	-	-	18C前 コクロ成形。施付、見込みに割目文。外側に二重割目。V型。	破片	肥前	26	14
110	土灰24c	2	1e1-1	磁器	鉢	9.5	3.6	5.0	-	-	18C中 コクロ成形。施付、見込みに割目文。外側に二重割目。V型。	破片	肥前	26	14
111	土灰24c	2	1e1-1	磁器	鉢	10.0	4.0	5.4	-	-	18C コクロ成形。施付、裏付無施。外側に軟泥。外側に山文。V型。	破片	肥前	26	14
112	土灰24c	2	1e4-2	磁器	小鉢	7.0	3.8	3.4	-	-	18C コクロ成形。施付、裏付無施。外側に山文。V型。	破片	肥前	26	14
113	土灰24c	2	1e4-2	磁器	小鉢	7.1	3.0	4.5	-	-	17C末～18C初 コクロ成形。施付、裏付無施。内面にビンの模写あり。外側に山文。V型。	破片	肥前	26	14
114	土灰24c	2	1e4-1	磁器	合子	5.9	2.8	1.7	-	-	18C後～18C中 口縁・外底・裏面。器一四四。	破片	肥前	26	9
115	土灰24c	2	1e1-1	磁器	和時	19.7 (丸)	6mm (高)	-	-	-	寛永16-16。	破片	肥前	26	9
116	土灰24c	2	1e4-1	土器	小皿	7.6	6.2	1.2	-	-	中津 表部は赤い土。内面・底面は青灰色。内側に新緑模様が施す。	破片	肥前	26	9
117	土灰24c	2	1e4-5	土器	西杯	-	-	-	-	-	表部は赤い土。内面・底面は青灰色。内側に新緑模様が施す。	破片	肥前	26	9
118	土灰24c	2	1e4-5	土器	西杯	-	-	-	-	-	表部は赤い土。内面・底面は青灰色。内側に新緑模様が施す。	破片	肥前	26	9
119	土灰24c	2	1e4-5	土器	西杯	-	-	-	-	-	表部は赤い土。内面・底面は青灰色。内側に新緑模様が施す。	破片	肥前	26	9
120	土灰24c	2	1e4-5	土器	西杯	-	-	-	-	-	表部は赤い土。内面・底面は青灰色。内側に新緑模様が施す。	破片	肥前	26	9
121	土灰24c	2	1e4-5	土器	西杯	-	-	-	-	-	表部は赤い土。内面・底面は青灰色。内側に新緑模様が施す。	破片	肥前	26	9
122	土灰24c	2	1e4-5	土器	西杯	-	-	-	-	-	表部は赤い土。内面・底面は青灰色。内側に新緑模様が施す。	破片	肥前	26	9
123	土灰24c	2	1e4-5	土器	西杯	-	-	-	-	-	表部は赤い土。内面・底面は青灰色。内側に新緑模様が施す。	破片	肥前	26	9
124	土灰24c	2	1e4-5	土器	西杯	-	-	-	-	-	表部は赤い土。内面・底面は青灰色。内側に新緑模様が施す。	破片	肥前	26	9
125	土灰24c	2	1e4-5	土器	西杯	-	-	-	-	-	表部は赤い土。内面・底面は青灰色。内側に新緑模様が施す。	破片	肥前	26	9
126	土灰24c	2	1e4-5	土器	西杯	-	-	-	-	-	表部は赤い土。内面・底面は青灰色。内側に新緑模様が施す。	破片	肥前	26	9
127	土灰24c	2	1e4-5	土器	西杯	-	-	-	-	-	表部は赤い土。内面・底面は青灰色。内側に新緑模様が施す。	破片	肥前	26	9
128	土灰24c	2	1e4-5	土器	西杯	-	-	-	-	-	表部は赤い土。内面・底面は青灰色。内側に新緑模様が施す。	破片	肥前	26	9
129	土灰24c	2	1e4-5	土器	西杯	-	-	-	-	-	表部は赤い土。内面・底面は青灰色。内側に新緑模様が施す。	破片	肥前	26	9
130	土灰24c	2	1e4-5	土器	西杯	-	-	-	-	-	表部は赤い土。内面・底面は青灰色。内側に新緑模様が施す。	破片	肥前	26	9
131	土灰24c	2	1e4-5	土器	西杯	-	-	-	-	-	表部は赤い土。内面・底面は青灰色。内側に新緑模様が施す。	破片	肥前	26	9
132	土灰24c	2	1e4-5	土器	西杯	-	-	-	-	-	表部は赤い土。内面・底面は青灰色。内側に新緑模様が施す。	破片	肥前	26	9

掲載 番号	遺構	土層	グリッド	種類	位置	位置(m)		時期	特徴	二次利用時、使用状況	保存状況	生産地	埋蔵	写真 掲載
						口径	底径							
133	土坑28a	3	Rc-5	磁器	電気瓦	(10.8)	(4.2)	5.8	19C後	口ロ成跡、胎付、蓋付痕跡、見込み文様あり、内面口縁部に華文文、外面に草花文。	1/6	神戸 兵庫	27	15
134	土坑28a	3	Rc-5	磁器	蓋	(9.0)	3.2	2.9	19C後	口ロ成跡、胎付、蓋付痕跡、見込み文様あり、外面に山文文、蓋面底面草花文。	1/2	神戸 兵庫	27	16
135	土坑28a	2	Ia-1	陶器	徳利	(2.0)	6.2	(22.6)	19C	口ロ成跡、胎付、蓋付痕跡、見込み文様あり、外面に山文文、蓋面底面草花文。	1/2	大塚 兵庫	27	10
136	土坑28a	2	Ic-1	陶器	灯明皿	10.9	4.0	1.9	19C	口ロ成跡、胎付、蓋付痕跡、見込み文様あり、外面に山文文、蓋面底面草花文。	3/4	大塚 兵庫	27	15
137	土坑28a	2 2												

調査 番号	遺構 番号	土層	グリッド	種類	部材	断面 (cm)			時期	平法	二次付発露・使用品	遺構番号	発露地	埋没	写真 位置
						口径	高さ	厚さ							
228	遺1	4	Ge	埋設	角柱		3.7		180後 190前	板打痕跡。面材、板打溝。見込みは山本式。面材内に「素」彫刻。V面。		1/4	昭和	32	18
229	遺1	5	Fe	埋設	角柱	9.4 (受部)	4.2 (受部)	2.8	190前中	口径0.5cm。面材、板打溝。見込みは山本式。面材内に「素」彫刻。V面。	炭粉。炭。	2/3	昭和	33	18
230	遺1	5	Fe	埋設	角柱		6.2		170米 190前	外壁部に貼付。蛇の目。V面。		昭和1/2	昭和	33	18
231	遺1	1	Fe	埋設	角柱		18.6	0.8	190前	口径0.5cm。面材、板打溝。見込みは山本式。面材内に「素」彫刻。V面。	炭粉。炭。面材内に「素」彫刻。V面。	昭和1/2	昭和	33	18
232	遺1	1	Fe	埋設	角柱	8.6	3.8	4.0	190後	口径0.5cm。面材、板打溝。見込みは山本式。面材内に「素」彫刻。V面。	炭粉。炭。面材内に「素」彫刻。V面。	1/2	昭和	33	18
233	遺1	1	Fe	埋設	角柱	8.2	3.2	4.5	190前	口径0.5cm。面材、板打溝。見込みは山本式。面材内に「素」彫刻。V面。	炭粉。炭。面材内に「素」彫刻。V面。	1/2	昭和	33	18
234	遺1	5	Fe	埋設	角柱	13.0	0.8	4.7	170前	口径0.5cm。面材、板打溝。見込みは山本式。面材内に「素」彫刻。V面。	炭粉。炭。面材内に「素」彫刻。V面。	1/2	昭和	33	18
235	遺1	5	Fe	埋設	角柱	10.0	3.9	5.5	180後	口径0.5cm。面材、板打溝。見込みは山本式。面材内に「素」彫刻。V面。	炭粉。炭。面材内に「素」彫刻。V面。	1/2	昭和	33	18
236	遺1	1	Fe	埋設	角柱	8.7	3.5	5.0	180後	口径0.5cm。面材、板打溝。見込みは山本式。面材内に「素」彫刻。V面。	炭粉。炭。面材内に「素」彫刻。V面。	1/2	昭和	33	18
237	遺1	5	Fe	埋設	角柱	8.8			180中 180	口径0.5cm。面材、板打溝。見込みは山本式。面材内に「素」彫刻。V面。	炭粉。炭。面材内に「素」彫刻。V面。	1/2	昭和	33	18
238	遺1	5	Fe	埋設	角柱		1.5 (受部)	1.85		口径0.5cm。面材、板打溝。見込みは山本式。面材内に「素」彫刻。V面。	炭粉。炭。面材内に「素」彫刻。V面。	1/2	昭和	33	18
239	遺1		Fe-0	埋設	角柱	5.4	2.5	2.7		口径0.5cm。面材、板打溝。見込みは山本式。面材内に「素」彫刻。V面。	炭粉。炭。面材内に「素」彫刻。V面。	1/2	昭和	33	18
240	遺1	7a	Fe-1	埋設	角柱	15.8	4.9	5.55		口径0.5cm。面材、板打溝。見込みは山本式。面材内に「素」彫刻。V面。	炭粉。炭。面材内に「素」彫刻。V面。	1/2	昭和	33	18
241	遺1	5	Fe	埋設	角柱		16.0		170前中	口径0.5cm。面材、板打溝。見込みは山本式。面材内に「素」彫刻。V面。	炭粉。炭。面材内に「素」彫刻。V面。	1/2	昭和	33	18
242	遺1	1	Fe	埋設	角柱	40.0			180後 190	口径0.5cm。面材、板打溝。見込みは山本式。面材内に「素」彫刻。V面。	炭粉。炭。面材内に「素」彫刻。V面。	1/2	昭和	33	18
243	遺1	1	Fe	埋設	角柱		18.2		180前中	口径0.5cm。面材、板打溝。見込みは山本式。面材内に「素」彫刻。V面。	炭粉。炭。面材内に「素」彫刻。V面。	1/2	昭和	33	18
244	遺1	1	Fe	埋設	角柱	9.6	4.35	3.8		口径0.5cm。面材、板打溝。見込みは山本式。面材内に「素」彫刻。V面。	炭粉。炭。面材内に「素」彫刻。V面。	1/2	昭和	33	18
245		II a	Ia1-3	埋設	角柱		5.0		170後半	口径0.5cm。面材、板打溝。見込みは山本式。面材内に「素」彫刻。V面。	炭粉。炭。面材内に「素」彫刻。V面。	1/2	昭和	33	18
穴壁 土坑1	2	Ia1-2	瓦	埋設	瓦					穴壁土坑1。面材内に「素」彫刻。V面。	炭粉。炭。面材内に「素」彫刻。V面。	1/2	昭和	33	18
穴壁 土坑1	1	Ia1-2	瓦	埋設	瓦	24.7 (R)		1.9		穴壁土坑1。面材内に「素」彫刻。V面。	炭粉。炭。面材内に「素」彫刻。V面。	1/2	昭和	33	18

表4 木製品観察表

(断面分類は、本調査2004を参照)

調査 番号	遺構・土層 グリッド	種類	部材	断面 長さ	高さ (cm)	厚さ (cm)	時期	平 法	遺存	特徴	写真 位置	埋没 状態	
246	土坑246-3層	Ia1-5	木製品	角柱	4.2	2.4	1.1	近世	板打、065型式。表面右半部。 [?] 「[]」-「[]」(端かけ)。「[]」(底面文字)。「[]」 [?]	光沢	-	34	21
247	土坑246-2層	Ia1-4	木製品	角柱	口径 (R)	高さ (R)	厚さ (R)	近世	板打痕跡。外表面。内面中央。外表面板・金(釘 跡?)	口縁欠損	-	34	10
248	土坑246-2層	Ia1-5	木製品	円形蓋板	26.2	(14.0)	1.2	近世	板打。表面中央。 口縁・口角部 1 エッジ部はシボタ	1/2	-	34	10
249	土坑246-2層	Ia1-5	木製品	角筒	口径 12.0	底面 4.8 高さ 6.2	0.7	近世	内外表面。板打。	3/4	-	34	19
250	土坑246-2層	Ia1-5	木製品	蓋板	-	底面 4.7 高さ (R)	0.7	近世	板打。板打。内外表面。外縁「三」字溝。対面かつ。	口縁部 形状欠損	-	34	19
251	土坑246-2層	Ia1-4	木製品	蓋板	-	高さ 5.4 底面 (R)	0.7	近世	内外表面。外表面文字溝。	口縁部欠損	-	34	19
252	土坑246-2層	Ia1-4	木製品	托(筒付)	-	板打 5.0 高さ 2.2	0.7	近世	底面。一断面溝?	ほぼ完好	-	34	19
253	土坑246-2層	Ia1-4	木製品	托	21.1	13.9	3.8	近世	底面・側面。板打。底面。	完好	-	34	21
254	土坑246-2層	Ia1-4	木製品	円形蓋板	23.4	23.3	1.1	近世	板打。底面上部に径2.5cmの孔あり(透孔か?)。 板打痕跡。 (通)「 」/分面に溝部」	完好	-	34	19
255	土坑246-2層	Ia1-5	木製品	棒	4.2	3.8	3.7	近世	芯部。上面板打。「」(穴開不継)	光沢	-	34	20
256	土坑246-2層	Ia1-5	木製品	蓋板	3.3	(19.1)	0.3	近世	透孔部。表面板打。 透孔部。板打。底面。透孔部。透孔部(透孔部)の透孔	-	-	34	20
257	土坑246-2層	Ia1-4	木製品	蓋板	(14.1)	26.1	1.8	近世	透孔部。表面板打。 透孔部。表面板打。透孔部。透孔部(透孔部)の透孔	-	-	34	20
258	土坑246-2層	Ia1-5	木製品	蓋板	9.5	9.8	1.3	近世	板打。061型式。表面板打。透孔部	表面欠損	-	34	20
259	土坑246-2層	Ia1-5	木製品	名札	5.0	5.5	0.6	近世	板打。表面板打。「[]」-「[]」	光沢	-	34	19
260	土坑246-2層	Ia1-5	木製品	名札	5.5	5.5	0.6	近世	板打。表面板打。「[]」-「[]」	光沢	-	34	20
261	土坑246-2層	Ia1-5	木製品	名札	3.4	5.3	0.6	近世	板打。表面板打。「[]」-「[]」	光沢	-	34	20
262	土坑246-2層	Ia1-4	木製品	筒	10.8	4.3	0.8	近世	透孔部。01型式。表面板打。「表面板打」 透孔部。透孔				

図番	遺構・土層	グリッド	電機	材料	長さ	幅	厚さ	時期	手	法	電灯	暖房	採暖	採暖
266	土坑24e-2層	Ia5-4	木製品	木簡	16.9	3.2	0.7	近世	板は、051型式。表裏磨光。 「新井田村寺蔵」。「十一月廿一日」		完形	-	36	21
267	土坑24e-2層	Ia5-5	木製品	木簡	(16.9)	3.1	0.5	近世	板は、011型式。表裏磨光。 「新井田村寺蔵」。「十一月廿一日」		下段欠損	-	36	21
268	土坑24e-2層	Ia5-5	木製品	木簡	15.9	3.5	1.0	近世	板は、011型式。表裏磨光。 「西ノ郷」		ほぼ完形	-	36	22
269	土坑24e-2層	Ia5-4	木製品	木簡	17.1	3.2	0.6	近世	板は、051型式。表裏磨光。 「西ノ郷」。		殆ど	-	36	22
270	土坑24e-2層	Ia5-5	木製品	単葉板	13.0	3.4	0.6	近世	板は、011型式。表裏磨光。 「西ノ郷」。		-	-	37	22
271	土坑24e-2層	Ia5-5	木製品	単葉板	13.0	3.7	0.5	近世	板は、011型式。表裏磨光。 「西ノ郷」。		-	-	37	22
272	土坑24e-2層	Ia5-4	木製品	単葉板	(16.9)	(3.2)	(0.6)	近世	板は、051型式。表裏磨光。 「西ノ郷」。		-	-	37	22
273	土坑24e-2層	Ia5-4	木製品	単葉板	(16.9)	(3.2)	0.7	近世	板は、051型式。表裏磨光。 「西ノ郷」。		-	-	37	22
274	土坑24e-2層	Ia5-5	木製品	単葉板	11.2	(3.2)	0.6	近世	板は、051型式。表裏磨光。 「西ノ郷」。		-	-	37	22
275	土坑24e-2層	Ia5-4	木製品	単葉板	20.8	8.8	3.0	近世	板は、051型式。表裏磨光。 「西ノ郷」。		光面	スギ	37	22
276	土坑24e-2層	Ia5-5	木製品	単葉板	20.3	8.8	3.0	近世	板は、051型式。表裏磨光。 「西ノ郷」。		光面	スギ	37	22
277	土坑24e-2層	Ia5-5	木製品	単葉板	25.1	9.1	(3.0)	近世	板は、051型式。表裏磨光。 「西ノ郷」。		光面	スギ	37	22
278	土坑24e-2層	Ia5-6	木製品	単葉板	25.1	9.1	3.0	近世	板は、051型式。表裏磨光。 「西ノ郷」。		光面	スギ	37	22
279	土坑24e-2層	Ia5-4	木製品	単葉板	22.2	10.4	6.7	近世	板は、051型式。表裏磨光。 「西ノ郷」。		光面	スギ	37	22
280	土坑24e-2層	Ia5-4	木製品	単葉板	22.4	11.6	5.2	近世	板は、051型式。表裏磨光。 「西ノ郷」。		光面	スギ	37	22
281	土坑24e-2層	Ia5-6	木製品	単葉板	20.7	9.1	4.2	近世	板は、051型式。表裏磨光。 「西ノ郷」。		光面	スギ	37	22
282	土坑24e-2層	Ia5-4	木製品	単葉板	23.7	10.4	(3.0)	近世	板は、051型式。表裏磨光。 「西ノ郷」。		光面	スギ	37	22
283	土坑24e-2層	Ia5-4	木製品	単葉板	20.7	8.6	(3.0)	近世	板は、051型式。表裏磨光。 「西ノ郷」。		光面	スギ	37	22
284	土坑24e-2層	Ia5-4	木製品	単葉板	23.4	9.9	(3.7)	近世	板は、051型式。表裏磨光。 「西ノ郷」。		光面	スギ	37	22
285	土坑24e-2層	Ia5-1	木製品	単葉板	20.0	11.4	6.1	近世	板は、051型式。表裏磨光。 「西ノ郷」。		光面	スギ	37	22
286	土坑24e-2層	Ia5-4	木製品	単葉板	22.6	11.0	(4.0)	近世	板は、051型式。表裏磨光。 「西ノ郷」。		光面	スギ	37	22
287	土坑24e-2層	Ia5-5	木製品	単葉板	23.0	8.9	(2.0)	近世	板は、051型式。表裏磨光。 「西ノ郷」。		光面	スギ	37	22
288	土坑24e-2層	Ia5-5	木製品	単葉板	18.6	5.1	4.4	近世	板は、051型式。表裏磨光。 「西ノ郷」。		光面	スギ	37	22
289	土坑24e-2層	Ia5-4	木製品	単葉板	17.6	3.9	2.6	近世	板は、051型式。表裏磨光。 「西ノ郷」。		光面	スギ	37	22
290	土坑24e-2層	Ia5-5	木製品	単葉板	23.7	13.3	13.6	近世	板は、051型式。表裏磨光。 「西ノ郷」。		光面	スギ	37	22
291	土坑24e-2層	Ia5-5	木製品	単葉板	20.0	3.6	2.2	近世	板は、051型式。表裏磨光。 「西ノ郷」。		光面	スギ	37	22
292	土坑24e-2層	Ia5-5	木製品	単葉板	3.9	(7.7)	1.1	近世	板は、051型式。表裏磨光。 「西ノ郷」。		光面	スギ	37	22
293	土坑24e-2層	Ia5-5	木製品	単葉板	(9.0)	5.3	1.1	近世	板は、051型式。表裏磨光。 「西ノ郷」。		光面	スギ	37	22
294	土坑24e-2層	Ia5-2	木製品	単葉板	26.1	(6.6)	0.4	近世	板は、051型式。表裏磨光。 「西ノ郷」。		光面	スギ	37	22
295	土坑24e-2層	Ia5-1	木製品	単葉板	(10.2)	(3.4)	0.7	近世	板は、051型式。表裏磨光。 「西ノ郷」。		光面	スギ	37	22
296	土坑24e-2層	Ia5-1	木製品	単葉板	22.5	22.2	1.2	近世	板は、051型式。表裏磨光。 「西ノ郷」。		光面	スギ	37	22
297	土坑24e-2層	Ia5-3	木製品	単葉板	11.7	6.0	1.2	近世	板は、051型式。表裏磨光。 「西ノ郷」。		光面	スギ	37	22
298	土坑24e-2層	Ia5-1	木製品	単葉板	22.8	(11.0)	0.8	近世	板は、051型式。表裏磨光。 「西ノ郷」。		光面	スギ	37	22
299	土坑24e-2層	Ia5-2	木製品	単葉板	16.7	6.0	0.3	近世	板は、051型式。表裏磨光。 「西ノ郷」。		光面	スギ	37	22
300	土坑24e-2層	Ia5-3	木製品	単葉板	22.4	7.9	4.8	近世	板は、051型式。表裏磨光。 「西ノ郷」。		光面	スギ	37	22
301	土坑24e-2層	Ia5-3	木製品	単葉板	26.6	(10.0)	1.3	近世	板は、051型式。表裏磨光。 「西ノ郷」。		光面	スギ	37	22
302	土坑24e-2層	Ia5-4	木製品	単葉板	70.3	3.7	1.9	近世	板は、051型式。表裏磨光。 「西ノ郷」。		光面	スギ	37	22
303	土坑24e-2層	Ia5-1	木製品	単葉板	10.7	2.9	3.5	近世	板は、051型式。表裏磨光。 「西ノ郷」。		光面	スギ	37	22
304	土坑24e-2層	Ia5-1	木製品	単葉板	7.9	7.2	1.0	近世	板は、051型式。表裏磨光。 「西ノ郷」。		光面	スギ	37	22
305	土坑24e-2層	Ia5-1	木製品	単葉板	14.6	(11.1)	0.7	近世	板は、051型式。表裏磨光。 「西ノ郷」。		光面	スギ	37	22
306	土坑24e-2層	Ia5-4	木製品	単葉板	9.5	9.6	1.6	近世	板は、051型式。表裏磨光。 「西ノ郷」。		光面	スギ	37	22
307	土坑24e-2層	Ia5-1	木製品	単葉板	22.7	11.5	9.0	近世	板は、051型式。表裏磨光。 「西ノ郷」。		光面	スギ	37	22
308	土坑24e-2層	Ia5-1	木製品	単葉板	22.4	8.6	9.3	近世	板は、051型式。表裏磨光。 「西ノ郷」。		光面	スギ	37	22
309	土坑24e-2層	Ia5-1	木製品	単葉板	23.5	13.8	8.4	近世	板は、051型式。表裏磨光。 「西ノ郷」。		光面	スギ	37	22
310	土坑24e-2層	Ia5-1	木製品	単葉板	(26.0)	6.7	6.2	近世	板は、051型式。表裏磨光。 「西ノ郷」。		光面	スギ	37	22
311	土坑24e-2層	Ia5-1	木製品	単葉板	(26.1)	7.3	8.5	近世	板は、051型式。表裏磨光。 「西ノ郷」。		光面	スギ	37	22
312	土坑24e-2層	Ia5-5	木製品	単葉板	(24.0)	3.2	6.4	近世	板は、051型式。表裏磨光。 「西ノ郷」。		光面	スギ	37	22

7. 新発田城跡21地点出土人骨の人類学的調査報告

日本歯科大学新潟生命歯学部

解剖学第一講座 奈良貴史

a. はじめに

2012年に実施した新発田市新発田城跡21地点遺跡の発掘調査において、中世と思われる土坑42より人骨が検出されたが、これはその人類学的調査報告である。

b. 出土状態

人骨は長さ66cm、短径55cm、深さ11cmほどの楕円形の土坑から出土した。出土時人骨はほとんどのものが白色か灰白色を呈し、輪状に走る亀裂が見られたことから、被熱したものと思われた。人骨は、破片化が著しく、また一部溶解して癒合しているものがあり、部位の同定が困難なものも多いが、頭部、四肢骨片が確認できた。骨は土坑の中心部に集中して出土しており、解剖学的位置関係を保っている部位は認められなかった。また、骨が規則的に配列された状況も確認されなかった。

c. 遺存状態

検出された焼骨は、ほとんどが灰白色から白色の色調を呈している。焼成による骨の色調変化は焼成温度と焼成時間に関係しており、白色の色調は800℃以上の高い温度で長時間焼成されたことを示している(Shipman et al., 1984; Nicholson, 1993)。一部の四肢長骨片に輪状に走る亀裂がみられる(図版27-4)。このような四肢長骨の亀裂は、骨が軟部組織に覆われた状態で焼かれた際に生じることが指摘されている(池田1981)。したがって、出土した焼骨はまだ軟部組織が付着しているときに、高温で長時間焼かれたことが想定されよう。

肉眼観察でヒト以外の動物を積極的に想起させるものは存在せず、同定できた骨は全てヒトである。破片化が著しく、頭骨もしくは四肢骨レベルでは分類できるが、同定できた部位は少なく、右側頭骨錐体部、尺骨骨幹部、右膝蓋骨上半部、大腿骨骨幹部等である。同定できた部位があまりにも少ないので個体識別の意義は大きいとは言えないものの、重複する部位が見当たらないことにより、最小個体数は1と算定される。

出土した骨の総重量は22.8gである。骨は十分に乾燥させて計測したが、海面質や髄腔、および溶解した骨の間の土を除去しきれていない箇所も存在するので、実際の骨重量はこの値よりも下回る。ヒト一個体分の焼骨重量は、成人男性の場合約2kg、成人女性では約1.3kgとされるが(山口 1983)、出土した焼骨が、仮に1個体で男性ならば11%程度、女性ならば17%弱しか遺存していないことになる。成人の1個体分には程遠い。頭骨片の重量は44gで、出土骨総重量に対する割合は19%である。成人の場合、骨総重量に対する頭骨の重量は約20%であるので、頭骨の比率は正常に近い。

d. 年齢

観察できる頭骨片の癒合において、内板・外板ともいずれも癒合が開始していないことから(図版27-1)、若い個体だと思われる。さらに遺存する四肢骨の骨幹部が成人並であることから、思春期から壮年期前半(20~30歳)程度と推察される。

e. 性別

性別を推定するのに有効な形態学的特徴を有する寛骨は破損しており、また、乳様突起などの頭骨で性差が顕著な部位も検出されていない。したがって形態学的特徴によって性別を推定することは困難である。

f. 形態学的特徴・その他

変形・破損が著しいために、形態学的特徴が判明している部位は少なく、特記事項は以下の点のみである。大腿骨後面の粗線が内・外側唇とも発達しているが、柱状大腿骨のように後方に張り出さない（図版27-5）。下肢の筋力はある程度強かったものと思われる。

g. 病変

大腿骨骨幹部片に多孔性骨増殖が認められる（図版27-6）。この病変は、骨髄炎によるものと推察されるが、原因となる細菌の種類や起因物質を特定することは困難である。骨髄炎と思われる骨病変は近世人骨の12.3%に出現するとの報告がある（鈴木1998）。死因との因果関係は不明である。

h. 考察

遺跡から出土した焼骨の人類学的検討から、当時の葬送儀礼に関して若干の考察を加えたい。

本人骨が1個体だと仮定するならば、成人並みの体格なので、人骨が出土した土坑を用いて火葬するには、土坑の大きさが小さすぎると思われる。焼骨の総重量は228gであり、成人男性の本来あるべき骨量の10%程度しか遺存していることなので、他の場所で火葬されたものが本土坑に埋葬された可能性が高い。その際に、骨の一部が拾骨された可能性が想定できよう。拾骨に際して一部の骨を選択的に扱う考古学的事例として、第2頸椎の軸椎を喉仏として特別に取り扱ったと解釈されている例が山口県吉母浜遺跡中世墓（田中1985）、第2頸椎の軸椎と歯を意識的に取り分けた東京都増上寺近世墓（奈良1988）、歯を選択的に拾骨した可能性が想定される宮城県松本遺跡中世墓（高橋・佐々木1986）などの報告例がある。また、文献例でも、江戸時代江戸の上落合村法界寺における骨上げの際、喉仏とされる軸椎と歯を骨嚢器に大切に納め、残りはすべてを拾い尽くさない記録が知られている（西木 1999）。さらに民俗例では、拾骨の習俗には東北日本を中心とする火葬された焼骨を骨灰まですべて骨壺に納める「全体拾骨」と西南地方を中心とする喉仏としての軸椎と頭骨の一部のみ拾骨する「一部拾骨」という大きく二つの地域差の存在が報告されている（日本葬送文化学会2007）。

本遺跡においては選択的に拾骨されたと断定はできないが、若い個体にもかかわらず、歯根の破片が確認されないことや頭骨と四肢骨の比率が生体とほぼ同じ点などから、拾骨に際して、何らかの選択的な拾骨が行われたのかもしれない。

1. まとめ

新発田城遺跡から出土した人骨の人類学的検討結果をまとめると以下である。

- ①確認できる骨は全てヒトのものである。
- ②総重量228gで、成人男性の焼骨総重量の10%程度である。
- ③1個体だとすると年齢は思秋期から壮年期である。性別は不明。
- ④骨の色調や焼成状況から焼成温度は800℃以上の高温と推定される。
- ⑤大腿骨片に骨髄炎とみられる病変が認められるが、死因との因果関係は不明である。

引用参考文献

- 馬場悠男・茂原信生・阿部修二・江藤盛治 1986 根古屋遺跡出土の人骨・動物。霊山根古屋遺跡の研究，霊山根古屋遺跡調査団，pp. 93-113.
- 平野賢二 1935 歯牙の熱処理に対する研究（第一編）人類歯牙の熱処理について，口腔病学会雑誌，9:375-393.
- 池田次郎 1981 出土火葬骨について，太安萬侶墓，奈良県立橿原考古学研究所編，pp.79-88.
- Mays, S. 1998 Cremated bone. *The Archaeology of Human Bones*, Routledge, London, pp.207-224.
- Nicholson, R. A. 1993 A morphological investigation of burnt animal bone and an evaluation of its utility in archaeology. *J. Archaeol. Sci.*, 20: 411-428.
- 西木浩一 1999 江戸時代の葬送墓制 都市紀要37 東京都 p. 203.
- 日本葬送文化学会 2007 火葬後拾骨の東と西 火葬研究叢書②日本経済評論社.
- Shipman, P., Foster, G. and Schoeninger, M. 1984 Burnt bones and teeth: an experimental study of color, morphology, crystal structure and shrinkage. *J. Archaeol. Sci.*, 11: 307-325.
- 高橋理・佐々木務 1986 柳生・松木遺跡出土動物遺存体・人骨。柳生，仙台市教育委員会，pp. 31-100.
- 田中良之 1985 中世の遺構，吉母浜遺跡，下関市教育委員会，pp. 31-100.
- 鈴木隆雄 1998 骨から見た日本人 古病理学が語る歴史 講談社選書メチエ142 講談社.
- 山口 敏 1983 出土人骨についての分析，竜ヶ池観音堂塚群発掘調査報告書Ⅱ，小千谷市教育委員会，pp.41-43.

8. 新発田城跡第21地点出土土製品の種類同定

黒沼保子 (パレオ・ラボ)

a. はじめに

新発田市が平成23年度に実施した新発田城跡第21地点の発掘調査で、江戸時代末期の土坑・堀から出土した土製品の樹種選択および木材利用傾向を判断する目安を得る目的で、樹種同定を行った。

b. 試料と方法

試料は、陰卯下駄8点と連重下駄2点、痘植1点、櫛1点、の計13試料である。陰卯下駄の分析番号2, 4, 6, 9, 11, 12, 13は台と歯、分析番号3では木栓と鼻緒の樹種同定も行った。なお、鼻緒は直径1mm程度の茶色い繊維状の素材を束ねたものであり、この繊維の1本を抽出して観察を行った。

これらの試料から、剃刀を用いて3断面(横断面・接線断面・放射断面)の切片を採取し、ガムクロラールで封入してプレパラートを作製した。これを光学顕微鏡で観察・同定し、写真撮影を行った。

c. 結果

針葉樹はスギが1分類群、広葉樹はケヤキ、モクレン属、ナシ亜科、カエデ属、ケンボナシ属、キリの6分類群、その他に単子葉類であるシュロの繊維が確認された。

器種別では、櫛はナシ亜科、痘植はカエデ属、下駄はスギ、ケヤキ、モクレン属、ケンボナシ属、キリ、シュロ(繊維)であった。器種別の樹種構成を表5、結果の一覧を表6に示す。

表5 器種別の樹種構成

分類群	痘植	連重下駄	陰卯下駄				櫛	計
			台	歯	鼻緒	木栓		
スギ		1						1
ケヤキ				3				3
モクレン属		1	4	3				8
ナシ亜科							1	1
カエデ属	1							1
ケンボナシ属			1			1		2
キリ			3					3
シュロ(繊維)					1			1
計	1	2	8	6	1	1	1	20

以下に、同定根拠となった木材組織の特徴を示し、光学顕微鏡写真を図版に示す。

(1) スギ *Cryptomeria japonica* (L.f.) D.Don スギ科 図版28 1a-1c(分析番号1)

仮道管、放射組織、樹脂細胞からなる針葉樹である。早材から晩材への移行はやや急である。樹脂細胞は主に晩材部に散在する。分界壁孔は大型のスギ型で、1分野に通常2個並ぶ。

スギは暖帯・温帯下部に生育する常緑高木である。材は比較的軟で切削加工は容易、割裂性は大きい。

(2) ケヤキ *Zelkova serrata* (Thunb.) Makino ニレ科 図版28 2a-2c(No.2-2), 3a-3c(分析番号4-2)

大型の道管が年輪のはじめに1列に並び、晩材部では小道管が集団をなして接線状から斜線状に配列する環孔材である。道管の穿孔は単一で、小道管にはらせん肥厚がみられる。放射組織は3~5列幅程度の異性で、上下端の細胞に大きな結晶をもつ。

ケヤキは暖帯下部に分布する落葉高木で、肥沃地や溪畔によく生育する。材は重硬だが、加工はそれほど困難ではなく、保存性が高い。

(3) モクレン属 *Magnolia* モクレン科 図版28 4a-4c(分析番号10), 5a-5c(分析番号11-2)

小型の道管が、単独もしくは放射方向に3~4個複合して均等に分布する散孔材である。木繊維の壁は薄い。道

管相互壁孔は対列～階段状、道管の穿孔は単一である。放射組織は1～2列幅で、上下端の1～2細胞が直立もしくは方形細胞である異性である。

モクレン属は温帯から暖帯上部に分布する常緑または落葉の低木・高木で、タイサンボク、ホオノキ、モクレン、コブシなどがある。材は、一般にやや軽軟または中庸程度、緻密で狂いが少ない。

(4) ナシ亜科 Subfam. Maloideae バラ科 図版28・29 6a-6c(分析番号8)

小径の道管が、ほぼ単独で均等に分布する散孔材である。軸方向柔組織は短線状となる。道管の穿孔は単一である。軸方向柔組織および放射組織中に大型の結晶が連なる。放射組織は異性で、1～3列幅となる。

ナシ亜科にはサンザシ属、ビワ属、カナメモチ属、ナナカマド属、リンゴ属など12の属が存在する。材は全般に重硬で韌性がある。

(5) カエデ属 Acer カエデ科 図版29 7a-7c(分析番号5)

径が中型の道管が、単独もしくは放射方向に数個複合して分布する散孔材である。横断面において、木部繊維の壁厚の違いによる雲紋状の模様が見られる。道管の穿孔は単一で、道管壁にはらせん肥厚が見られる。放射組織はほぼ同性で、1～5列幅である。

カエデ属は主に温帯に分布する落葉高木で、オオモミジ、ハウチワカエデ、イタヤカエデなど26種ある。材は緻密で韌性がある。

(6) ケンボナシ属 Hovenia クロウメモドキ科 図版29 8a-8c(分析番号9-1)

大型の道管が年輪のはじめに配列し、晩材部では厚壁で小型の道管が単独もしくは2～3複合して散在する環孔材である。道管の穿孔は単一である。放射組織は1～3列幅で、異性である。

ケンボナシ属は温帯から暖帯に分布する落葉高木で、ケンボナシとケンボナシの2種がある。材は、重さ・堅さともに中庸、切削加工は容易で狂いや割れは少ない。

(7) キリ Paulownia tomentosa (Thunb.) Steud. ゴマノハグサ科 図版29 9a-9c(分析番号3-1), 10a-10c(分析番号4-1)

大型の道管が年輪のはじめに並び、晩材部では徐々に径を減じる半環孔材である。軸方向柔組織は翼状となる。木部繊維の壁厚は極めて薄い。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性で、2～4列幅程度である。

キリは、温帯に分布する落葉高木である。材は軽軟で加工容易であるが、耐湿性や耐久性に富む。

(8) シュロ (繊維) Trachycarpus fortunei (Hook.) H.Wendl. 図版29 11a(分析番号3-2), 12a(現生)

直径1mm程度の繊維の束である。現生のシュロから葉鞘の繊維部を採取し横断面を比較したところ、形状が類似していたため、シュロの葉鞘の繊維部と判断した。

シュロは古い葉鞘の繊維が残り、幹を皮状に取り巻いている。この繊維は強靱で、耐水性がある。

d. 考察

産地はカエデ属で、木取りは芯持丸木であった。編み具の鑑には、比較的多用な樹種の利用が全国的に確認されており、アカガシ亜属やツバキ属など重厚な樹種が比較的多くみられるが、ヒノキやスギなどの針葉樹の利用もある(伊東・山田編, 2012)。本試料で確認されたカエデ属は、里山や山野に広く生育し、材も比較的重硬で韌性のある有用材であるため、身近な産材が利用されたと考えられる。

櫛はナシ亜科で、木取りは板目であった。櫛にはイスノキやツゲ、ツバキ属など堅硬な材が用いられる(伊東・山田編, 2012)。ナシ亜科には重硬で強靱、および緻密な材を有する樹木が多いため、櫛の材としても有用と推測される。

下駄は、連歯下駄がスギとモクレン属であった。陰卵下駄のうち台と歯が揃っている試料では、台と歯に同じ樹種が使用されている下駄と、異なる樹種が使用されている下駄がみられた。台と歯が同じ樹種であったのは、分析番号6と12(13)で、ともにモクレン属であった。台と歯で異なる樹種であった下駄では、分析番号2、4は台がキリで歯がケヤキ、分析番号9は台がケンボナシ属で歯がケヤキであった。木栓はケンボナシ属の使用が確認された。連歯下駄や陰卵下駄に使用されていたスギやキリ、モクレン属は、軽軟で切削加工容易な材である。陰卵下駄の台と木栓に利用されていたケンボナシ属は、重さ・堅さが中庸、切削加工が容易で、狂いや割れは少ない。また、歯に利用されていたケヤキは、重硬で靱性のある材である。

陰卵下駄のように差歯の下駄は、木目の美麗な材を台に使用し、破損しにくい広葉樹を歯に使用していたとされる(秋田, 2002)。本遺跡でも、一部の歯には重厚なケヤキが用いられており、一般的な下駄材の木材利用傾向と一致している。

また、No.3の下駄の鼻緒にはシュロの繊維を束ねたものが利用されていた。シュロの幹の周囲を取り巻いている古い葉鞘の繊維は、強靱で耐水性があるため、箆や束子、縄などに利用される(佐竹ほか編, 1989)。下駄の鼻緒の分析例は確認されていないが、江戸時代末期の試料であるため、民具などと比較検討を行えば、利用傾向がわかる可能性がある。

引用参考文献

- 秋田裕毅(2002) ものと人間の文化史104下駄, 295p, 法政大学出版局。
伊東隆夫・山田昌久編(2012) 木の考古学—出土木製品用材データベース—, 449p, 海青社。
佐竹義輔・原寛・亘理俊次・富成忠夫編(1989) 日本の野生植物, 木本Ⅱ, 288p, 平凡社。

表6 樹種同定結果一覧

掲載番号	分析番号	グリッド	遺構	土層	器種		備考	樹種	木取り
275	1	1e5-4	土坑24c	2層	下駄		連歯	スギ	板目
286	2-1	1e5-4	土坑24c	2層	下駄	台	陰卵	キリ	板目
	2-2		土坑24c	2層		歯	陰卵	ケヤキ	板目
	3-1		土坑24c	2層		台	陰卵 鼻緒付(棕櫚)	キリ	板目
282	3-2	1e5-4	土坑24c	2層	下駄	鼻緒	陰卵	シュロ(繊維)	-
	3-3		土坑24c	2層		木栓	陰卵	ケンボナシ属	削出
	4-1		1e5-4	土坑24c		2層	下駄	台	陰卵
4-2	土坑24c	2層		歯	陰卵	ケヤキ		板目	
288	5	1e5-5	土坑24c	2層	竈(こもつち)		カエデ属	芯持丸木	
281	6-1	1e5-5	土坑24c	2層	下駄	台	陰卵	モクレン属	板目
	6-2		土坑24c	2層		歯	陰卵	モクレン属	板目
283	7	1e5-4	土坑24c	2層	下駄	台	陰卵	モクレン属	追板目
292	8	Hc 4-5	土坑28a	-	櫛		横櫛	ナシ亜科	板目
300	9-1	1e1 3	土坑39	1層	下駄	台	陰卵	ケンボナシ属	板目
	9-2		土坑39	1層		歯	陰卵	ケヤキ	板目
309	10	Fe3-5	堀1	5層	下駄		連歯	モクレン属	板目
308	11-1	Fe2-1	堀1	5層	下駄	台	陰卵	モクレン属	板目
	11-2		堀1	5層		歯	陰卵	モクレン属	板目
307	12	Fe2-1	堀1	5層	下駄	台	陰卵	モクレン属	板目(芯持)
	13	Fe2-1	堀1	5層	下駄	歯	歯部 180と組み合わせ	モクレン属	板目

Ⅲ まとめ

1. 発掘調査の成果

第21地点は、古代～近世の遺物包含層がほとんど残っておらず、近代以降の整地層直下にあたる地山のシルト・砂層上面で複数にわたる時代の遺構を検出した。出土遺物や切り合いから個々の遺構の年代を判断すると、8世紀末～9世紀中頃、15世紀～16世紀初頃、17世紀初頃～19世紀中頃の遺構を検出した。一方、近世から近代にかけて作成された絵図などから調査地点は近世新発田城の二ノ丸堀と土塁、および重臣屋敷地であることが判明している。これらの古記録による土地履歴と発掘調査の成果を照合し、本報告のまとめとしたい。

a. 堀について

調査区②で検出した堀1は、絵図で想定した外堀の位置とほぼ一致した。調査区における堀は幅22m、深さ1.7mであった。なお、現地表から確認面までは60～70cm程度の表土・整地層が堆積しているため、正保絵図の記述による深さ3m（一丈）との差は60cm程度。絵図が2割増であり、幅は絵図の数値よりも3割程度広い。堀の埋没状況・出土遺物から判断して、1～4層は廃城後堀を埋める際に投入された埋土で、明治16年前後の軍用地へ移管するときの土地改変に伴うとみられる。また、西岸・東岸ともに木杭と横木による護岸施設を検出した。堀の斜面はそれぞれの木組の周辺で平坦面が作出され、西岸北寄りの斜面下で溝状の窪地、東岸の斜面下で溝6が通っている。このような護岸施設は今回の調査地点から100m北方の第19地点で検出した近世末期の護岸施設と対応し、同地点では堀斜面から底面の様相（伊藤2008）も類似する。また、第8地点（鶴巻ほか1997）でも時期は異なるが横木・杭による護岸施設を検出している。

堀1の東岸は溝1の埋土中に掘り込まれ、両者の上端ラインは約1mの間隔で輪線がほぼ平行する。堀1は上層で近世末期、下層斜面では18世紀後半の遺物が出土しているのに対し、溝1はほとんどが9世紀前後と14～15世紀代の遺物が出土し、わずかに16世紀末頃から17世紀初頃の越中瀬戸、時期不明の近世陶器小片が含まれている。絵図面等の記録から堀1は築城当初から存在していたとみられる。輪線が平行することを考慮すれば、両者は同じ規格のもとに作られた可能性が高く、溝1についても築城当初、堀・土塁を築く際に構築された区画溝もしくは堀と土塁の中間斜面に構築された「犬走り」の役割を担っていた可能性があらう。底面の凹凸は、軟弱な地盤でも作業道・足場として人の往来があったことを示し、堀と土塁の造成が終わった後、土砂の崩落と堀の改修が繰り返されることで溝1が埋まり、土塁の斜面に吸収されたものとみられる。

b. 土塁について

絵図によれば、二ノ丸堀の内側に土塁が築かれており、明治7年測量図にも描かれているため、近代初頭まで存続していたとみられる。土塁は調査区②の堀1東方にあったと推定され、確認調査の所見から、調査区②の南側で堀は東へ折れるため、調査区②の南辺寄りの堀1東方付近に土塁の出隅を含むことにならう。また、享保絵図には付近の土塁上にあった「二重櫓瓦屋根三間半梁桁行四間半高さ礎より棟上迄老丈七尺五寸」の建物および左右の堀九間半が焼失したと記載されている。四間半は約8.1mに相当するため出隅付近の土塁は、上幅が8m以上、基底部の幅はそれに盛土の斜面相当分を加えた値となる。なお、土塁上に堀が通っていた部分は、横付近よ

りは幅が狭くなるとみられる。調査区内で土塁盛土の痕跡はないものの、堀1・溝1の東側に隣接する溝2a・2b・3・4・土坑35・43・45・46a・46bは古代・中世に比定され、近世の土塁盛土によって覆われていたために、廃城までは擾乱を受けにくい環境だったことが想定できよう。一方、これらの遺構の東側には18世紀代の遺物が出土した土坑32、17世紀代の遺物が出土した土坑39（下層）があり、これらについては遺物の所属時期が土塁の存続時期と重なることになる。調査区②の南辺寄りにあたる土坑39は出隅に建てられた櫓の位置にあたる可能性が高く、最初に櫓が再建された元禄2（1689）年、または二度目に再建された延享元（1744）年の普請との関連を考慮する必要がある。土坑32付近に土塁がおよんでいたか否かは不明である。

なお、溝2a・2bの東方で検出し、19世紀代の遺物が多く出土した土坑28a・28b・34・36・37・39（上層）・40は、近世末期の土塁が残っていた時期にそれを崩して掘り込まれたか、廃城後、土塁の盛土が削平された際に、構築されたと思われる。このように、古記録の数値と遺構の範囲をもとに調査区②で土塁の範囲を検討すると、土塁の西端は堀1の上面を目安にできるが、土塁の東端を示唆する目安は見いだせなかった。堀を検出していない調査区①についても土塁の範囲は不明である。

c. 屋敷地について

土塁の内側は二ノ丸屋敷地で、近世後半から幕末にかけて藩の家老職を務める「堀丈太夫」の屋敷地に相当する。堀氏の存在を示す遺物として、「堀」・「西堀」と墨書・焼印された陶磁器類が2点（25・138）・木製品が5点出土している（257・259～261・263a）。「堀」性を名乗る重臣は新発田藩に2家あり、二ノ丸西端に屋敷地を構える「丈太夫」家を「西堀」と呼称したのであろう。

調査区内で掘立柱建物跡・礎石建物の跡は検出されず、近世の遺構は大形の土坑が主体である。土坑の深さは50～80cm（最深130cm弱）で、湧水レベルより下に掘り込まれたものは、崩落やオーバーハングにより、本来の形状を失っているものが多い。確認面から底面までの地山が砂層の場合はすり鉢状、確認面の地山がシルト層で深部が下層の砂質土に達している場合は下部がオーバーハングし、層が崩れて段を形成するものがある。これらからは19世紀代の遺物が出土するため、近世末期から近代の軍用地に移管する際に埋められたとみられる。配置をみるとH・Iグリッドの境界付近でグリッド軸に沿って南北に並ぶ傾向があり、約10m東の調査区東壁付近でも同じ方向で並ぶ。重複している箇所もあり、切り合いが古い土坑32・23は18世紀代、土坑39の13～20層は17世紀代の遺物が出土し、構築にあたって近世末期よりも先行するものが含まれている。

調査区②の南東部で検出した土坑24b・24cはともに土坑24aの埋土中に掘り込まれ、形状や埋土の状況が特徴的である。全体の形状を把握できる土坑24cでみると、一辺3.3×2.14mの長方形で、長軸は堀・土塁と同じ南北方向を向き、深さは82cm程で底面は平坦、砂地に掘り込まれたにも関わらず壁面の立ち上がりはほぼ垂直で、埋土下層には針葉樹の葉やへぎ板などを敷き詰め、これらに混じって多量の木製品が出土した。こうした特徴から土坑24b・cはともに堅穴状遺構B類（鶴巻2001）とみられる。木製品の中には「萬延元」（1860）年の紀年銘を持つ木簡を含み、出土陶磁器類の所属時期も実年代と符合する。出土遺物に多量の木製品を含む点が、同時期の他の土坑と様相が異なる。樽蓋・箱・荷札・名札などは、ものを整理・収納する貯蔵庫的な性格を示唆すると考えられる。以上の所見から、調査範囲付近は土塁及び屋敷裏の空間で、柱穴・礎石が検出されないため、母屋などの大形建築物が配置されない場所と推定される。

d. 近世末期の出土遺物について

今回の発掘調査で19世紀代を中心とした遺物が多量に出土した。これらは近世末期から、近代にかけて新発田城の廃城から軍用地への移管という土地利用の変化に伴い、土塁を崩して堀を埋め、屋敷地を取り壊して整地

する工事に伴って、不要となった家財道具を穴・竈地に廃棄した結果とみられる。

陶磁器類でみると、磁器は肥前・瀬戸美濃が主体をなす。瀬戸美濃は小振りで口縁内面に圈線が巡る端反碗の量が卓越し、この年代が19世紀中頃に比定されるため（愛知県史編纂委員会2007）、19世紀中頃には肥前磁器よりも瀬戸美濃磁器の流通量が上回ったとみられる。なお、皿・瓶類や水滴・蓋物などは肥前が多い。また、肥前磁器の影響が指摘されている東北系の重養窯（柳田1990）の湯呑碗（73）は、そのモデルとなる肥前磁器の筒筒（169）に比べ厚みがあり、胎土は灰色がかっている（図版16）ため、肥前磁器とは区別した。

陶器類は器種が多様であり、端反碗・徳利などの京信楽系、甕・播鉢などの肥前や萩の筒など、畿内・西日本産のものがある一方で、大塚相馬の山水文土瓶・徳利といった東北産がある。102・140は鉄釉の上に白釉を流し掛ける会津本郷・埴などの手法と共通（芹沢1987）するため、このような産地不明の大形器種の中には東北南部産もしくはその影響下で生産された在地産を含むとみられる。このほか、産地不明とした播鉢・鉢・鉄釉鍋・行平鍋は、東北諸藩、関東、在地でも生産されているため、個別の産地同定は難しい。

大塚相馬は福島県浪江町を中心に窯跡が分布し、相馬焼の普及品を生産していた。文化元（1804）年に相馬藩が榎葉郡大塚村に瀬戸役所を開設し、製陶業を保護・管理していたことなど、生産・流通にあたって相馬藩の関与が指摘されている（関根1998）。一方、寛政元（1789）年、新発田藩は幕府から越後藩原郡内の領地と奥州六部の国替えを命じられ（高橋2005）、その中には相馬藩領の南に隣接する榎葉郡が含まれていた。大塚村の高瀬川を隔てた南に隣接する榎葉郡井出村は、国替えによって得られた新発田藩領（高橋2005）に含まれ、現在の旧井出村地内でも18～19世紀代に比定される大塚相馬の窯跡が確認されている（関根1998）。また、土坑22から出土した沓茶碗（51）は、相馬駒焼とみられる。相馬駒焼の窯元は現在、福島県相馬市内に残っており、奥州相馬藩御留の御用窯である田代窯一箇所でのみ生産されている。同窯の製品は一般市場には流通せず、茶陶を中心に贈答品として生産された希少品であり、こうした茶陶が出土していたことも本調査地点が重臣屋敷地たる所以となろう。奥州六部の領有は文政12（1829）年までの40年間におよび、遺物の年代とも一致するため、奥州六部の領有により新発田藩と相馬藩の交流が深まったことが希少な相馬駒焼が贈られた背景にあったのかもしれない。新発田城跡では、これまで大塚相馬とみられる土瓶が多数出土しており、上記のような状況が想定できるのならば、19世紀代を中心とするこれら陶器の流入に関し、藩の奥州領有との関連を検討する必要がある。

e. 古代・中世の遺構について

古代に比定される遺構は、調査区②のHeグリッドで土坑43・45、溝3・4、ビット28を検出した。溝5についても遺物は出土していないが、溝3と平行し規模も共通するため同時期とみられる。これらは土塁基底部に相当する位置で検出しており、盛土に保護されたため整地・攪乱を免れたのであろう。出土遺物の年代は概ね9世紀中頃が中心である。中世の遺構は調査区①で土坑1・3・9・16、井戸1を検出し、調査区②では土坑26・27・30・35・46a・46b、溝2a・2bを検出した。出土遺物は概ね15世紀代のものが多く、土坑27が15世紀末～16世紀初頭に位置付けられる。土坑35・46a・46b・溝2a・2b、付近は近世の土塁下層となる可能性が高く、ほかの遺構については土塁との位置関係は不明である。これらのうち、土坑1・16は中世の六道銭・漆器を伴う墓坑であり、近くにあるP14bには15点の念珠が埋納されていた。同時期の関連遺構とみられる。また、調査区②の土坑42は焼人骨が出土した墓坑であり、近世の土塁下と想定されるため、近世以前に比定される可能性が高い。

<引用参考文献>

- 愛知県史編さん委員会2007『愛知県史 別編窯業2 中世近世瀬戸系』愛知県史編さん委員会
- 伊藤喜代子ほか2008『新発田城跡発掘調査報告書V(第19地点)』新発田市教育委員会
- 江戸遺跡研究会編2001『図説江戸考古学研究辞典』柏書房
- 小山正忠・竹原秀雄1967『新版標準土色帖』農林水産技術会議事務局監修
- 九州近世陶磁学会編2000『九州陶磁の編年—九州近世陶磁学会10周年記念—』九州近世陶磁学会（佐賀県有田町）
- 重要文化財新発田城修理委員会1960『重要文化財新発田城二の丸隅櫓表門修理工事報告書』真陽社
- 新発田古地図等刊行会 1974『一步—間歩踏絵図』（新潟県新発田市）
- 新発田市教育委員会1998『城下町新発田市400年のあゆみ』新発田市
- 新発田市史編纂委員会1980『新発田市史』上巻 新発田市
- 新発田市史編纂委員会1981『新発田市史』下巻 新発田市
- 関根達人1998『相馬藩における近世窯業生産の展開』『東北大学埋蔵文化財調査年報10』東北大学埋蔵文化財調査研究センター
- 芹沢長介1987『東北地方の近世陶器』『東北地方の近世陶磁』東北陶磁文化館（宮城県加美町）
- 高橋礼弥1981『新発田城及び明治初年家中屋敷制図解説』『新発田城及び明治初年家中屋敷制図』昭和礼文社
- 高橋礼弥2005『新発田藩年代記』新発田藩年代記刊行会（新潟県新発田市）
- 中世土器研究会編 1995『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 田中耕作 1987『新発田城跡発掘調査報告書（I～III区）』新発田市教育委員会
- 津田恵司ほか2010『新発田城跡発掘調査報告書VII(第22地点)』新発田市教育委員会
- 鶴巻康志ほか 1997『新発田城跡発掘調査報告書II(第7～10地点)』新発田市教育委員会
- 鶴巻康志1997『北越後の年代と技術系譜』『中・近世の北陸—考古学が語る社会史—』桂書房
- 鶴巻康志2001『越後・佐渡地方の中世堅穴状遺構』『断立と堅穴 中世遺構論の課題』高志書院
- 鶴巻康志ほか 2001『新発田城跡発掘調査報告書III(第11・12地点)』新発田市教育委員会
- 鶴巻康志2004『土師器からみた中世の小城跡—新潟県北部阿賀北地方を中心に—』『中世土器の基礎研究』XVII 日本中世土器研究会（大阪府高槻市）
- 鶴巻康志ほか 2012『新発田城跡発掘調査報告書VIII(第24地点)』新発田市教育委員会
- 新潟古代土器研究会編2004『越後阿賀北地域の古代土器様相』新潟古代土器研究会（新潟県三条市）
- 横崎彰一編 1986『開館15周年記念—越前名陶展—』福井県陶芸館（福井県吉岡村）
- 畑中英二2003『信楽焼の考古学的研究』サンライズ出版
- 福井県教育委員会1983『泉道跡江・美山線改良工事に伴う発掘調査報告書』福井県教育委員会
- 藤澤良祐 1996『中世瀬戸窯の動態』『古瀬戸をめぐる中世陶器の世界—その生産と流通—』（財）瀬戸市埋蔵文化財センター
- 藤澤良祐 2004『瀬戸・美濃大窯場の再検討』『（財）瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第10報（財）瀬戸市埋蔵文化財センター（愛知県瀬戸市）
- 宮田進一1997『越中瀬戸の変遷と分布』『考古学が語る社会史 中・近世の北陸』桂書房
- 木寛孝会2012『凡例』『木寛研究』第34号 真陽社
- 柳田俊雄1990『斎藤隆興発掘調査報告書』会津若松市教育委員会
- 吉岡康博1994『中世須恵器の研究』吉川弘文館
- 四柳章幸2006『漆Ⅰ ものと人間の文化史131—I』・『漆Ⅱ ものと人間の文化史131-II』法政大学出版局
- 渡邊美穂子ほか2009『新発田城跡発掘調査報告書VI(第20地点)』新発田市教育委員会



調査区②全景



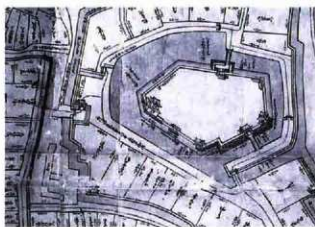
調査区②全景（滞水時）



調査区②屋敷地

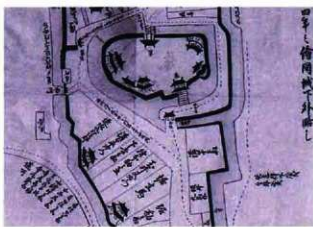


調査区①全景



正保二年絵図

二ノ丸西ノ門の南、三つある出隅のうち、最も南側に二重櫓を記載。



寛文四年絵図

正保絵図と同様の記載。屋敷地の氏名表示も一致。



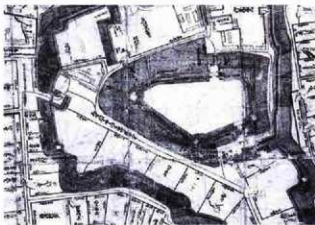
享保四年絵図

出隅が二箇所のみ。南側の出隅に焼失箇所として櫓を表示。



文化元年絵図

出隅が二箇所のみ。南側の出隅に焼失箇所として櫓を表示。



家中屋敷割図

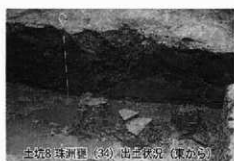
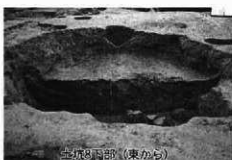
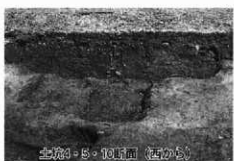
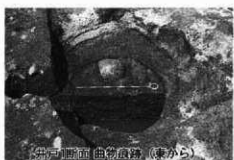
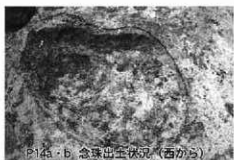
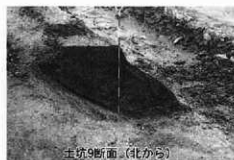
出隅が二箇所、出隅と西ノ門の間に文化元年絵図よりも離れる。門に近い出隅に櫓を表示。



明治七年測量図

出隅が2箇所、二ノ丸隅櫓、西ノ門脇櫓が家中屋敷割図と同じ位置に表示されているが、本丸の櫓は取り壊されたため描かれていない。旧軍の兵舎が表示される。

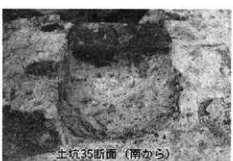
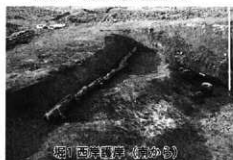
図版3 調査区①の遺構(1)



図版4 調査区①の遺構(2)



図版 5 調査区②の遺構(1)



図版6 調査区②の遺構(2)



土坑28、21断面(南から)



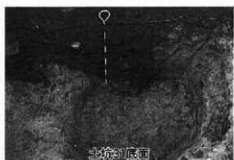
土坑28a断面(南から)



土坑28b、31断面(南から)



土坑28a全層(39) 土坑40断面(南から)



土坑31底面



土坑36、28a断面(東から)



土坑36断面(南西から)



土坑32、33、28a断面(東から)



土坑32断面(北から)



土坑34断面(南から)



土坑26断面(西から)



土坑45断面(西から)



土坑40断面(東から)



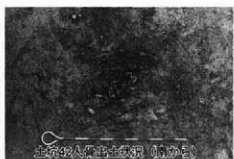
土坑40全層(西から)



土坑46断面(東から)



土坑41断面(南から)



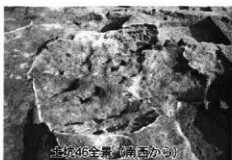
土坑42人骨出土状況(南から)



土坑43断面(西から)



溝4断面(西から)



土坑46全貌(南西から)



土坑46a断面(南から)



土坑46a断面(西から)



土坑46a断面(西から)



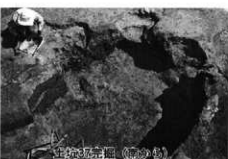
土坑45(西から)



土坑46(南東)断面(西から)



土坑44断面(西から)



土坑35全貌(南から)



土坑37断面(南東から)



土坑37断面(南西から)



土坑24断面(西から)



土坑24断面(南西から)



土坑22・23断面(西から)



土坑39断面(南から)



土坑27断面(南から)



溝3断面(北西から)



土坑5断面(南西から)

図版 8 調査区②の遺構(4)



主坑45断面(西から)



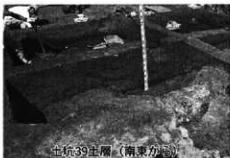
P28断面(西から)



主坑39西壁(東から)



主坑39主層(北東から)



主坑39主層(南東から)



主坑39主層(東から)



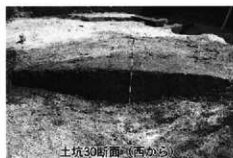
主坑39木製品(293)出土状況(東から)



主坑39木製品(293)出土状況(南東から)



主坑39断面(南から)



主坑30断面(西から)



主坑29断面(西から)



主坑24断面(東から)



主坑25底面遺物出土状況(西から)



主坑24木製品(263)出土状況(東から)



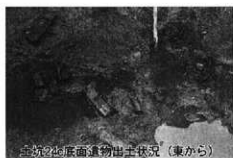
主坑24木製品(263)出土状況(南から)



主坑26木製品(263a)出土状況(東から)



主坑24木製品(263)出土状況(西から)



主坑26底面遺物出土状況(東から)

図版9 調査区②の遺構(5), 出土遺物(1)石製品・土師器ほか



土坑24c底面(北から)



土坑24c底面(南から)



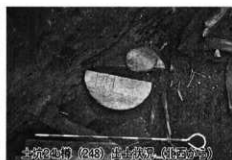
土坑24a断面(西から)



土坑24b底面(北から)



土坑24b底面(西から)



土坑24b断面(24b) 土坑状況(北から)



土坑24断面(西から)



調査区③(北から)



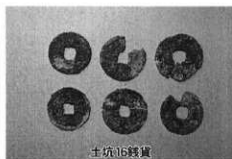
調査区③断面(東から)



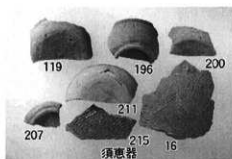
土坑1



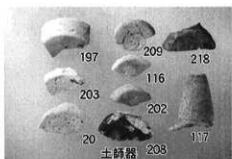
土坑16



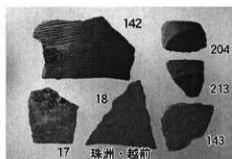
土坑16



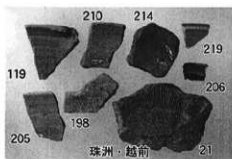
須恵器



土師器



珠洲・越前



珠洲・越前



近世磁器ほか



輪入磁器・瀬戸美濃



51上面



51側面



51下面



135



161



179



73



106



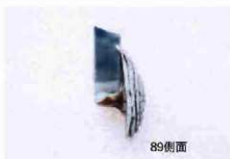
106上面



150



89上面



89側面



48



88



129



130



165



187



22



24上面



24側面



25側面



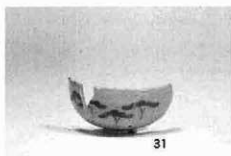
25下面



30上面



30側面



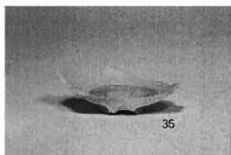
31



32



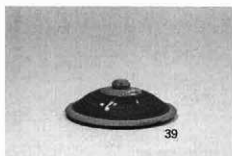
33



35



38



39



44



45



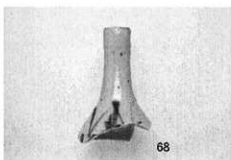
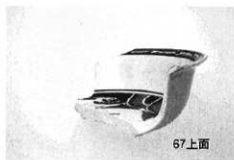
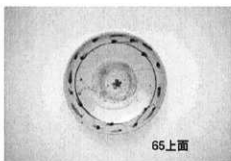
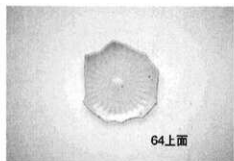
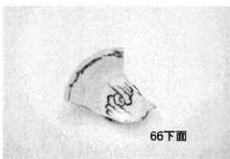
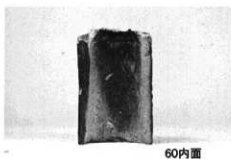
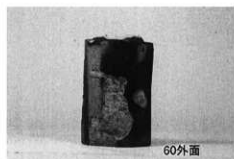
50



49



52上面

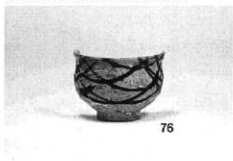




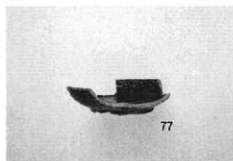
71



74



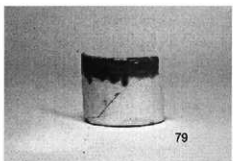
76



77



78



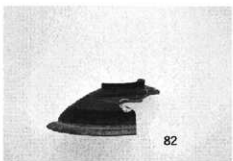
79



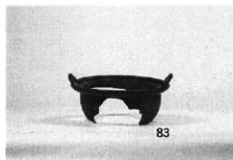
80



81



82



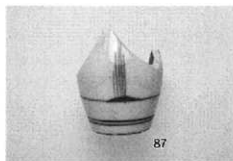
83



84



86



87



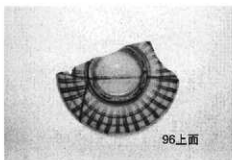
91



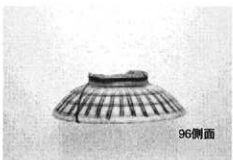
92



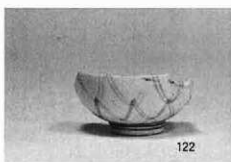
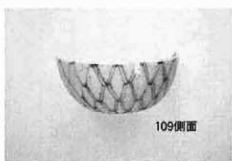
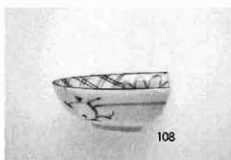
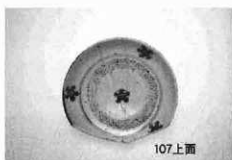
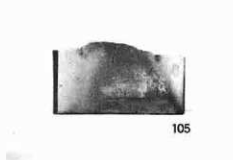
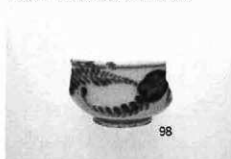
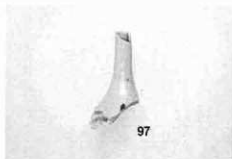
94上面



96上面



96側面

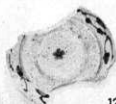




127上面



127側面



128上面



131



132



133



134上面



134側面



137



136



140



151



153側面



153下面



154



155上面



155側面



155下面



156上面



156側面



157



158



159



160



163



164



166



167



168



169



170



171



172上面



172側面



173



176



177



178



186



188



190



191



192



195外面



195内面



220



217



221



222



223



224



225



226上面



226側面



227上面



227内面



228



229上面



229側面



229下面



230



231上面



231側面



232



233



234



236



238



240



243



244



金属・石製品



247上面



247側面



248



249



250側面



250下面



251下面



251側面



252下面



252側面



303



303側面



254



264表



264裏



306



259表



259裏



256表



256裏



258



261表



261裏



260表



260裏



255上面



255側面



292



257



304



296



293内面



293外面



305



246左側面



246表



246右側面



246裏



253表



253側面



262表



262裏



263b表



263a表



263b裏



263a裏



266表



266裏



267表



267裏



268表



268裏



269表



269裏



270表



270裏



271表



271裏



265



272



273



274



275表



275側面



275裏



276裏



276側面



276表



277表



277側面



277裏



277表



278側面



278裏



279側面



279表



279裏



280裏



280表



280側面



281裏



281側面



281表



282側面



282表



282裏



282



282



288表



288裏



283表



283側面



283裏



284表



284側面



284裏



285側面



285裏



285表



286表



286側面



286裏



287表



287側面



287裏



289



290



290上面



291



294



295表



295裏



298



299



300表



300側面



300裏



297表



297裏



301



301側面



302



307表



307側面



307裏



308表



308側面



308裏



309側面



309表



309裏



311



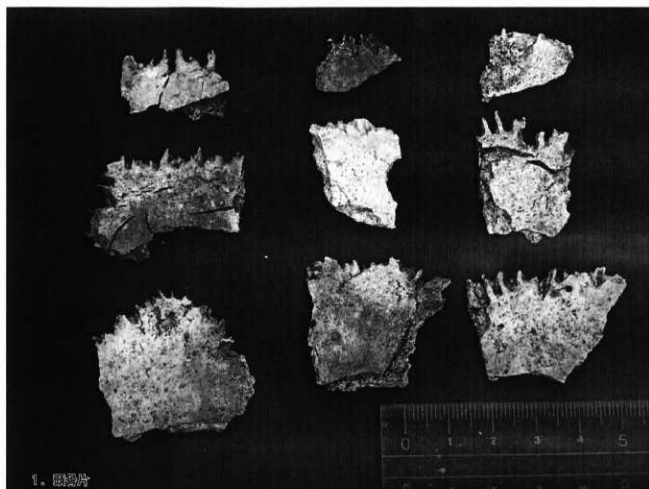
310

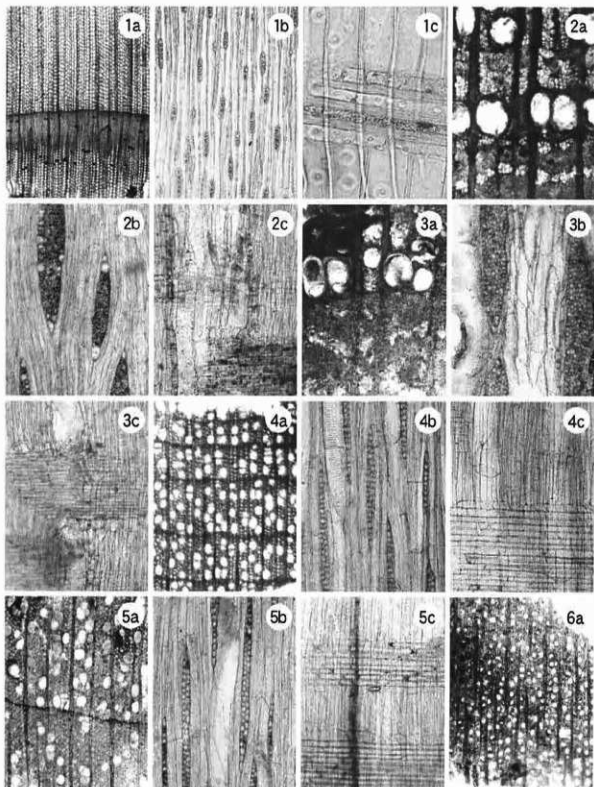


312表



312裏

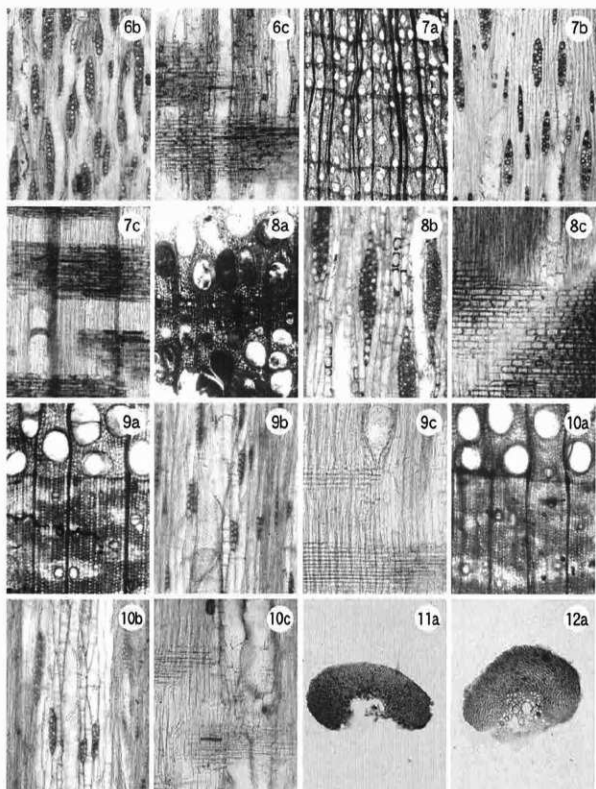




スケール: 

1a-1c.スギ (No.1) 、 2a-2c.ケヤキ (No.2-2) 、 3a-3c.ケヤキ (No.4-2) 、 4a-4c.モクレン属 (No.10) 、 5a-5c.モクレン属 (No.11-2) 、 6a.ナシ亜科 (No.8)

a:横断面 (スケール=250 μ m) 、 b:接線断面 (スケール=100 μ m) 、 c:放射断面 (スケール=1c: 25 μ m, 2c-5c: 100 μ m)



スケール: 

6b-6c.ナシ亜科 (No.8) 、 7a-7c.カエデ属 (No.5) 、 8a-8c.ケンボナシ属 (No.9-1) 、 9a-9c.キリ (No.3-1) 、
10a-10c.キリ (No.4-1) 、 11a.シュロ繊維 (No.3-2) 、 12a.シュロ繊維 (現生)

a:横断面 (スケール=7a-10a: 250 μ m, 11a-12a: 200 μ m) 、 b:接線断面 (スケール=100 μ m) 、 c:放射断面
(スケール=100 μ m)

報告書抄録

ふりがな	しばたじょうあと							
書 名	新発田城跡 発掘調査報告書 IX							
副書名	(第21地点)							
シリーズ名	新発田市埋蔵文化財発掘調査報告 第49							
編著者名	鶴巻康志・奈良貴史・黒沼保子							
発 行	新発田市教育委員会					市町村コード	15206	
事務局	〒959-2323 新潟県新発田市乙次281番地2 新発田市教育委員会 教育部 生涯学習課 文化行政室 TEL0254-22-9534							
報告書情報	A4判 横組1段 本文74頁 写真図版29頁							
遺跡名	所在地	遺跡No.	地形図 1/2.5万	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
新発田城跡 (第21地点)	新発田市 大手町 6丁目 4番16号ほか	92	新発田	37° 57' 15"	139° 19' 21"	2011 0801～ 1021 (51日間)	1.121㎡	陸上自衛隊新発田駐 屯地建物建設
種 別	主な時代	主な遺構		主な遺物			特記事項	
城 郭	近 世	土坑・堀・溝・井戸		古代土師器・須恵器、中世 珠洲・越前、近世肥前・瀬戸 美濃陶磁器・屋根瓦・東北 系陶器・木簡・下駄・漆器			古代～中世と、近世後期～末期を 中心とする遺構を検出した。近世 新発田城跡の外堀の幅、深さを明 らかにした。二ノ丸重臣屋敷地の 一角を検出した。	
要 約								
発掘調査の成果								
・近世新発田城跡二ノ丸の堀と重臣屋敷地の一部を調査した。								
・堀の規模は幅22m、深さは確認面から1.7m、現地表面からは2.4mで、両岸に杭と横木による護岸施設がある。								
・堀の内側には土塁が巡っていたとみられるが、廃城後に削平・掘削・整地を受け、正確な規模は不明である。								
・近世末期から近代初頭にかけて埋められた多数の上坑から近世末期を中心とする陶磁器・木製品が出土し、中には近世後半～末期に居住した重臣「堀」氏の所有を示す墨書・焼印を持つ資料を7点含んでいる。								
・ほかに古代の溝、中世の井戸、土坑墓などを検出し、近世に城が造成される以前、15世紀頃に墓地が営まれていたことが判明した。								
・出土遺物は、近世末期の肥前・瀬戸美濃産の陶磁器、大塚相馬・在地産の陶器が主体で、なかでも贈答品用に生産された相馬駒焼の香茶碗が注目される。								

新発田城跡発掘調査報告書IX

(第21地点)

発 行 平成25(2013)年3月14日
新発田市教育委員会
新潟県新発田市乙次281番地2
印 刷 株式会社 エンジュ

本書は、本文・図版とも中性紙を使用しています。